

又安荅を爲直して親まんご云ひ合ひて、帖木眞は、篋兒乞惕の脱黑脱阿を掠めて取れる黄金の帶を札木合安荅に繫けさせたり。脱黑脱阿の久しく交尾せざる鬘黑き馬に札木合安荅を乗らせたり。札木合は、兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫を掠めて取れる黄金の帶を帖木眞安荅に繫けさせたり。又歹兒兀孫の角ある子羊の如き白馬に帖木眞を乗らせたり。豁兒豁納黑河原の忽勒荅合兒の崖の前に繁れる木の下(忽圖罕の即位處)に安荅ご云ひ合ひて親み合ひて、筵會し歡び樂み合ひて、夜は衾一つに臥し合ひたりき。

疑はしき札木合の言ひ出し

帖木眞、札木合二人親み合ふご一年、次の年の半まで親み合ひて、その住める營盤より一日起たんご云ひ合ひて起

てるは、夏の首の月の第十六の赤く照る日に起ちたり。帖木眞、札木合二人共に車の前に歩みて來つるに、札木合言はく「帖木眞安荅、安荅山に挨り下馬せん。我等の馬飼ごもは、帳房阿都兀臣に有附かん。淵に挨り下馬せん。我等の羊飼ごもは、忽哩合赤楊喉(喉を養ふ食物)に有附かん(明咱每如今挨著山下、放馬的得帳房住)。挨著淵下、放羊的放羔兒的喉嚨裏得喫的」ご云へり。帖木眞は、札木合のこの言を覺りかねて、黙し立ちて後れて起つ間、車ごもを待ちて起たんごし、帖木眞は、訶額命額客に「札木合安荅は言へり。山阿兀刺に挨り下馬せん。我等の馬飼ごもは、帳房阿都兀臣にありつかん。淵豁勒に挨り下馬せん。我等の羊飼ごもは、豁紐赤楊喉忽哩合赤楊にありつかん。ご言へり。我は、彼のこの言を覺りかねて、彼

李兒帖兀眞の穎悟

への答を何とも言はざりき、我母に問はんとて來ぬ、我「云へり。訶額侖額客の聲せざるに、李兒帖兀眞言はく「札木合安荅は、厭き易しと云はるゝなりき。今我等を厭く時となれり。只今の札木合安荅の語れる語は、我等を便ち圖らんとする言ならん。我等は勿下馬せそ。この動きたるに依り爽かに離れ、夜通し掛けて動かん便ちと云へり。

別速惕の家に遺れる闊闊出

李兒帖兀眞の言にて善しとして下馬せず、夜通し動きて來つる間に、途に泰赤兀惕を過ぎたり。泰赤兀惕も驚きて、本夜便ち指し向きて札木合の處に動きたり。泰赤兀惕の伴なる別速惕氏の營盤に一人の小さき闊闊出と云ふ子を營盤に遺したるを、我が眾取りて來て、訶額侖額客に與へたり。それ

從ひ來ぬる諸部の眾

を訶額侖額客養へり。

その夜夜通しして、日明くれば見れば、札刺亦兒(親征錄)、札刺兒部(元史)、また押刺伊而部(合赤溫脫忽喇溫)、合喇孩脫忽喇溫、合喇勒歹脫忽喇溫、この三人の脫忽喇溫兄弟、夜通しし合ひて來たりき。又塔兒忽惕(所出詳か)、合荅安荅勒都兒罕、兄弟五人の塔兒忽惕も來たりき。又蒙格秃乞顔の子翁古兒等も、徹失兀惕(所出詳か)、巴牙兀惕(卷一なる馬阿里黑伯牙兀歹の裔、輟耕錄)、伯牙吾氏(又)、共に來たりき。巴嚕刺思(親征錄)より忽必來(元史)、虎必來(伯岳吾氏)、忽都思兄弟(伯岳吾氏)も來ぬ。忙忽惕より哲台、多豁勒忽徹兒必(徹兒官名なり。後に任ぜられたる官の名を以て追稱せり。次の幹歌連雪亦客秃も同じ)、兄弟二人來ぬ。李幹兒出の弟、幹歌連徹兒必(元史)、食志の幹闊烈闐里必(元史)、阿嚕刺惕(元史)、博爾阿

兒刺氏（蒙語迭兀單稱の弟にて、察兀兒罕）より離れて、その兄孛斡兒出（のみに係り、速別額台には係らず）に合ひに來ぬ。者勒篋の弟（親征速不台拔都、元史速不台）は、兀噶罕（元史兀良合）より離れて、者勒篋に合ひに來ぬ。別速惕より迭該窟出古兒、兄弟二人も來ぬ。速勒都思（元史遜都思氏）より赤勒古台、塔乞、泰赤兀歹、兄弟ごもも來ぬ。札刺亦兒の薛扯朶抹黒も、阿兒孩合撒兒、巴刺なる二人の子と來ぬ。晃豁壇より雪亦客禿徹兒必も來ぬ。速客虔の者該晃答豁勒の子速客該者溫も來ぬ。捏兀歹察合安兀注も來ぬ。（捏古思氏の察合安兀注、捏古思氏は赤那思氏とも云ふ。喇失惕額）孛斡忽訥兀惕の輕吉牙歹、豁囉刺思（卷一なる豁哩刺兒、火魯刺思）より薛赤兀兒朶兒邊より抹赤別都溫も來ぬ。亦乞喇思（親征錄）

亦乞刺思（元史亦乞列思）の不圖（親征錄元史）孛徒（元史本傳孛徒）も、こゝに塔（不圖は、帖木眞の妹帖）の牙勤より種（木命の夫となれり）の索も來ぬ。斡囉納兒（元史斡刺納兒、斡耳納斡魯納台氏）より只兒豁安も來ぬ。巴嚕刺思より速忽薛禪も、合喇察兒なる子と來ぬ。（この合喇察兒は馬の五世）又巴阿嚕の豁兒赤兀孫額不堅（豁兒赤兀孫翁）、闊闊搠思も、あまたの巴阿嚕（一團來ぬ）。

豁兒赤兀孫の符命の宣揚

豁兒赤來て言はく、孛端察兒孛黑多（孛端察兒賢人）の拏へて取れる婦人より生れたる我等の祖は、札木合の祖と腹一つの胞漿（しやうひと）一つの者なりき。我等札木合より離れざるものなりき。我等神告（神の御告）降りて、我が目に見せたり。慘白き乳牛來て、札木合を繞りて行きて、その家車に觸るゝと、札木合に觸れて、片

方の角を折りて、片角となりて、我が角をおこせと云ひ云ひ、
 札木合の處に吼え吼え、土を揚げ揚げ立ちたり。角無き慘白
 き牡牛は、大なる帳房の牀を上うへに擡もたげて、駕がして拽ひきて、帖木
 眞ちんの後しりより大車路おほくるまぢに依より吼え吼え來くるに、皇天后土あまつかみくつかみ議はかり合
 ひて、帖木眞てむちんを國くにの主人うしと爲なれと云ひ、國くにを載のせて持もちて來
 たりと云ひ、神告みつげを目めに見みせて我われに告つげたり。帖木眞てむちん汝なんぢ國くにの
 主人うしと爲ならば、我われを我われがかく告つげたる故ゆゑに、いかに樂たのまし
 むる、汝なんぢと云へり。帖木眞てむちん言いはく、實まことにかく國くにを知しらしめば、(管
めば)萬戶ばんこの官人くわんにんと爲なさん、と云へり。豁兒赤こくじちは、多おほき理り由いうを告
 げたる人ひとを我われを萬戶ばんこの官人くわんにんと爲なすとも、何なにの樂たのみか有あらん。
 萬戶ばんこの官人くわんにんと爲なして、國くにの美うつくしき好よき少をとめ女めらを自じ在ざいに取とら

豁兒赤の欲望

札木合より離れ
來ぬる諸部の眾

しめて、三十人さんじふにんも婦人をみなあらしめ、又何またなににても我われが語かたることを
 迎むかへ聽きけと云へり。(前段に豁兒赤兀孫を翁と云へるは、後に與へたる
 尊稱を以て追記せるなり。婦人をあまた望みたる
を見れば、この時はまだ壯かりしならん。)
 忽く難なんを頭かしらとせる格ぐ你に格げ思すの一團いちだんも來きぬ。又また荅だ哩り台たい幹かん惕つ赤
 斤ぎんの一團いちだんも來きぬ。札荅ちやだ欄らんより木勒むらく合か勒らく忽くも來きぬ。又また溫うん眞ちん(親征
嫩眞部)撒さ合か亦い惕と(親征撒さ合か夷い部ぶ)の一團も來ぬ。札木合よりか
 く離はなれ動うごきて、乞き木兒むゐ合か小を河がの阿あ亦い勒らく合か喇ら合か納なに下げ馬ばして
 居をる時とき又また札木合ちやむかより離はなれて、主兒ちゆゐ勤きん(即ち卷一の)莎しや兒ゐ合か秃と主ぢゆ
 兒ゐ乞き(即ち卷一の)忽く子こ撒さ察ちや別べ乞き(即ち卷一の)泰たい出ちゆ(即ち卷一)二人ふたり
 の一團いちだん又また捏ね坤くん太たい石しの子こ忽く察ちや兒ゐ別べ乞き(親征火ちや察ちや兒ゐ)の一團又また
 忽く秃と刺ち罕かん(卷一の)忽く子こ阿あ勒らく壇たん幹かん惕つ赤ち斤ぎん(卷一の)一團いちだん是これ等らは

二たび古喇勒古の青湖の札營

又札木合より離れ動き、帖木眞に乞木兒合小河の阿亦勒合喇合納に下馬して居る處に會ひ下馬せり。其處より起ちて、古喇勒古山の内なる桑古兒小河の合喇主嚙堅(卷二の合)の闊闊納兀兒(湖水)に下馬せり。

成吉思合罕推戴の盟

阿勒壇忽察兒撒察別乞等議り合ひて、帖木眞に言へらく「汝を罕ご爲さん。帖木眞を罕ごなさば、我等は多き敵に先鋒に奔りて、顔好き少女妃を、帳殿の房に入りて、得て伴れ來て與へん、我等(汪格)他國民の顯美しき妃少女を、臂節好き驢馬に騎らしめて伴れ來て與へん、我等野の獸を卷狩せば、先驅して與へん、我等(卷六なる成吉思汗の阿勒壇忽察兒を責めたるに似たり)曠野の獸の腹を一竝に寄せて與へん。懸崖の獸の腿を一竝に寄せて

新庭の政務分任 豁兒赤

與へん、我等戰ふ日に汝の號令に違はば、我等の家業より妃婦人より離れさせて、我等の黒き頭を地の土に棄てて去れ。平けき日に汝の協議を壞らば、我等の男ごもの家業より妻子より別れさせて、主なき地に棄てて去れ。かく言を定め合ひて、これより盟して、帖木眞を成吉思合罕(強盛なる大君)ご名づけ、罕ごなしたり。(帖木眞の汗となれるは、蒙古源流に據れば、己酉の年に治五年、宋の淳熙十六年、金の大定二十九年、西紀一一八九年なり。)

成吉思合罕罕ご爲るご、孛斡兒出の弟斡歌來徹兒必(前の連徹)、箭筒を帶べり。合只溫脫忽喇溫(前の合赤溫)、箭筒を帶べり。哲台多豁勒忽徹兒必、兄弟二人、箭筒を帶べり。(箭筒を蒙語に筒を帶ぶる者を豁兒臣又は豁兒赤と云ふ。元史塔察兒の傳に「火兒赤者、佩囊韃侍左右者也」は、これ

り。汪古兒(古前の翁)、雪亦客禿徹兒必合答安答勒都兒罕三人言はく「朝の飲物を勿缺かせそ。夕の飲物を勿慢りそ。て、巴兀兒臣と爲れり。(巴兀兒臣、また巴兀兒「親烹飪以奉上飲食者、曰博爾赤、これなり。)迭該言はく「二歳の羯羊を渴かして、朝に勿缺きそ。寝ぬる時に勿後れそ。花の色を羊を牧して、車底に満さん。黄色の羊を牧して、圈子に満さん。貪食は悪くありき。我羊を牧して、白腸を食はん。我にて、迭該は、羊を牧せり。(羊を裕ひ、羊飼を裕你臣、又は裕你赤と云。)その弟古出古兒(出古兒)言はく「鎖ある車を、その轄を勿倒れしめそ。車軸ある車を、車路の上に勿壞れしめそ。云ひて、房車を治めん。云へり。多歹扯兒(前に見え)は、家の内の婢僕どもを統べん。云へり。忽必來、赤

勒古台合兒孩脫忽喇溫(前の合喇孩)三人に合撒兒と共に刀を帯びて、勢ふものは、その首を斬れ。荒ぶるものは、その脗を刺せ。云へり。(刀を兀勒都赤と云ふ。元史兵志に「侍上帶刀及弓矢者曰云都赤、これなり。)別勒古台合喇勒歹脫忽喇溫二人に「驪馬を執れ。馬官(阿黑塔)と爲れ。云へり。泰赤兀歹、忽圖抹哩赤(前に見え)、木勒合勒忽三人に「馬羣を牧せよ。云へり。(馬羣を蒙語に阿都と云ふ。)阿兒孩合撒兒塔孩(前の塔)速客該(前の速客)察兀兒罕四人に「遠き豁斡察黑(箭の名)近き斡多喇(箭の名)となれ。云へり。(征討の事を掌れるならん。官名は、いまだ考へ得ず。)速別額台巴阿都兒言はく「鼠となりて、聚め合はん。黒き老鴉となりて、外にある物を收め合はん。馬覆(牙勒都速)の毛氈となりて、覆ひ合はん。試みん。風除の毛氈となり

舊臣を勞ひ新附を獎むる諭旨

て家を禦ぎ合はんご試みんご云へり。

格兒 格哩思格列勒敦

そこに成吉思合罕成吉思合罕なりて、孛斡兒出孛斡兒出者勒篋者勒篋二人に言

へらく「汝等二人、我を影より外外に伴伴なき時に、影影なりて、我

薛兀迭兒

薛兀迭兒

薛兀迭兒

薛兀迭兒

薛兀兒

が心を安からしめたるぞ、汝等心の内に存れ存れご云へり。尾よ

薛揚乞勒

薛兀兒

薛揚乞勒

薛兀兒

り外外に鞭鞭なき時に、尾尾となりて、我が心を安からしめたるぞ、

赤出阿

薛兀兒

只瞻格

薛兀兒

汝等我が智智の内に存れ存れご云へり。汝等二人は、前に立てるに

微額只

薛兀兒

只瞻格

薛兀兒

依り、此處此處に居る者者ごもに長長となりて居らずや、汝等汝等ご云へ

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

り。又成吉思合罕言はく「皇天后土皇天后土に力を添へて祐祐けられば、

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

汝等、札木合安札木合安苔の處より我を我ご思ひて伴伴ならんごて來

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

つる老人老人ごもは、我が福福ある伴伴ならざらんやご云へり。己

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

も己己も委任委任せり、汝等汝等に（この句、恐らくは脱文あらん。）

成吉思汗の即位を聞ける王罕の賀辭

成吉思合罕を罕罕ごなしたりごて、客喇客喇亦惕亦惕の脱幹脱幹哩勒罕哩勒罕

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

に、苔孩苔孩速格速格該該（速客該速客該）二人を使使に遣りたり。脱幹脱幹哩勒罕哩勒罕は、

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

帖木真帖木真なる我が子を罕罕ご爲したるは甚甚だ善善し。忙豁忙豁勒勒に君

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

なく、いかにか過過さん、汝等汝等此此の協議協議を勿勿壞壞りそ。協議協議を結結べ

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

るを勿勿解解きそ。衣衣の領領を勿勿扯扯きそご云ひて遣りて（畢りのては、

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

か。然らずば、下に脱字あらん。）

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

薛兀兒

成吉思汗實錄卷の三終り。

成吉思汗實錄卷の四

阿勒壇忽察兒に
言はしむる札木
合のいやみ

阿兒孩合撒兒察兀兒罕二人を札木合の處に遣りた
れば、札木合言はく「阿勒壇忽察兒二人に言へ」とて、言ひて遣
るには「阿勒壇忽察兒汝等二人は、帖木眞安荅と我と二人の
間に、安荅の腰窩を戳して、肋骨を攫みて、何ぞ離れしめたる、
汝等安荅我二人を離れしめず一處に居る時、帖木眞安荅を
罕に何ぞ爲さざりし、汝等今何を只心に思ひてか罕となし
たる、汝等阿勒壇忽察兒汝等二人は、言へる言に従ひ、安荅の

心を安からしめて、我が安荅に善くも伴となりて與へよと云ひて遣りて、

盗みしたる札木合の弟の殺され

撒阿里の原のありか

その後札木合の弟台察兒(元史親征錄)秃台察兒(山の名)は、札刺麻(山の名)の前なる幹列該不刺黑(親征錄元史)玉律哥泉(のいづみ)に住めるに、我等の撒阿里客額兒に居る拙赤荅兒馬刺(親征錄)、搠只塔兒馬刺(史)、元(只)搠の馬羣を盗みに往きけり。(撒阿里客額兒は、撒阿里の原にて、親征錄元史に薩里川とあり。薩里河ともあるは、非なり。河にはあらず、廣き谷なり。川なれば、谷の義にも用ふ。元史明宗紀に據るに、天曆二年正月和寧の北に即位し、三月潔堅察罕の地に止まり、五月四日、幹耳罕水、幹兒桓河の東に至り、二十三日、秃忽刺河、土兀刺河の東に至り、六月十五日、撒里怯兒の地に至り、二十一日、闊朶傑阿刺倫に至り、それより南に進みて、上都に向へり。撒里怯兒は、即ち撒阿里客額兒なり。闊朶傑阿刺倫は、此書の末に見ゆる闊迭額阿喇勒にして、客魯噠河の中洲なり。西より進みて、闊迭額島より前に撒阿里原に至れるを見れば、撒阿里原は、客魯噠河の上流の地なるべし。金幼孜の北征錄に、雙泉海、即ち撒里怯兒、元太祖發跡之所、舊建宮殿、山川環繞、有二海、子西北有三關口、通飲馬河、土拉河とあり、その宮殿は、即ち太祖紀に薩里川、哈老徒、西行宮とある處なれば、二海子の一つは、必ず哈老徒の海子、今の噶老台の池

なら) 台察兒は、拙赤荅兒馬刺の馬羣を盗みて率て去りき。拙赤荅兒馬刺は、馬羣を盗みて去られて、從者ごもに心臆せられて、拙赤荅兒馬刺のみ追ひて往きて、夜その馬羣の邊に到りて、己が馬の鬣の上に腹にて伏して到りて、台察兒の脊梁を折るべく射て殺すに、馬羣を率ゐて來ぬ。

荅蘭巴勒主楊の戦

「弟台察兒を殺されたり」とて札木合が頭となれる札荅欄は、十三部伴なひて三萬人となりて、阿刺兀兀惕(明譯文は、土兒合兀惕、二山の名。親征錄)阿刺烏秃刺烏二山(二山の名。親征錄)に依り越えて、成吉思合罕の處へ出馬して來ぬとて、亦乞喇思より木勒客脫塔黑(親征錄)慕哥秃(元史)磨里秃(元史)孛囉勒歹(親征錄)卜欒台(孛囉勒歹)二(人)成吉思合罕に古喇勒古に居る處に報告を送り來ぬ。この

報告を知るに、成吉思合罕は、十三團ありき。(團は、蒙語古哩延、
惕なり。親征録に十三翼と譯し。)亦三萬人となりて、札木合の迎へ
たるは、支那風に書きたるなり。)に出馬して、荅闌巴勒主惕(元史 親征録)荅闌版朱思之野(の野)に立ち合
ひ(對戰)て、成吉思合罕は、札木合にそこに動かされ(敗ら)て、幹
難の哲唎捏合卜赤孩(哲唎捏)に遁れたり。札木合言はく、幹難
の哲唎捏に遁れしめたり、我等と云ひて、我等と云ひて、回るとき、赤那思の子
ら(一族の子)を七十の鍋に煮て、捏兀歹察合安兀洼の頭を斬り
て、馬の尾に拖きて去りき。(赤那思氏は、喇失惕額丁に依れば、察刺孩領
堅都赤都は、牡狼烏魯克眞赤那は、牝狼の義にして、赤那思は、狼なる赤那の複稱
なり。親征録の撰者は、修正秘史を譯するに當り、赤那思の姓氏なることを知ら
ず、半途爲七十二竈、烹狼爲食と譯せり。)

そこに札木合を其處より回らすに、兀魯兀惕(元史 朮赤
台の傳)

兀魯兀台(氏)の主兒扯歹(元史 朮赤台の傳 朮徹帶)は、兀魯兀
惕(親征録) 兀魯吾部)を率ゐ、忙忽惕(畏答兒の傳) 忙兀氏)の忽余勒答兒
(朮赤台 忽因答兒傳 畏答兒)は、忙忽惕(親征録) 忙兀部)を率ゐ、札木
合より離れて、成吉思合罕の處に來ぬ。晃豁壇の蒙力克額赤
格(蒙力克)は、そこに札木合の處に居りて、蒙力克額赤格、その
七人の子、札木合より離れて、そこに成吉思合罕に合ひに
來ぬ。札木合より此等の民來ぬとて、成吉思合罕は、己が處に
國來ぬと喜び、成吉思合罕は、訶額侖兀眞合撒兒、主兒勤の
撒察別乞、泰出らと共に、幹難の林の裏に筵會せんと云ひ合
ひて筵會したるに、成吉思合罕に、訶額侖兀眞に、合撒兒に、撒
察別乞になご首として、一つの甕(馬乳酒を入)を傾けけり。又撒

主兒勤の二妃の怒

不哩に肩斫らるる別勒古台

察別乞（親征錄）の少（莎兒合秃主兒乞の生母）母（親征錄）額別該（親征錄）薛徹別吉次母
 野別該（親征錄）を首（親征錄）として一つの甕（親征錄）を傾けたる故に、豁哩眞合屯忽
 兀兒（親征錄）臣合屯（莎兒合秃主兒乞の二妃）忽兒眞火里眞二哈敦（親征錄）二女は「我
 を首（親征錄）こそせず、額別該（親征錄）を首（親征錄）として何ぞ傾けたる」と云ひ、厨官失
 乞兀兒（親征錄）主膳者失丘兒（親征錄）を打ちけり。打たれて厨官失乞
 兀兒言はく「也速該巴阿都兒捏坤太石二人死にたる故に、か
 く我が打たれたるはいかに」と云ひて、大聲にて哭きけり。
 その筵席を、我等よりは別勒古台（親征錄）整治し、成吉思合罕の驢
 馬を執りて立ち居りき。主兒勤よりは不哩孛闊（親征錄）播里
 その筵席を整治し居りき。我等の聚馬處より（蒙語）乞魯額思（親征錄）
 錄元乞列思（親征錄）史は禁外繫馬所と注せり。合塔斤の人韁皮を盗みたる

に、盜人を拏へき。不哩孛闊その人を回護ひて、別勒古台は常
 の如く搏ち合ふに、右の袖を脱ぎて赤膚にて行きたりき。か
 く脱ぎたるその赤膚の肩を、不哩孛闊環刀にて劈くべく斫
 り（斫き）けり。別勒古台かく斫られたれども、何（何）もなさず争
 はず、血を流して行くを、成吉思合罕木蔭に居て、筵席の内よ
 り見て、出でて来て言はく「何ぞかく爲されたりし、我等」と云
 へるに、別勒古台言はく「傷は未なりき。我が故に兄弟に中惡
 く爲り合はんや。我、差支へず。我、稍好くあり。兄弟に纔に慣れ
 合ひ居る時、兄やめよ。暫く立ちこまれ」と云へり。

成吉思合罕は、別勒古台かく勸むれども肯かず、木の枝を
 折るべく引き（折り）て、皮桶の撞乳棒を抽きだして執りて打

成吉思汗の棒打

ち合ひて、主兒勤チウニルキんに勝ちて、豁哩眞合屯カクニルチンカトん、忽兀兒臣合屯クワツニルチンカトん二人を奪ひて取れり。却て彼等に「睦ムツび合はん」と云はれて、豁哩眞合屯カクニルチンカトん、忽兀兒臣合屯クワツニルチンカトん二人を還して、睦ムツび合はんとして使し合ひて居る時に、乞塔惕キタテツの民の阿勒壇罕アトルタンカン（金の章）は、塔塔兒タタニルの篋古眞ケコチン、薛兀勒圖セウワツレツ（親征錄）篋兀眞笑里徒ケワツチンセウリツ等に、その命に従はれず、王京ワンキん丞相シヤウシヤウ（王京は、金の國姓なる完顔の轉。金史）に「軍を整へて、勿蹶躅ムツツひそ、便すなはち」と言ひて遣りき。（金史の紀傳を見るに、この役は、金の章宗承安元年、成吉思汗三十五歳の時なり。）「王京丞相は、篋古眞薛兀勒圖が頭たる塔塔兒を、兀勒札河ワツレツカハ（金史内族の傳）幹里札河カンリツカハ（今の烏爾載河）に沂まかのほり、馬羣糧食バクンリヤウシヤクごめに追捲りて來ぬ」とて、噂ウハサを知れり。その噂ウハサを知るこ、

完顔襄の塔塔兒征伐

成吉思汗王罕の塔塔兒夾み攻め

成吉思合罕言はく「前の日より塔塔兒の民は、御祖なる父を失ひたる讎ある民なりき。今この機會に力合はせん」（金の）夾めみ攻め、我等われらと云ひて、脱幹哩勒罕トツカンリツレカンの處に「阿勒壇罕アトルタンカンの王京丞相ワンキんシヤウは、塔塔兒の篋古眞薛兀勒圖が頭たる塔塔兒を兀勒札河ワツレツカハに沂まかのほり追捲りて來ぬ」と云へり。我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾み攻めん、我等脱幹哩勒罕額赤格疾トツカンリツレカンガクシヤク來よ」とて、この傳言を致しに使を遣りぬ。この傳言を致さるゝと、脱幹哩勒罕言はく「我が子は勺卜シヤウハツ（丁度善し、善き機會なり）と云ひておこせたり。力合はせん、我等と云ひて、第三の日に軍士を聚めて、軍を起して、脱幹哩勒罕は速に赴きて、成吉思合罕、脱幹哩勒罕二人は、主兒勤チウニルキんの撒察別乞サツサツベツキ、泰出タイシュツが頭たる主兒勤チウニルキん（親征錄）月兒斤グヱツニルキん）に

言ひて遣るに「前の日より我等の御祖なる父を失ひたる塔
 塔兒を今この機會に夾み攻めん。諸共に出馬せん」と云ひて
 遣りぬ。主兒勤に來らるゝことを六日待ちて「待ちかねて、成
 吉思合罕、脱斡哩勒罕二人、諸共に軍を起して、兀勒札に沿ひ、
 王京丞相と力合はせに來つる時、兀勒札の忽速秃失秃延、納
 喇秃失秃延(親征錄、納刺秃失圖之野)に塔塔兒の篋古眞が頭たる塔
 塔兒は、そこに寨に據りき。成吉思合罕、脱斡哩勒罕二人は、か
 く楯籠れる篋古眞薛兀勒圖をその寨より拏へて、篋古眞薛
 兀勒圖をそこに殺して、彼の銀の繡車、東珠ある衾を成吉思
 合罕そこに取りき。

札兀惕忽哩の官
 王罕の號

篋古眞薛兀勒圖を殺したりとて、成吉思合罕、脱斡哩勒罕

二人(この二人の名は、上の篋古眞の上又は)王京丞相は、篋古眞薛兀
 勒圖を殺しけり。と知る。甚だ喜びて、成吉思合罕に札兀惕
 忽哩の名を與へたり。(親征錄、察兀忽魯。札兀惕は、百なる札溫の複稱
 哩牙、聚會と云ふ。忽喇勒などの語根なれば、牧長の義なり。客喇亦惕の脱斡
 るべし。然らば札兀惕忽哩は、百戸の長の譯語ならんか。)客喇亦惕の脱斡
 哩勒に王の名をそこに與へたり。王罕の名は、王京丞相の名
 づけたるに依り、その時より爲れり。王京丞相言はく「篋古眞
 薛兀勒圖を汝等が力合はせて殺したるは、阿勒壇罕に最大
 きなる助を爲せり。汝等、汝等の此の助を阿勒壇罕に奏し上
 げん。我、成吉思合罕に此より大きな名を加ふることを、招
 討の名を與ふることを、阿勒壇罕知しめさん」と云へり。王京
 丞相は、そこよりかく喜びて退けり。成吉思合罕、王罕二人は、

そこに塔塔兒を虜へて分け合ひて取り合ひて、家家に回りにて下馬せり。

塔塔兒の寨に遣れを幼兒失乞刊忽都忽

塔塔兒の楯籠れる納喇禿失禿延に下したる營盤の内を掠むる時、一人の小さい幼兒を棄てたるを我等の軍士ども營盤より得けり。金の環の鼻環ある、金絲の布に貂鼠にて裏附けたる腹掛ある小さい幼兒を伴れ来て、成吉思合罕は、訶額命額客に給事にこて與へたり。訶額命額客言はく「好き人の子なるぞ。家系善き人の胤なるぞ。五人の子には弟第六にて子こなさん。失乞刊忽都忽と名づけて母育へり。」(後の文には失吉刊の字なし。親征錄元史に忽都忽)

主兒勤の殺掠を聞ける成吉思汗の怒

成吉思合罕の老營は、哈哩勒禿納兀兒に在りき。(哈哩勒禿

哈連徒澤。露西亞の地圖に、克魯倫河の南流の東に折る、處より西南に當り、露國東方經營圖には、哈哩隆湖なく、それより東に倚りて、ハラリオル泊あり。哈哩)老營に残れる者を、主兒勤は、五十の人の衣服を剥ぎけり。十の人を殺しけり。主兒勤に然爲されたり。こて、我等の老營に残れる者ども、成吉思合罕に告げたれば、この報告を聽くこ、成吉思合罕甚く怒りて言はく「主兒勤にいかでかかく爲されたりし、我等。幹難の林に筵會せる時、厨官失乞兀兒をも彼等打ちたり。別勒古台の肩をも彼等斫りたり。睦び合はんこ云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣、二女を還して與へたり、我等。その後曩の讎あり怨ある我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾攻に出馬せんこて、主兒勤を六日待ちても來られざりき。今又敵に倚り、敵に彼等も

撒察泰出の捕り殺され

爲れり」云ひて、成吉思合罕は、主兒勤の處に出馬せり。主兒勤を、客魯噠の闊朶額阿喇勒の朶羅安孛勒荅兀惕に居る彼等の民を虜へたり。(闊朶額洲は、卷十五に闊迭兀阿喇勒ともあり。朶羅安は七つ孛勒荅兀惕は孤山なる孛勒荅黒の複稱にし。親征録。朶欒盤陀山。卷十五の末に、朶羅安孛勒荅黒とあり。中島の小山にして、後に成吉思汗の)撒察別乞、泰出二人は、僅に身を遁れたり。彼等の後より襲ひて、帖列格禿阿馬撒兒に(帖列格禿南に當り、租里格圖と云ふ處ありて、内蒙古に往く路に當れるは、帖列格禿の轉なるに)馳せ至りて、撒察別乞、泰出二人を拏へたり。拏へて成吉思合罕は、撒察泰出二人に言へらく「前の日我等は何ぞ言ひ合ひしか」と云はれて、撒察泰出二人言はく「言へる言に我等は従はざりき。我等の言に従はしめよ」と云ひて、その言を

札刺亦兒の人模合里等の降附

知らせて、任せ(頸を)て與へたり。彼等の言を知らせられて、彼等の言に従はしむべく片付け(殺)て、直に其處に棄てたり。(前の言とは、成吉思汗を立てたる時の盟の言を云へるなり。)撒察泰出二人を片付けて、回りに來て、主兒勤の民を動かす時、札刺亦兒の帖別格禿伯顏(帖別格禿の長者)の子古溫兀阿(元史木華黎の傳。孔溫窟哇。赤刺溫孩赤。元史忙哥赤老溫愷赤。者卜客三人は、その主兒勤の處に居りき。古溫兀阿は、模合里。元史木華黎)不合(蒙韃抹歌)なる二人の子伴れにて見えて言はく

爾の戸口の奴さなさん、爾の戸口より逃廻らば、彼の脚筋を断れ。爾の門の近習の奴さなさん、爾の門より離れば、彼の肝を割きて棄てよ」と云ひて與へたり。赤刺溫孩赤も、統格合失

なる二人の子を成吉思合罕に見えしめて言はく爾の金の
 戸口を守りて居よとて奉れり我爾の金の戸口より外に去
 らば彼の命を絶ちて棄てよ爾の寛き門を擡げて上げよ擡
阿朮る事をし阿朮とて奉れり我爾の寛き門より外に去らば彼の心臓
 を踏みて棄てよと云へり者卜客をば合撒兒に與へたり者
 卜客は主兒勤の營盤より孛囉兀勒親征錄元史博羅渾本傳博爾忽
 と云へる小き幼兒を伴れ來て訶額侖額客に見ゆべく與へ
 たり。

主兒勤の家より
 得たる幼兒孛囉
 兀勒

訶額侖の養子四
 人

訶額侖額客は篋兒乞惕の營盤より得られたる古出卷三の
 と云ふ幼兒を泰赤兀惕の内なる別速惕の營盤より得られ
 たる闊闊出と云ふ幼兒を塔塔兒の營盤より得られたる失

吉刊忽秃忽と云ふ幼兒を主兒勤の營盤より得られたる孛
 囉兀勒と云ふ幼兒をこの四人を家の内に養ふに訶額侖額
 客は子ごもの爲に晝は視る目夜は聽く耳と誰に爲らしめ
 んかとて家の内に養へり。

主兒勤の民の緣
 由

この主兒勤の民の緣由主兒勤と爲るには合不勒罕の七
 人の子の大兒幹勤巴喇合黑ありき其の子莎兒合秃主兒乞
 ありき主兒勤と爲るには合不勒罕の子ごもの兄と云ひて
 その民の中より擇びて肝はに膽ある、拇指にて善く射る、肺
 滿つる心ある胸に肺の口滿つる大聲を剛氣ある、男ごこに技
 能ある、猛き氣力あるを擇びて與へて、剛氣あり膽あり勇あ
 り抗ふ者無き蒙拙兒乞篋思譯明但有去處皆攻破無人能敵が

故に、主兒勤チウニルキン云はれたる緣由このもとかくあり。かゝる勇ある民を
成吉思合罕チンギスカンは降服まつろはせて、主兒勤チウニルキン姓ある者を滅せり。彼等の
民を部落トクを、成吉思合罕チンギスカンは、己が昵近チツキンの民タミとなしたり。

別勒古合に殺さ
るゝ不哩李可

成吉思合罕チンギスカンは、一日不哩李可フビライカ、(前不)別勒古台ベレクグタイ二人に搏ち
合はしめん(相撲取)と云へり。先に不哩李可フビライカは、主兒勤チウニルキンの處に
居たりき。不哩李可フビライカは、別勒古台ベレクグタイを片手にて拏へて片足にて
撥ねて倒して動かせず壓着おしけたりき。不哩李可フビライカは、國の李可ライカ
(力)そこに別勒古台ベレクグタイ不哩李可フビライカ二人を相撲せしめたり。不哩李可フビライカ
可カは、勝たれざる人ひとなれども、殊更ことさらに倒れて與へたり。別勒古
台タイは、壓着おしけかね、肩かた把りて、臀しりの上に上りて、別勒古台ベレクグタイ顧みて、
成吉思合罕チンギスカンを見れば、合罕カカンは下脣したくちびるを咬めり。別勒古台ベレクグタイ悟り得

て、彼の上に馬乗して、彼の二つの領を交へ扼へて、彼の脊梁せ
を膝ひざに据ゑて折りて遣りたり。不哩李可フビライカは、脊梁せを折られて
言はく「別勒古台ベレクグタイに勝たれ(負)ざるなりき。我、合罕カカンを恐れて、伴
り倒れ猶豫たぬちひて、命を取らせたり。我われ云ふこ、死にて去りぬ。
別勒古台ベレクグタイは、彼の脊梁せを扯ひき折るこ、引摺りて除けて去りぬ。
合不勒罕カフベレカンの七人の子の兒こ斡勤オキン巴兒ハエ合黒カクありき。次に巴兒ハエ
巴阿秃兒ハアトルありき。その子也速該エスガイ巴阿秃兒ハアトルありき。(明譯この間に
下の句あり。)
也速該エスガイ子こ即すなはち是なり太祖タイソ彼かれ壇(巴兒)の次つぎに忽秃黒圖蒙列兒クツクヘンテムンリエ(卷一の忽秃
黒秃蒙古兒)
ありき。その子不哩フビライありき。取り合ひ(争ひを)て、巴兒ハエ壇ハエ巴阿秃兒ハアトル
の子より隔たり、巴兒ハエ合黒カクの勇ある子らに伴ともとなれるが爲
に、不哩李可フビライカ國の李可ライカ別勒古台ベレクグタイに脊梁せを折られて死にたり。

その後のちにはと雞の年（我が土御門天皇建仁元年辛酉、金の章宗泰和元年、宋の寧宗嘉泰元年、西紀一二〇一年、成吉思汗四十歳の時）
 合塔斤、撒勒只兀惕（親征録）哈荅斤、散只兀（一）つになりて、合塔
 斤の巴忽、擲囉吉が頭たる合塔斤、撒勒只兀惕の赤兒吉歹巴
 阿禿兒が頭たる撒勒只兀惕は、朶兒邊（親征録）朶魯班（塔塔兒
 に睦び合ひて、朶兒邊の合只溫別乞が頭たるもの、塔塔兒の
 阿勒赤塔塔兒（名、塔塔兒の分部の案、赤塔塔兒）の札隣不合が頭た
 るもの、亦乞喇思（親征録）亦乞刺思（親征録）の土格馬合が頭たるもの、
 翁吉喇惕（親征録）弘吉刺（親征録）の迭兒格克額、篋勒（親征録）帖木哥阿蠻（明
 は、二人とせり。今親征録、喇失惕（親征録）阿勒灰等、豁囉刺思（卷一の豁囉刺兒、火
 の集史の一人とせるに従ふ。）
 魯刺思（親征録）の綽納黑察合安が頭たるもの、乃蠻より古出兀惕乃
 蠻（乃蠻の分）の不亦嚕黑罕（親征録）盃祿可汗（元史）不魯欲罕（魯欲は、欲魯
部の名）

篋兒乞惕の脱黑脱阿別乞（親征録）脱脱別吉の子忽禿（親征録）和都
 た火都（親征録）幹亦喇惕（親征録）幹亦刺（親征録）の忽都合別乞（親征録）忽都花別
 吉、泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒禿黑（親征録）塔兒忽台希隣禿、
 豁敦幹兒長（親征録）忽敦忽兒章（親征録）阿兀出巴阿禿兒（親征録）阿忽出拔
 都（喇失惕の集史）阿忽出巴哈都兒等の泰赤兀惕、此等の部落は、阿勒
 灰不刺黑（阿勒灰の親征録）阿雷泉（阿雷泉の親征録）に聚ひて、札荅囉の札木合を君に
 戴かんごとて、牡馬牝馬を腰斬に斬り合ひて盟ひ合ひて、其處
 より額兒古捏木噠（額兒古捏河、水道提綱の額爾古納河）に沿ひ起ちて、刊
 木噠（刊河の親征録）犍河（召烈台抄、堅河、龍沙紀略の根河、中）の額兒古捏に
 注ぐ出島の角（元史）禿律別兒河岸（抄兀兒）忽蘭也兒吉（赤き崖、即）に
 て、札木合を其處に古兒罕（普き君、すめらぎ、合木）局兒可汗（元史）局兒

豁哩歹の急報

罕はんに戴いたきたり古兒罕かんに戴いたくこ成吉思合罕かん王罕かん二人ふたりの處ところに出馬しゅつばせんこ云いひ合あへり出馬しゅつばせんこ云いひ合あへるを豁囉刺思くわらくしの豁哩歹くわくりたい親征しんせい火力台かりたいは成吉思合罕かんに古唎勒くれ古こに居をる處ところに此この報告しやうこを致いたして遣やりきこの報告しやうこに來こらるこ成吉思合罕かんは王罕かんにこの報告しやうこを致いたして遣やりたれば王罕かんは報告しやうこを致いたさるこ軍いくさを起おこして急いそぎ成吉思合罕かんの處ところに王罕かん到いたりて來きぬ。

兩軍先鋒の呼び合ひ

王罕かんに來こらるこ成吉思合罕かん王罕かん二人ふたり一ひとつになりて札木合ちやくむかの迎むかへに出馬しゅつばせんこ云いひ合あひて客魯噠河くわくろたいがに沿したがひ出馬しゅつばするに成吉思合罕かんは阿勒壇あらくたん忽察兒くわつさ荅哩台たい三人ふたりを先鋒せんほうに行ゆかしめたり王罕かんは桑昆さんこん元史げんし赤台しやくたいの傳でん鮮昆せんこん札合敢木ちやくかかんぶ必勒格ひれく

別乞べき三人ふたりを先鋒せんほうに行ゆかしめたりこの先鋒せんほうより前まへへ又斥候しやくこうを遣やるに額捏堅ねくけん歸列禿きりよく親征しんせい捏干貴ねくかん因都いんと列れつは因いんと誤ごれり一坐くみの斥候しやくこうを放はなちたり其それの彼方かなた徹克徹兒ていやくてい卷一くわん卷二くわんの扯ち徹兒てい山さん兒ま山さん徹ていに一坐くみの斥候しやくこうを放はなたしめたり其それの彼方かなた赤忽兒しやくくわ忽く阿勒壇あらくたん忽察兒くわつさ桑昆さんこん兀惕乞牙くわつぎやに到いたりて下馬げませんこ言いひ合あひ居をる時とき赤忽兒しやくくわ忽くに放はなてる斥候しやくこうより人ひと走はしりて來きて敵てき來きぬこ云いふ報告しやうこを送おくり來きぬその報告しやうこ來くるこ下馬げませず敵てきの迎むかへに敵を迎むかへ報告しやうこを取とらん偵察にて行ゆきて近ちかづきて報告しやうこを取とり偵察にて備そなへありやこ探さぐれば札木合ちやくむかの先鋒せんほうは忙豁勒まんくわくより阿兀出把あくしゅつば阿禿兒あくと乃蠻ないまんの不ぶ亦嚕いらく黑罕くわかん篋兒けい乞惕きていの脱とく黑脱くわく阿別乞あべき

風雨の呪

の子忽秃幹亦喇惕の忽都合別乞この四人札木合の先鋒に行きけり我等の先鋒は彼等の處に呼び合ひて叫びて晩になられてあす戦はんと言ひて退きて大軍に合ひ宿れり。

明日行かして近づきて闊亦田(元史親征錄)闕亦壇(元史)に對陣して下りつ上りつ挑み合ひ勢揃し合ひて居る時彼等不亦嚕

黑罕忽都合二人呪(語札荅)を知りて居りき呪したるに風雨

(蒙)札荅(語)たる風雨(翻)りて彼等の上(上)に風雨(蒙)となりき彼等行く

能はずして溝の裏に倒るゝこ上帝に愛まれざりき我等

言ひ合ひて潰えけり。(者)札荅の事は(者)惟取淨水一盆浸石子數枚而已其大者若雞卵

小者不等然後默持密呪將石子淘漉玩弄如此良久輒有雨石子名曰鮮荅乃走獸腹中所產獨牛馬者最妙恐亦是牛黃狗寶之屬耳金幼孜の北征錄に永樂八年五月二十八日發雙清源午至河縛筏渡水得一木板上有虜字譯史讀之乃祈雨之言也虜語謂之札達華言云詛風雨蓋虜中有此術也東華錄に載せたる康熙五十六

年の勅諭に書冊所載有所謂雷斧雷楔大約得自深林者皆石得自平原者皆銅朕所得最多將小石一塊置於泉水攪之即可祈雨蒙語謂之查達齊書冊則曰查達也方觀承の松漠草詩の注に蒙古西域祈雨以楂達石浸水中呪之輒驗楂達生駝羊腹中圓者如卵扁者如虎脛在腎似鸚鵡嘴者良色有黃白駝羊有此則漸羸瘁生剖得者尤靈などありこの迷信は古に起りて今も變らずにありと見ゆ

乃蠻の不亦嚕黑罕は阿勒台山の前なる兀魯黑塔黑(親征錄)

兀魯塔山を指し離れ動きけり(阿勒台山は古の金山清一統志の阿爾泰山にして綿互二千餘里その最

諸部の潰走

大幹は烏布薩諾爾の西北に在り清露兩國の界をなし科布多城の北に當れり古出兀惕乃蠻の王庭のありし兀魯黑塔黒の地は阿勒台山の前即ち南に在りと云へば即ち今の科(布)兒乞惕の脱黒脱阿の子忽秃は薛涼格河を指し動きけり幹亦喇惕の忽都合別乞は林を争ひ失思吉思を指し動きけり泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒は幹難河を指し動きけり札木合は己を君に戴きたる民を虜ふるこ額兒古捏河に沿ひ札木合は回り動きけり彼等をかく潰やし

成吉思汗の泰赤兀惕追撃

て、王罕は、額兒古捏河に沿ひ札木合を追ひたり。(この時、札木合は、蓋王罕に降り)成吉思合罕は、幹難河の處に泰赤兀惕の阿兀出巴阿秃兒を追ひたり。阿兀出巴阿秃兒は、その部落の處に到るご、部眾を急がし動かして、阿兀出巴阿秃兒豁敦幹兒長等の「泰赤兀惕は、幹難河のかなたの邊にあまたの楯(蒙語)秃刺思(明譯)もてる軍士を整へて、戦はんごて整へて立ちけり。成吉思合罕到るご、泰赤兀惕ご戦へり。頗る返す返す戦ひて、晩になられて、その戦へる地に抗ひ合ひて宿れり。部眾も急ぎて來て又そこに軍士ごもご一つに團をなして宿り合へり。

成吉思汗の重傷を者勒篋の看護

成吉思合罕は、その戦ひの中に頸脈を傷けられて、血を止むれごも止まらず、惱まさるゝ時、日落ちて、すぐ其處に抗ひ

裸盗人

合ひて下馬して、塞がれる血を者勒篋吮ひ吮ひ口を血まみれにして、者勒篋は他の人に頼らず、守り合ひて居て、夜半になるまで塞がれる血を口に満たし嘔みては吐きて、夜半を過ぐれば、成吉思合罕心醒めて言はく「血乾きて了へり。喉渴けり、我」ご云へり。そこより者勒篋は、帽靴上衣下衣都てを脱ぎて、只禪ある赤裸にて、抗ひ合ひて立てる(陣ど)敵の内に走りて、かなたに團をなせる民の車に上りて、馬乳を尋ねて得ずして「……。敵は」急げる時、騾馬を乳擠らずに放ちたるなりき。馬乳を得かねて、一つの大なる蓋桶の乳酪をその車より取りて擡げて來ぬ。その間往くにも來るにも人に見られざりき。上帝は只護り給ひたるぞ。乳酪の蓋桶にあるを持ち來

て、その者勒篋自ら水を尋ねて持ち来て、乳酪を調合して合
 罕に飲ませたり。三たび休みて飲みて、合罕言はく「我が心眼
 明るくなれり」と云ひて、欠し起きて坐わりつゝ、日明けて明
 るくなりて見れば、その坐われる周囲は、者勒篋の吮ひ吮ひ
 塞がれる血を吐きたる周囲は、泥濘となれりけり。成吉思合
 罕見て言はく「こは何となれる。遠く吐かばいかにありけん」
 と云へり。それより者勒篋言はく「爾の惱まさるゝ時、遠く去
 らば爾より離れん」ことを怕れて、急ぎて嘔むをば嘔みて、吐
 くをば吐きて、遽てて我が腹にも幾ばくかは入りぬ」と云へ
 り。成吉思合罕又言はく「我がかくなりて臥し居る程に、赤裸
 にて何ぞ走りて入りたる。汝捕へられれば、我をかあるを告

げざらんや」と云へり。者勒篋言はく「我が心には、赤裸にて往
 きて、もし捕へられれば、我、汝等に投ずる心ありき。覺りて捕へ
 て殺さんこて、我が衣服都てを脱ぎて、只禪を脱がざるに、忽
 ち遁れて、汝等の處にかく馳せて來ぬ、我」と言はん「考へ」なり
 き。我を實となして、衣服を我に與へて世話するならん。我馬
 に乗りにて見つゝ、かゝる間に來ざるこゝあらんや、我。しか思
 ひて、合罕の渴き惱める心を愈さんこて、眼黒く（膽太）かく思
 ひて往きけり、我」と云へり。成吉思合罕言はく「今何をか云へ
 る。前の日三つの篋兒乞惕來て、不兒罕嶽を三たび遶らしめ
 たる時、我が命を一たび持ちて出でたりき、汝、今又乾きてあ
 る血を口にて吮ひて、我が命を開きたり、汝、又渴きて惱み居

者勒篋の三つの
恩

る時命を棄てて、敵人の處に眼黒く入りて、人物足りて我が命を入らしめ(とり)たり、汝なんぢがこの三つの恩を我が心の内に存せんと勅ありき。

日明け了れば、抗ひ合ひて宿れる軍士ども、夜便ち潰えたより、團をなしたる民は、逃るゝ能はずこて、團をなしたる地より、動かざりき。走れる部眾を止めんこて、成吉思合罕は、宿れる地より出馬して、走る民を止めつゝ、行く時、峠の上に一人の紅き上衣の婦人、帖木眞よこて大聲に喚び、哭きつゝ、立てるを、成吉思合罕自ら聽きて、いかなる人の妻にてかく喚びたると問はせに人を遣りぬ。その人往きて問ひたれば、その婦人言はく、鎖兒罕失喇の女、我合荅安と云ふもの。我が夫

帖木眞を喚べる
合荅安

をこゝに軍士ども拏へて殺したり、夫を殺さるゝ時、帖木眞を、我が夫を救ひ給へこて、叫びて喚びて哭きたり、我と云へり。その人來て、成吉思合罕にこの言を述べれば、成吉思合罕この言を聽くと、馬を走らして到りて、成吉思合罕は、合荅安の處に下りて抱き合へり。彼の夫をば我等の軍士ども先に殺したりき。かの民を引戻すと、成吉思合罕の大軍は、すぐ其處に下馬して宿れり。合荅安を召びて來させて傍に坐るたり。明くる日鎖兒罕失喇者別(親征錄 哲別 元史また遮別、折不、哲伯)二人(即ち)泰赤兀惕の脱朶格の家人なるその二人も來ぬ。成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に言へらく、頸の上の重き本を地に去てさせたる、衣領の上の枷の木を免れさせたる、汝等父子

後れて來ぬる鎖
兒罕失喇

札合

札兒必牙勒

札亦刺兀勒

古主渾

坤都

關薛兒

ごもの恩ありしぞ、汝等いかでか後れたる、汝等と云へり。鎖
 兒罕失喇言はく「我心に見在倚仗に思ひて居りき。いかなぞ
 急がん、我、急ぎて先に來ば、我が泰赤兀惕の官人等、我が殘れ
 る妻子馬羣糧食を灰の如く廢滅せん、彼等と云ひて急がず、
 今合罕の處に合はん、追掛けて來ぬ、我等と云へり。語り了
 ふれば、善しと云へり。

戰馬を射たる者
 別那顏

又成吉思合罕言はく「闊亦田に對陣して挑み合ひ勢揃し
 合ひて居る時、彼の嶺の上より箭來て、我が戰ふ口白き黃馬
 の鎖子骨を折るべく、誰か射ける、山の上よりと云へり。その
 言につき者別言はく「山の上より我射けり。今合罕に死なし
 められれば、掌の如き地を汗して殘らん。恩賜せられれば、合罕の

前に、深き水を横ぎり、光る石を碎くべく衝きて與へん。到れ
微額勒兀孫 裕黑脱嚙 超堅 赤刺温 潮嚙
 と云ふ地に、青石を破り、出でよと云ふ地に、黒石を裂くべく
關關古嚙 容兀魯 合勒 合喇古嚙 舍合嚙
 衝きて與へん」と云へり。成吉思合罕言はく「敵となりたる人
 は、殺したることを、敵對したることを、身を隠して、話を諱み
 て怕るゝなり。この事こそはと云へば、却て殺したることを、
 敵對したることを諱まず、却て告げたり。伴こそすべき人なり。」
 只兒豁阿歹と云ふ名なりき。我が戰ふ口白き黃馬を鎖子骨
 を射たる故に、者別と名づけて、戰はしめん、彼をこて、者別と
 名づけて「我が前に行け」と勅ありき。戰ふ口白き 黃馬蒙語に者別列古阿蠻
 察罕忽刺。者別列古は戰ふ、阿蠻は口、察罕は白き、忽刺は黃馬なり。者別列古
 を賜ひたるなり。然るを、明譯文に「者別、軍器之名也」とあるは、本文の意に非ざるべし。者
 ざる上に、俗文譯の文體に似ず。後人のさかしらに加へたるものなるべし。

別、泰赤兀惕より來て伴となれる緣由かくあり。

成吉思汗實錄卷の四終り。

成吉思汗實錄卷の五。

泰赤兀惕の誅滅

成吉思合罕は、そこに泰赤兀惕を虜へて、泰赤兀惕の骨ある人を、阿兀出巴阿秃兒（親征錄は前後に阿兀出拔都と云ひ、こゝには沈忽阿忽出と云ふ。喇失惕の集史も、前後に阿忽朱巴哈都兒と云ひ、こゝには昂忽兀忽出と云ふ。その實は同じ人なり。元史は阿忽出を省きてたゞ沈忽と書きたれば、阿忽出とは益遠ざかれり。）豁團幹兒昌（卷四の豁團幹兒長）忽都兀荅兒（親征錄）忽都荅兒等なる泰赤兀惕を、子孫の子孫に至るまで、灰の如く刮き拂ひ誅滅せり。彼の部落の民を動かして來て、成吉思合罕は、忽巴合牙（親征錄）忽入海牙山に冬籠せり。

主君を撃へたる
失兒古額禿翁

你出古惕巴阿嚙(中の一阿嚙の)の失兒古額禿額不堅(失兒古額禿翁親征錄)

元史失力哥也不干(伯顔の傳)は阿刺黑(親征錄伯阿刺)納牙阿(親征本紀)

乃牙なる子ごもご泰赤兀惕の官人塔兒忽台乞哩勒禿黑林

に入りて居るを、讎ある人なりきご云ひて馬に乗ること能

はざる(明からたごてざるあたはるごうまに)塔兒忽台を撃へて車に載せて失兒

古額禿翁は阿刺黑納牙阿なる子ごもご塔兒忽台乞哩勒禿

黒を撃へて來る時塔兒忽台乞哩勒禿黒の子ごも弟ごもは

奪ひて取らんごて追驅けて來ぬ彼の子ごも弟ごも追驅け

て來るご失兒古額禿翁は起つごご能はざる塔兒忽台を車

の上うへに上りてその仰むける上に跨り坐して刀を出して言

はく爾なむちの子弟しらは爾なむちを奪ひて取りに來ぬ爾なむちを我が主君を

塔兒忽台の子弟
の追救

失兒古額禿翁の
脅迫

手に掛けたりご云ひて殺さずごも主君を手に掛けたりご

て殺さん殺すごも亦只殺されん我われ但その死の中に償ひを

取り死なん(明)我殺你也死(明)不殺你也死(明)不如先殺了你我然後

死(明)ご云ひて跨りて大なる刀にて彼の喉を切らんごする

時塔兒忽台乞哩勒禿黒大なる聲にて弟ごも子ごもに叫び

て言はく失兒古額禿翁は我を殺さんごす殺し了へば死にた

る命なき我が身を取りて去りて何かせん汝等我を殺さざ

るに疾く回れ帖木眞は我を殺さじ帖木眞をちひき時ときに眼めに

火あり面めんに光ひかりある子こなりきごて主なき營盤いへかの裏うちに遺りて

ありごて取り去りて伴つ來て習はせられたれば習ふ如くなり

ごて新あたしき三歳二歳の駒こまを習はす如く習はし教へ行きた

り。死なしめん。云へ。ごも死なしむる能はざりき。我。今彼の情に入りてあり。彼の心は開けてあり。言はるゝなり。帖木眞は我を死なしめじ。汝等。我が子ごも弟ごも、疾く回れ。然らずば。失兒古額秃は、我を殺して遣らん。云ひて、大なる聲にて叫べり。彼の子ごも弟ごも言ひ合へらく。父の命を救はん。さて來ぬ。我等。失兒古額秃彼の命を死なしめ了へば、空しき命なき彼の身を何かせん。我等。却て殺さざるに疾く回らん。云ひ合ひて回れり。彼等を去らしめ(彼等去り)たる時、阿刺黑納牙阿なる失兒古額秃翁の子ごも、離れたる者ごも來ぬ。其等に來らるゝと、動きて來るに、途に忽秃勒訥兀(忽秃勒の隅)に到れば、そこに納牙阿言はく。我等この塔兒忽台を拏へて到ら

塔兒忽台の子弟のたゞもどり

納牙阿の明智

ば。成吉思合罕は、我等を正主の君を手に掛けて來ぬ。云ひ、成吉思合罕は、我等を正主の君を手に掛けて來ぬもの、何ぞ倚信すべき人ならん。此等は、我等の處にいかんぞ伴ごならん。伴ごなる無き人、正主の君を手に掛けたる人をば、斬らしめん。云て斬らしめられんか。我等。却て塔兒忽台を此處より放ちて遣りて、我等身を以て成吉思合罕に力を與へに來ぬ。我等。云ひて往かん。塔兒忽台を拏へて來つ。正主の君を廢てかねて、視るごい。かんと死なしめん。云ひて、放ちて遣りて、我等誠實に力を與へん。さて來ぬ。我等。云はん。云へり。納牙阿のこの言を父も子ごも善しとし合ひて、塔兒忽台乞哩勒秃黑を忽都忽勒の隅より放ちて遣りて、その失兒古

額秃翁は、阿刺黑、納牙阿なる子ごもご來ぬれば、「いかで來て」
 ご云へり。(のては、つるか)失兒古額秃翁は、成吉思合罕に申さく「塔
 兒忽台乞哩勒秃黑を拏へて來つるに、却て正主の君を視る
 ご、いかんぞ死なしめん」ご云ひて、廢てかねて、放ちて遣りて、
 成吉思合罕に力を與へんごて來ぬ「ご云へり。その時、成吉思
 合罕言はく「君を塔兒忽台を手に掛けて來つるならば、正主
 の君を手に掛けたる人を汝等を族を擧げて斬らしめらる
 るなりき、汝等、正主の君を廢てかねたる汝等の心善くあり」
 ご云ひ、納牙阿を恩賞せり。

納牙阿等の心を
成吉思汗の褒賞

札合敢不の來降

その後成吉思合罕の處に、客喇亦惕の札合敢不(親征錄元 札
阿紺李、札赤台の傳)は、帖兒速惕(卷六の忽兒班帖
列速惕、親征錄)塔刺速野(親征錄)に居る

王罕也速該の安
答の交り

處に伴ごなりに來ぬ。彼の來ぬる時、篋兒乞惕戰ひに來つれ
 ば、成吉思合罕、札合敢不は、便ち戰ひて退けたり。その時、土綿
 秃別干(萬の秃別干、親征錄)、土滿土伯夷部(元史完澤の
董合亦惕部、董哀部)、潰えたる客喇亦惕の民も、成吉思合罕に投
 じて來にけり。客喇亦惕の王合罕(即ち王罕、親征錄)、汪可汗(親征錄)こそは、先
 に也速該合罕の時に、中好く平かに住み合へる頃也。也速該罕
 ご安答ご云ひ合ひたりけれ。彼の安答ご云ひ合ひたる緣故
 は、王罕は、その父忽兒察忽思不亦嚕黑罕の(親征錄)、忽兒札胡思
 益祿可汗(元史は、可汗の二字を省けり)、弟ごもを殺すの故に、古兒罕(親征錄)、菊兒
 可汗(元史)、なる叔父ご敵に爲り合ひて、合刺溫合卜察勒(合刺
溫處、親征錄)、合刺溫隘(元史、哈刺溫隘)に鑽り入りて、百人にて出でて、也速該

罕の處に來つれば、也速該罕は、彼に己が處に來られて、己が軍にて出馬して、古兒罕を合申(河西の轉、親征の地)に逐ひて、彼の人民住具を王罕に取りて與へたる故に、安荅を爲り合へるこそ然り。

客喇亦惕の内亂

その後王罕の弟額兒客合喇(親征錄)也力可哈刺(親征錄)は、王罕兄に殺さるゝを逃れて去りて、乃蠻の亦難察罕(親征錄)亦難赤可汗(元史、部長亦難赤、喇失惕に依る)の處に投じけり。亦難察罕は、軍士ごもを遣りて、さて王罕は、三つの城(忽惕畏忽惕合兒魯兀惕に沿ひ去りて、合喇乞荅惕)西遼親征錄(元史、契丹、黑契丹)の古兒罕(親征錄)菊律可汗(元史、曷思麥里の傳、西遼主、鞠兒可汗、即ち西遼の葛兒罕、直魯古)の處に往きたりき。(札合敢不等の成吉思汗に在り。)そこより背きて、畏忽惕(元

王罕の逃げ走り

父の友に對する
成吉思汗の厚遇

兒の複稱、唐書の畏吾兒(唐忽惕)唐書の黨項の城を過ぐるご、五匹の粘纏を拘へて、乳を擠り合ひて、駱駝の血を刺して飲み、困窮して古薛兀兒納兀兒(古薛兀兒、湖親征錄)曲薛兀兒(澤)に來つれば、成吉思合罕は、先に也速該罕と安荅と云ひ合ひたる緣故にて、塔孩巴阿秃兒(卷三の塔孩、親征錄)速客該者溫(親征錄)雪也孩(二人を使に遣りて、客魯唾河の源より成吉思合罕自ら迎へに往きて、飢ゑて瘦せて來ぬ)にて、王罕に科斂を斂めて與へて、團營の内に入らしめて養へり。その冬次第に起ちて、成吉思合罕は、忽巴合牙に冬籠せり。

王罕の部下の怨言

そこに王罕の弟ごも官人ごも便ち言ひ合へらく我等の此の罕阿合(罕兄)は、乏しき性あり、臭き肝を懷きて行くなり。

兄弟を殺せり。合喇乞荅惕にも入りたり。又部眾をも苦めたり。今これをいかに爲ん、我等先の日を云へば、七歳なるを篋兒乞惕の民虜へて去りて、黒き花紋の粘纏の裘を着せて、薛涼格の河邊の不兀喇客額兒にて篋兒乞惕の確を擣きたり。忽兒察忽思不亦嚙黒罕なる彼の父は、却て篋兒乞惕の民を破りて、その子をそこに救ひて來つれば、又塔塔兒の阿澤罕は、十三歳なるを母ごめに又虜へて去りて、駱駝を牧はしめ行く時、阿澤罕の羊飼を率ゐて逃れて來たるぞ。又その後乃蠻より怕れて躲れて、撒兒塔兀兒（中亞細亞の抹哈篋惕教徒なる撒兒惕人の地なる垂木噠、垂河、唐書の碎葉河、西遊記の吹河、今の珠河）に合喇乞荅惕の古兒罕の處に往きたるぞ。そこに一年を盡さず、却て背き動きて、委

土罕を誑れる人の縛られ

兀惕（前の畏）唐兀惕（前の唐）の地に沿ひて行くに、困窮して、五匹の粘纏を拘へて乳を擠りて、駱駝の血を刺して飲みて、一つ盲（片目）の黒鬣の黃馬（蒙語合哩溫抹嚙、明旁譯黒鬣尾黃馬）にて、困窮して帖木眞なる子の處に來つれば、科斂を斂めて養へるぞ。今帖木眞なる子の處にかく行きたるを忘れて、臭き肝を懷きて行くなり。いかに爲ん、我等こ云ひ合へり。かく言ひ合へる言を、阿勒屯阿倏黒（親征錄案敦阿述）は、王罕に訐きけり。阿勒屯阿倏黒言はく、我もこの相談に入り合ひたりき。却て己が君を爾を捨てかねたり。こ云ひて、そこに王罕は、かく言ひ合ひたる額勒忽秃兒（親征錄燕火脫兒）忽勒巴哩（親征錄渾八力）阿鄰大石（親征錄納隣太石、後に阿隣太石）など、弟ごも官人ごもを拏へさ

せけり。弟おとこもより札合敢かかん不ぶは躲かれて、乃蠻なひまんに入りけり。（札合敢不は、王罕の西遼に走れる時、成吉思汗に降りしが、王罕歸）彼等かれらを繩繫なはけ房へやに入いらしめて、王罕わんかん言いはく「我等われら、委うい兀惕と、唐兀惕たんぐとの地ちより來きつる時とき、何なにこか云いひ合あひし。汝等なんぢらの如ごとく何なにをか思おもはん、我われは「こ云いひて、彼等かれらの面おもてに唾つばきして、彼等かれらの縛しばりを解とかしめたり。罕かんに只唾ただつばきせられて、房へやに居をる人ひと都すべてにて起たちて唾つばきしけり。

四部の塔塔兒の征伐

その冬ふゆ冬籠ふゆこもりして、狗いぬの年とし（我わがが建仁二年壬戌、金の泰和二年、宋の嘉泰二年、西紀一二〇二年、成吉思汗四十一歳の時）の秋あき、成吉思合罕あきちんぎすかかんは、察阿安塔塔兒あがあんたたた（親征録しんせいりく、察罕塔塔兒さかんたたた、干塔塔兒かんたたた）、阿勒赤塔塔兒あるちたたた（元史げんし、案赤塔塔兒あんちたたた、只塔塔兒ただたたた）、都塔兀惕塔塔兒とたうとたたた（喇失惕、阿勒）、魯惕塔塔兒ろていたたた（魯惕、秃克）、阿魯孩塔塔兒あろかいたた（兒忒曼、也勒奎塔塔兒、額）、それらの塔塔兒たたたと、答蘭捏木兒格思たらんねむるげす（親征録しんせいりく、答蘭捏木兒哥之野たらんねむるげのの）に對陣たいじんして戰たたかふ前に、成吉思合罕あきちんぎすかかんは、軍法ぐんぽうを言いひ合あへらく「敵人てきじんに勝かたば、財たからの處ところに勿な立ちそ。勝かち了をへば、その財たからは、我等われらの物ものなるぞ。分わかち合あふぞ、我等われら、敵人てきじんに退しりぞけられれば、初はじめの衝つきだしたる地ところにて回かへり戰たたかはん。初はじめの衝つきだしたる處ところにて回かへらざる人ひとをば斬きらしめん」こて軍法ぐんぽうを定さだめ合あへり。答蘭捏木兒格思たらんねむるげすに戰たたかひて、塔塔兒たたたを動うごかせり。勝かちて、兀勒灰失魯格勒うらくいしるるげ、只惕ただにて「彼等かれらを」彼等かれらの國くにに集あつめて虜とらへたり。（兀勒灰河と失魯格勒、只惕河と合流する處、親征録元史）兀魯回失連うろくわいしれん、眞河まがは、喇失惕らしてい、兀魯回失魯出兒うろくわいしるちゆい、只惕ただ、河がは。水道すいどう提綱ていこうに據よるに、蘆河ろがは土名どなは烏南うなんに流ながれ、烏爾穆秦うるもくしん左翼さよくの東ひがしを經へて、西にしに折まれ、色野爾濟しきよるせい河がはに合あひ、右翼うよくの界かり入いりて、潤うる。烏爾虎河うるこは、一統志いつとうしの圖ずに、吳兒灰河ごいがはとあり、即すなはち兀勒灰河うらくいがはなり。色野爾濟しきよるせいは、即すなはち索岳爾濟さくたつるせいにして、山やまの名なも河がはの名なに同じ。この色野爾濟しきよるせいは、即すなはち失魯格勒しるるげ、只惕ただ、魯ろと惕ていとを失うひ、格がは野のに轉まじて、失野爾しつよる、即すなはち色野爾濟しきよるせいとなれり。露西亞ろしやの地圖ちずには、烏爾灰うるがを烏拉圭うらけいとし、色野爾濟しきよるせいを蘇攸勒奇そけいれきとし、二河ふたがは合あ流ながして、昌克圖布ちやうこくとふ里湖りこに入りて止とまり、烏珠穆沁うしゆもくしん右翼うよくの界かへは流ながれ、往むかはず。成

答蘭捏木兒格思の戦

成吉思汗實錄卷の五

阿勒壇忽察兒答
哩台の軍法違犯

吉思汗の勝ちて進みたる處（察罕塔塔兒（前の察阿）阿勒赤塔塔兒都はその湖水の北なるべし）塔兀惕塔塔兒阿魯孩塔塔兒重要なる民をそこに滅して軍法を言ひ合ひたる言に阿勒壇忽察兒答哩台（親征錄元史）族人案彈火察兒答力台三人言に遵はず財の處に立ちけり。言に遵はざりき。さて者別忽必來（親征錄）虎必來折別二人を遣りて掠めたる馬羣何にても取りたる都てを取らしめたり。

塔塔兒屠戮の密議

塔塔兒を滅して虜へ了へて彼等の部落人民を如何せんさて成吉思合罕は大評議を一族にて一の房に入りて議り合へり。議り合へらく先の日より塔塔兒の民は御祖なる父を失ひたるなりき。御祖なる父の讎復して怨報いて車轄に比べて屠りて殺して與へん（明可將他男子似車轄大的盡誅）

別勒古台の密議
漏し

了。絶ゆるまで屠らん。残れるを奴婢とせん。各に分け合はん。さて評議定め合ひて房より出づれば塔塔兒の也客扯噠は別勒古台に「いかに評議を議り合へる」と問ひけり。別勒古台言はく「汝等を都てを車轄に比べて屠らん」と云ひ合へり。と云ひき。別勒古台のこの言にて也客扯噠は塔塔兒の處に傳説を放ちて寨に據りき。寨に據りたる塔塔兒の處に我等の軍士も攻むるとなり。甚だ損失しけり。寨に據れる塔塔兒を辛苦して降して絶やさん。と車轄に比べて屠る時塔塔兒言ひ合へらく「人ごに袖の裏に刀を袖にして償ひを取り死なん」と云ひ合ひて又甚だ損失しけり。かく塔塔兒を車轄に比べて屠り了へてそこに成吉思合罕勅あり「我等一族

にて大評議を定め合ひたるを別勒古台の告げたる故に、我等の軍士ども甚だ損失せり。この後大評議の處に別勒古台勿入りそ。評議畢ふるまで外にある者を治めよ。治めて鬪毆の事を盜賊詐譎に係る事を裁斷せよ。評議畢らば、進酒を飲みたる後に、別勒古台、荅阿哩台（前の荅哩台、卷一卷三）二人そこに入れ、勅ありき。

そこに塔塔兒の也客扯噠の女也速干合屯（元史后妃表）也速干皇后を成吉思合罕はそこに取れり。寵でられたる故に、也速干合屯言はく「合罕恩賜せば、我を（罕の）人に物になして畜ひ給へり。我よりは、姊也遂云ふもの我より高く、罕の人に適へるものなるぞ。この頃壻を壻ごりたりき。今は蓋この

也速干合屯の姊
思ひ

騷動の裏いづくにか去れらん」云へり。この言につき、成吉思合罕言はく「汝の姊汝より善くあるならば、尋ねさせん。姊を來なば避けて與へんか。汝（明譯）肯將你位子讓與麼」云へり。也速干合屯言はく「可罕恩賜せば、姊を只見ば、姊を避けん」云へり。この言により、成吉思合罕は、勅を傳へて尋ねさせたれば、妻されたる壻ご共に林に入りて行けるに、我等の軍士ども遇ひき。彼の夫は走りき。也遂合屯（元史后妃表）也速皇后をそこに取り來ぬ。也速干合屯は、姊を見るに、先に言へる言に遵ひ、起ちて坐れる位に坐ゑて、その己は下に坐れり。也速干合屯の言に倣ひて、成吉思合罕は、情を入れて、也遂合屯を取りて列位に坐ゑたり。

也遂合屯の塔の殺され

塔塔兒の民を虜へ畢へて、一日成吉思合罕は、外に坐りて酒飲み合ふに、也遂合屯也速干合屯二女の間に坐りて酒飲み合ひ居る時、也遂合屯大に歎きたり。そこに成吉思合罕は、心に想ひて(譯明疑惑了)、孛斡兒出、木合里等官人眾を喚びて來させて言はく「汝等、此の只聚れる人都てにて部落部落に立て、已より別なる部落の人を別に離れしめよ」と勅ありき。かく部落部落に立ちたれば、一人の年少き善き爽かなる人、部落ごもより別に立てり。汝は何人なるか」と云へば、その人言はく「塔塔兒の也客扯噠の也遂」と云ふ女を與へられたる壻人なりき、我敵に虜へらるゝ時、怕れて逃れて行きて、今鎮れるぞとて來て、あまたの人の中何ぞ認められん」と云ひて

王罕の篋兒乞惕征伐

行きけり」と云へり。この言を成吉思合罕に奏したれば、勅あり「只又敵せんと思ひて劫賊となりて行きけり。今何を窺ひにか來し。彼が如き者ごもは、車轄に比べたり。何ぞ疑はん。目の背處(えぬ見)に棄てよ」と云へり。尋で斬らしめたり。その狗の年、成吉思合罕の(「のは、原文に「を」な塔塔兒の民の處に出征したる時、王罕は、篋兒乞惕の民の處に出征して、脱黑脱阿別乞を巴兒忽眞脱窟木(親征錄元史)巴兒忽眞之隘(卷一の闊勒巴)に逐ひて、脱黑脱阿の太子脱古思別乞(親征錄)土居思別吉を殺して、脱黑脱阿の忽秃黑台察阿諭二女なる彼の女ごも、(親征忽都台察勒渾二哈敦の女の名を合屯)彼の妃ごもを取りて、忽圖赤刺溫(親征錄)和都赤刺溫(ふたり)二人なる彼の子ごもを民ごめに虜

へて、成吉思合罕に何も與へざりき。

成吉思汗王罕の
乃蠻征伐

その後成吉思合罕王罕二人、乃蠻の古出古惕(乃蠻の分部の古出古惕)の鎖豁黑兀孫(鎖豁黑の水親征録)莎合水(今の科布多河の上流なる索果克河)に居る處に

到りて、不亦嚕黑罕は對陣する能はずして、阿勒台山(今の科布多城の西南なる阿爾泰の東南幹山)を越え動きたり。鎖豁黑水より不亦嚕黑罕を

襲ひて、阿勒台山を越えさせ、忽木升吉兒の兀嚕古河(劉郁の道記の烏隆古河)に沿ひ追ひて行く時、也廸土卜魯黑(親征録元史)也的

脱孛魯(云ふ)彼等の官人斥候に行きて、我等の斥候に追は

れて、山の上(うへ)に走らんこし、肚帶(はらおび)を斷たれて、そこに拏へられ

き。兀嚕古河(沿ひ)追ひて、乞失勒巴失納兀兒(乞失勒巴失の湖親征録元史)黑

辛八石之野(西使記の乞則里八寺水道提綱の奇薩爾巴思鄂模西)に馳せ

到りて、不亦嚕黑罕をそこに窮めたり。

そこより成吉思合罕王罕二人回りて來る時、乃蠻の戰ふ

(善く)可克薛兀撒卜喇黑(親征録元史)曲薛吾撒八刺(巴亦荅喇黑)は、巴亦荅喇黑

別勒赤兒(巴亦荅喇黑の納拜荅刺邊只兒之野水道提綱貝德勒克)

蒙古遊牧記、拜達里克河の庫倫伯勒齊爾(この伯勒齊爾は、拜達里克河と查克河との落合なり)軍を整へて戰はんこ

しけり。成吉思合罕王罕二人は、戰はんこて軍を整へて到り

て、夕暮(ゆふぐれ)になられて朝(あした)に戰はんこて陣列(ちんれつ)にて宿(やど)れり。そこに

王罕その陣處(ちんじよ)に火(ひ)を燒かせて、夜(よる)便(すなは)ち合喇薛兀勒河(親征録)に

哈薛兀里河(哈の下刺の字脱ちたり)沂(さか)りて動(うご)きけり。

そこに札木合(闕亦田の戰に敗れ、額兒古捏河にて王罕に)王罕こ

そこ

そこ

そこ

そこ

王罕の心變り

札木合の讒言

共に動き合ひて行く時、王罕に札木合言へらく「帖木眞なる我が安荅は、先より乃蠻の處に使聘ありき。今は來ず。罕、罕、居る白翎雀にて我はあるぞ。渡る告天雀にて我が安荃はあり。乃蠻に往きしぞ。投ぜんとして後れたり」と云ひき。（親征時札木合在幕下、日出望見汪可汗立旗幟、非舊處、馳往問之曰、王知悉否。我昆弟如野鳥、依人終必飛去。余若白翎鵲也。棲息幕上、寧肯去乎。我嘗言之矣。）」元史札木合言於汪罕曰「我於君是白翎雀他人是鴻雁耳。白翎雀寒暑常在北方。鴻雁遇寒則南飛就暖耳。」（意謂帝心不可保也。）」白翎雀、（海鷗と譯せり。今元史に從へり。較耕錄喇合納、屯思奇の字書、孩兒合納、卷の二十に「白翎雀、生於烏桓朔漠之地、雌雄和鳴、自得其樂」とあり。告天雀は蒙語、必勒都兀兒、明譯告天雀兒、訶渥兒斯の重譯寒暑異棲之鳥、明の茅元儀の武備志なる韃靼方言に「叫天兒を賓堵兒と云ふとある。賓堵兒は、即ち必勒都兀兒なり。爾雅の釋鳥に「鷓、天鷓」との郭注に「大如鷓、雀、色似鷓、好高飛、作聲、江東呼爲天鷓、正字通に「鷓、俗呼告天鳥、其鳴如禽、形醜、善鳴、聲高、多韻。至順鎮江府志に「噪天、又名告天、似雀而稍大、愈鳴、則飛愈高、力乏、則自空投地、伏於草中。方濬頤の夢園叢說に「叫天子、栖海濱、叢草之中、遇天中晴朗、飛鳴直上、雲霄、連綿不已、翻身而下、終朝若是。告天雀も叫天兒も天鷓も天鷓も噪天も告天も叫天子も、みな鷓の異名にして、我がひばり即ち雲雀なり。元史の鴻鴈訶渥兒斯）札木合のこの言につき、兀卜赤黒台（喇失惕の集史、兀卜赤兒、故に號とせりと云ふ。）」古鄰巴阿禿兒（親征錄、曲憐拔都）言はく「詔ひて何ぞ彼の善き兄弟を讒し言へる」と云へり。

白翎雀と告天雀

成吉思汗の離れ還り

成吉思合罕、夜はすぐ其處に宿りて、戰はんこて明日の朝日明けて、王罕の陣處を見れば、無くなられて、此等は、我等を焼飯ごしけり。（明）他將我做燒飯般撇了。（喇失惕の史には、我今火坑輩無乃異志乎）」と云ひて、そこより成吉思可罕は動きて、額迭

兒阿勒台の納(即ち)にて渡りて、(親征也)迭而案臺河。この河の名の東北幹山なる唐努嶺の東麓より出づる伊第爾河また額德爾河に同じく、その河股は額德爾河と齊拉圖河との落合を指せるに似たり。されども色楞格河の上流の地は、この時乃蠻の塔陽罕に屬して、その勢未だ衰へざれば、蒙古の兵達里克河より土拉河の方に向はんとする時、道を曲げてそこを通るべき筈なし。されば名の同じきは偶然の事にして、成吉思汗の渡れる河は他の處にあるし。その動きたるに依り動きて、撒阿哩客額兒に下馬せり。

(親征) 撒里川。客額兒は原にて、川も河を中にせる原なり。それより成吉思

合罕合撒兒二人は、乃蠻の大槩を視て人ご算へざりき。

可克薛兀撒卜喇黑は、王罕の後より襲ひて、桑昆の妻子人民を住具ごめに虜へて率ゐて、王罕の帖列格秃阿馬撒兒(帖列格秃)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて率ゐて回りに。列帖蒙古の南に在り、此の地は、客喇亦惕の擧へられたる處と名同じ。されども彼の地は、格秃の口は、卷四なる撒察泰出の擧へられたる處と名同じ。されども彼の地は、

可克薛兀撒卜喇
黒に王罕の襲は
れる

蒙古地方には、同名の地甚だ多し。帖列格秃の口も、この二處に限らず。露西亞の地圖に科布多城の西に帖列克特山あり。その山の北に帖列克特山口と云ふ所あり。これも阿馬撒兒なるべし。されどもその地は、古出兀惕乃蠻の腹地に在り。客喇亦惕の民の居るべき所に非ざれば、本文なる隘口は、今考ふべからず。その戦の中に、篋兒乞惕の脱黑脱阿の忽圖赤刺温なる二人の子そこに居り、その民を率ゐて離れて、その父に合はんご、薛涼格河に沿ひ動きけり。

王罕桑昆を救へ
る四傑

可克薛古撒卜喇黒(前の可克薛兀撒卜喇黒)に掠められて、王罕は、成吉思合罕に使を遣りき。使を遣るに、乃蠻に人民住具を妻子を虜へられたり、我子なる汝より汝の朶兒邊曲魯兀惕を(四つの)史兵志また木華黎の傳に(掇)里班曲律猶言四傑也とあり。求めて遣りぬ。我我が人民住具を救ひて與へよと云ひて遣りき。成吉思合罕は、そこに孛斡兒出木合里(卷三の模合里)、孛囉忽勒(卷三の孛)、赤刺温巴阿秃兒(卷二の赤老)

博爾朮那顏、木華黎國王、博羅渾那顏、赤老溫拔都、この四傑を
 軍を整へて遣りぬ。この四傑を到らする前に、忽刺安忽惕(親
 錄 忽刺河山)にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕
 へられんとして居る處へ、この四傑到りて救ひて、人民住具
 妻子都てを救ひて與へたり。そこに王罕言はく、曩に彼の善
 き父にかくの如く去り畢へたる部眾を救ひて與へられき。
 今又その子に去り畢へたる我が部眾を四傑に來て救ひて
 與へられたり。恩を報さんことを皇天后土の祐護知しめせ
 ごと云へり。

王罕の感謝

王罕成吉思汗の
父子の盟約

又王罕言はく、也速該巴阿禿兒なる我が安荅は、去りたる
 我が部眾を一たび救ひて與へたり。帖木眞子は、又去りたる

我が部眾を救ひて與へたり。この父子二人、去り畢へたる部
 眾を我に收めて與へたるは、誰が前に(誰か)收めて與へんこ
 骨折りたらん。我も今老いたり。我老いて高き處(天)に上らば。
 古りたり、我古りて山崖(墓)に上らば、普き部眾を誰か管かん。
 合兀赤楊 合兀赤楊 合勒都楊 合木黑 温都楊
 我が弟ごもは、德行無くあり。我が獨子、無きが如き桑昆獨あ
 り。帖木眞子を桑昆の兄となして、二人の子あるとなりて、休
 はんご云ひて、成吉思合罕ご、王罕は土兀刺の合喇屯(親征錄、土
 黒林)に會して、父子ご云ひ合ひたり。父子ご云ひ合へる理由
 は、先に前の日也速該罕額赤格ご、王罕は安荅ご云ひ合ひた
 る緣故にて、父の如しご云ひて、父子ご云ひ合ひたる理由か
 くあり。言(誓)を言ひ合へらく、多き敵の處に奔るには、共に

盟約の辭

一つに奔らん野の獸の處に圍獵するには、一つに共に圍獵せん。云ひ合へり。又成吉思合罕王罕二人言ひ合へらく我等二人を妬みて、牙ある蛇に咬されば、彼の咬しに勿入りそ。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。大牙ある蛇に離間せられば、彼の離間を勿取り合ひそ。口にて舌にて證し合ひて信ぜん。云ひ、かく言を極め合ひて、親みて住み合へり。親しき上に重ねて親しくならん。成吉思合罕は思ひて、拙赤（成吉思汗の長子）赤（成吉思汗の長子）に桑昆の妹察兀兒別乞（親征錄注可汗之孫秃撒合）抄兒伯姫を索むるに、桑昆の子秃撒合（元史は孫を子と誤れり）我等の豁眞別乞（元史）火阿眞伯姫（元史公主表太祖女昌）を換ひ合ひて與へん。さて索むれば、そこに桑昆は己を大きく思ひて言

媿談の不協

札木合等の協議
讒言

はく我等の親屬、彼等の處に往かば、門後に立ちて專に正面を望むなり。（明）俺的女子到他家阿、專一門後向北立地。（卑辱なる）彼等の親屬、我等の處に來ば、正面に坐りて門後を望むなり。（明）他的女子到俺家阿、正面向南坐。（尊榮なる）さて、己を大きく思ひて、我等を見下し言ひて、察兀兒別乞を與へず、親まざりき。その言にて、成吉思合罕は、心の内に王罕、你勒合桑昆（桑昆名なり）亦刺合鮮昆（二人に心後れけり）心進まず協は）かく心後れたるを札木合覺りて、猪の年（我が建仁三年癸亥、金三年、西紀一二〇三年、成）の春、札木合、阿勒壇、忽察兒、合兒答乞歹、額不格眞那牙勤（合兒答乞歹以下三名は、明譯に皆種族の名と）雪格額合、脱幹哩勒（親征錄）脱隣（成吉思汗の祖先の家奴）合赤溫別乞（成吉思汗の弟なる合赤

温と異 彼等共に一つの協議をなして、起ちて往きて、者者額
兒温都兒 高者額兒 徹徹兒運都山、元史折折運都山 明史韃靼の傳な
の東北なる徹徹山に音は 似たれども、いかにあらん。の陰に別兒客額列惕、困難なる沙 別里怯
沙陀 に你勒合桑昆の處に往きて、札木合讒して言はく「帖木
眞なる我が安答は、乃蠻の塔陽罕 不亦嚕黑罕 太陽可汗、元史太
の處に傳言あり使あるなり 彼の口には父子と云ひて居り、
彼の性行は別なり 倚信して居るなり、汝等先圖らずば、汝等
阿不里 に何ぞ從はん。帖木眞安答の處に出馬せば、我は横より入り
合はん と云ひき。阿勒壇忽察兒二人言はく「我等は、訶額命額
客の子を、兒をば殺して、弟をば棄てて與へん と云ひき。額不
格眞、那牙勤合兒塔阿惕、前の合兒答乞歹乞と阿 言はく「彼の手を
合兒

桑昆の線言に迷
へる王罕の優柔

手取りて、彼の足を足取りて與へん と云ひき。脱幹哩勒言は
合兒答 く「思ふに、往きて帖木眞をその部眾を取らん。部眾を取られ
ば、部眾無くなれば、何をかせん、彼等と云ひき。合赤温別乞言
はく「你勒合桑昆なる子汝何をか思はば、長き梢に深き底に
到り合はん」と云ひて、
古嚕勒扯速
此等の言を言はれて、你勒合桑昆は、父に王罕に彼等の言
を撒亦罕脱迭延 親征 寨罕脱脱干もて言ひて遣りき。此等の
言を言はれて、王罕言く「我が子を帖木眞を何ぞかく思へる、
汝等。今まで世話に彼より爲りて居て、今我が子をかく悪く
思はば、上帝に愛まれざらん、我等札木合は、走作の言ある人
なりき。ごやかくや、蒙 勻不兀塔不兀言ふなり、明 札木合的言

語誑誕不可信。親征札木合巧言寡信人也。不足信。云ひて、
 喜ばずして遣りき。又桑昆言ひて遣るに「口あり舌ある人言
 ひ居るに、何ぞ信ぜられざらん」とて繰返し言ひて遣りて、聽
 かれずして、己身づから往きて言く「且爾がかくある時すら、
 我等を何とも爲さざるなり」（明譯）你如今見存他俺行不當數。
 誠に又罕額赤格爾を白く捨かば、黒く噎ばば（詞どほりに譯し
 ず。蓋上の句は、病むを云ひ、下の句は、死ぬるを云ふならん。明譯には若父親老了呵、忽兒察忽思不亦嚙
 察合阿納撒察阿速合喇答合合阿速）
 黒罕なる爾の父の辛苦してかく收めて居たる爾の部眾を
 我等に管かしめんや。誰にも何ぞ管かしめんや」と云へり。そ
 の言に王罕言く「我が童我が子（桑昆）をいかんぞ捨てん。今まで
 世話に彼より爲りて、悪く思はば、善からんや。上帝に愛まれ

だましうち陰謀

ざらん、我等」と云ひき。その言に彼の子你勒合桑昆は憂へて、
 門を出でて去りき。却てその子桑昆の心を憐みて、喚びて來
 させて、王罕言く「上帝に蓋愛まれん、我等子をいかんぞ捨て
 ん」と云へり。汝等能く但取計らへ。汝等知れ（明譯）天莫不愛護
 麼。兒子行您怎生要棄捨您。但去做可以勝得他的事。您自知者」
 と云ひき。（元史忠義伯八の傳に、王罕を怯列
 王可汗と桑昆を先髡と書けり。）
 それより桑昆言はく「彼等こそは、我等の察兀兒別乞を索
 めたりけれ。今許婚の饗（蒙語）不兀勒札兒（元史）布渾察兒（原注に）を
 喫ひに來よとて、日を約して喚びて來させてそこに拏へん」
 と云ひ合ひて、然りて協議を極め合ひて「察兀兒別乞を與
 へん。許婚の饗を喫ひに來よ」とて遣りぬ。喚ばれて、成吉思合

罕は、十人にて往くに、途にて蒙力克額赤格（親征）篋里哥（篋）力也赤可（伯八の傳明）の家（篋）に宿れば、そこに蒙力克額赤格言はく「察兀兒別乞を索むれば、彼等こそは、我等を見下して與へざりけれ。今いかんぞ特に許婚の饗を喫ひに、さて喚びし。己を大きくなせる人、特に柰何ぞ與へん、さて喚びたりし。さやかくやの心あり。我が子氣を附けて往くべし。春になりぬ。我等の馬羣瘦せたり。馬羣を養はん」とて辭みて遣らん」と云ひて、成吉思合罕は往かず、不合台乞喇台二人を許婚の饗を喫へ、と云ひて遣りて、（親征）不花台乞察（二人を王罕より喚び）成吉思合罕は、蒙力克額赤格の家より回りぬ。不合台乞喇台二人に到られたれば、覺られたり、我等明日の朝圍みて拏へん」と

云ひ合へり。

掩襲の謀を漏せる也客扯噠の輕率

かく圍みて拏へん」とて言を極め合ひたるを、阿勒壇の弟

（阿勒壇は、忽圖刺合罕の子也客扯噠は、忽圖刺の弟忽蘭也客扯噠、親征也）

可察合蘭は、家に來て言へらく「明日の朝帖木眞を拏へん」と

云ひ合へり。この言を帖木眞に言傳を致し往く人をば、いか

にか但爲さるべき」と云ひき。かく言へるにより、その妻阿刺

黒亦惕（親征）亦刺罕（親征）の子とせり。言はく「その根無し、爾の言

（明）那泛濫言語（親征）此無據之言、何なるらん。家人も眞と爲

さん」と云ひき。かく噂せる時、その馬飼巴歹（親征）把帶（木華黎の）

は、馬乳を送りに來て、この言を聽きて回りぬ。巴歹去りて、同

役の馬飼乞失里黒に扯噠の言へる言を言ひき。（乞失里黒は、卷

なり。親征録元乞力失と書き、失力を倒にせり。哈刺哈孫の傳には、曾祖啓昔禮史は、誤りて乞力失と云ひて、幹刺納兒氏なりとあれば、抄真幹兒帖該の長子の裔) 乞失里黒言はく「我又往きて察せん」云ひて、家に往きぬ。扯噠の子納鄰客延は、(親征) 察合蘭次子納隣。上に亦刺罕をしたる故に、納隣) 外に居て、箭を磋き居て言はく「只今我等は何を言ひ合へる。舌を取られん。誰が口を止めん」云ひき。かく言ふと、納鄰客延は、又その馬飼に乞失里黒に言へらく「篋兒乞歹察合安(篋兒乞惕の白) 阿蠻察合安客額兒(口白き驪馬) 二匹を取りて引き來て手綱つけてよ。夜早く出馬せん(我)」云ひき。乞失里黒去りて、巴歹に言へらく「只今汝の話を慥めたり。真となりたり。今我等二人、帖木眞に報告を送り去らん」さて、言を極め合ひて、篋兒乞惕の白馬、口白き驪馬二匹を取りて來

巴歹乞失里黒の密告

て手綱つけて、夕に便ち房の内に一匹の子羊を殺して、床も煮て(明) 將床木煮熟(親征) 拆臥榻煮熟(篋兒乞惕の白馬、口白き驪馬二匹、目前手綱つけたるに乗りて、夜去りて、成吉思合罕に夜到りて、家の北(後) 即ち) より巴歹乞失里黒二人申して、也客扯噠の言へる言、彼の子納鄰客延の箭を磋き居て言へる。ここ、篋兒乞惕の白馬、口白き驪馬二匹の驪馬を取りて手綱つけよと云へる言、都てを申して上げたり。又巴歹乞失里黒二人申さく「成吉思合罕恩賜せば、疑ひ無くあり。圍みて拏へん」さて、言を極め合へり「云へり」。

成吉思汗實錄卷の五終り。

成吉思汗實錄卷の六

成吉思汗の逃げ
走り

合刺合勒只惕の
沙漠の休息

成吉思汗實錄卷の六

かく言はれて、成吉思合罕は、巴歹、乞失里黒二人の言を信じて、夜便ち近處に居る頼るべき者に話を爲して、輕き何物をも棄てて遁れ、夜便ち動きたり。卯温都兒（惡しき高親征録地）、山（山）の陰に依り動くに、卯温都兒の陰にて兀唻罕（親征録地）の者勒篾豁阿（者勒篾豁阿は、即ち者折里麥。豁阿は、媛なり。者勒篾は、何故に媛と號したるか知らず。）に頼りて、（者勒篾豁阿は、即ち者折里麥。親征録元史）折里麥（媛阿は、媛なり。者勒篾は、何故に媛と號したるか知らず。）後方に殿をなし、斥候を放ちて動きて、かく動けるに依り、翌日の日の内に日傾ける頃、合刺合勒只惕額列惕（額列惕に到りて憩）

はんご下馬せり。(この額列惕即ち沙漠は、名高き戰場合蘭只之野、また合蘭眞沙陀。元史本紀哈蘭眞沙陀、畏峇兒の傳哈刺眞、朮赤) 憩ひて居る時、台の傳なる哈刺哈眞沙陀は、地名を誤りて人名とせり。)阿勒赤歹(史世系表の濟南王按只吉歹)の駙馬はもを野飼せしめたる赤吉歹、牙的兒は、(親征錄)太出也迭兒譯別喇津、史泰出勤黑歹、牙都兒。洪鈞は、秘史奪泰字音、親征錄奪吉歹音と云へり。路路青草に駙馬もを野飼しつゝ、行く時、後より卯温都兒の前に依り、忽刺安不嚕可惕(赤き榆林、親征錄)を忽刺阿卜魯哈誤りて二山)過ぎ來る敵の塵を見て、敵到れり云ひて、駙馬もを趕ひて來て、成吉思合罕は、敵到れりと言はれて、見れば卯温都兒の前に依り、紅き榆林を過ぎ、塵を上げて、王罕かく襲ひて來るなり云ひて、(云は)そこより成吉思合罕は、塵を見ると、駙馬もを拏へしめて、馱して上馬せ

兩軍の力を較べたる王罕札木合の間答

り。かく見ざりせば、不意打なりけん。その來る時、札木合は、王罕と共に來合ひて來るなりき。そこに王罕は、札木合に問ひき、帖木眞子の處に、善く戰ふ程のもの、誰かあると問ひき。札木合言はく、そこに兀嚕兀惕忙忽惕とて彼の民あり。彼のその民は善く戰へると。轉ずる度毎に陣勢好くあり。旋る度毎に次序好くあり兀出干。環刀鎗の裏に慣れたる民。彼等は、黒色花色の纛もあり。彼等は、用心すべき民なると云ひき。その言につき、王罕言はく、かくあらば、我等は、彼等を只兒斤(親征錄)朱力斤部の勇士にも合か、峇黒に任せ、只兒斤の勇士もに衝かせん。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿赤黒失喩(親征錄)阿赤失蘭に衝かせん。土別干の後援には、斡欒董合

亦^い惕^と（元^{げん}親^{しん}史^し征^{てい}錄^{ろく} 董^{とん}哀^{がい}部^ぶ）の勇^{ゆう}士^しごもに衝^つかせん。董^{とん}合^が亦^い惕^との後^ご援^{えん}には、王^{わん}罕^{かん}の千^{せん}の侍^{せい}衛^ゐを率^{ひき}ゐる豁^{くわ}哩^り失^し列^れ門^{めん}太^{たい}石^し（元^{げん}親^{しん}史^し火^か力^{りき}失^し烈^{れつ}門^{もん}部^ぶ）衝^つけ千^{せん}の侍^{せい}衛^ゐの後^ご援^{えん}には、我^{われ}等^ら大^{だい}中^{ちゆう}軍^{ぐん}にて衝^つかんぞと云^いひき。又^{また}王^{わん}罕^{かん}言^いはく「札^{ちや}木^む合^が弟^{てい}、我^{われ}等^らの軍^{ぐん}を汝^{なんぢ}整^{とくの}へよ」と云^いひき。その言^{ことば}につき、札^{ちや}木^む合^が別^{べつ}に離^{はな}れて出^いでて、その從^{じゆう}者^{しや}に言^いへらく「王^{わん}罕^{かん}は、この軍^{いくさ}を我^{われ}に整^{とくの}へよと云^いへり。安^{あん}荅^だには我^{われ}敵^{てき}するここ能^{あた}はず行^ゆきたるに、この軍^{いくさ}を我^{われ}に整^{とくの}へよと云^いへり。王^{わん}罕^{かん}は、越^こえて我^{われ}より彼^{かなた}方に在^ありき（我^{われ}よりも）酌^{しやく}中^{ちゆう}の伴^{とも}なり。（蒙^{まう}語^ご 察^{ちやく}黑^く圖^と 解^{かい}り得^{とく}ず。姑^こく）安^{あん}荅^だに報^{ほう}告^{こく}をいれん。安^{あん}荅^だ戒^{かい}愼^{しん}せよと云^いひて、札^{ちや}木^む合^がは、陰^{ひそか}に成^{ちん}吉^き思^す合^が罕^{かん}に報^{ほう}告^{こく}をいれ、我^{われ}に問^とへり。帖^て木^む眞^{しん}子^この處^{ところ}

成吉思汗に密告
する札木合の貳
心

に、善^よく戰^{たたか}ふ程^{ほど}のもの、誰^{たれ}かあると問^とひたれば、我^{われ}言^いはく「兀^う嚙^と忙^{まん}忽^く惕^とを頭^{かしら}ごす」と言^いへり。我^{われ}我^{われ}が言^{ことば}にて、彼^{かれ}等^らは、只^ち兒^る斤^{ぎん}斤^{ぎん}を頭^{かしら}ごして、先^{せん}鋒^{ほう}ごし整^{とくの}へ合^あへり。只^ち兒^る斤^{ぎん}の後^ご援^{えん}には、土^と綿^{めん}土^と別^べ干^{げん}の阿^あ赤^{ちやく}黑^く失^し喙^{ろん}を云^いひ合^あへり。土^と別^べ干^{げん}の後^ご援^{えん}には、鞞^{おん}欒^{らん}董^{とん}合^が亦^い惕^との勇^{ゆう}士^しごもを云^いひ合^あへり。董^{とん}合^が亦^い惕^との後^ご援^{えん}には、王^{わん}罕^{かん}の千^{せん}の侍^{せい}衛^ゐの官^{くわん}人^{にん}豁^{くわ}哩^り失^し列^れ門^{めん}太^{たい}石^しを云^いひ合^あへり。彼^{かれ}の後^ご援^{えん}には、その王^{わん}罕^{かん}の大^{だい}中^{ちゆう}軍^{ぐん}の軍^{いくさ}にて立^たたんご云^いひ合^あへり。又^{また}王^{わん}罕^{かん}言^いはく「札^{ちや}木^む合^が弟^{てい}、この軍^{いくさ}を汝^{なんぢ}整^{とくの}へよ」とて、我^{われ}に委^{ゆた}ねんご言^いへり。これにて見^みれば、酌^{しやく}中^{ちゆう}の伴^{とも}なり。軍^{いくさ}を整^{とくの}へ合^あふことは何^{なん}ぞ能^よくせん。前^{まへ}に我^{われ}は安^{あん}荅^だに敵^{てき}するここ能^{あた}はずして行^ゆきたるに、王^{わん}罕^{かん}は、我^{われ}より彼^{かなた}方に在^ありき。安^{あん}荅^だ勿^な恐^{おそ}れそ。戒^{かい}愼^{しん}

せよ」云ひて遣りき。

合刺合勒只惕の戦

この傳言に來らるゝと成吉思合罕言はく「兀嚕兀惕の主
 兒扯歹伯父（成吉思汗の同族にて、孛兒只斤氏の長）汝何ぞ云ふらん。
 汝を先鋒とせん」と云へり。主兒扯歹の聲出す前に、忙忽惕の
 忽亦勒答兒薛禪（卷四の忽余勒答兒薛禪は、成吉思汗より賜はれる號なり。元史畏答兒の傳に見ゆ）言はく「安
 答の前に我戰はん。この後我が孤子ごもを養はん。ここを安
 答知しめせ」と云へり。（成吉思汗の忽亦勒答兒と約して安答兒扯歹はく）成吉思合罕の前に、我等兀嚕兀惕、忙忽惕、先鋒として
 戰はん」と云ひき。かく云ひて、主兒扯歹、忽亦勒答兒二人、兀嚕
 兀惕、忙忽惕を率ゐ、成吉思合罕の前に整へて立ちたり。立ち
 たれば、敵は、只兒斤を先鋒として到りて來ぬ。來ぬれば、兀嚕

兀惕、忙忽惕、迎へ衝きて、只兒斤を敗れり。敗りて往く時、土綿
 土別干の阿赤黑失論衝きたり。衝きて、阿赤黑失論は、忽亦勒
 答兒を刺して落しき。忙忽惕ごもは、忽亦勒答兒の上に翻り
 き。主兒扯歹は、兀嚕兀惕にて衝きて、土綿土別干を敗れり。敗
 りて動かしめて往く時、斡欒董合亦惕迎へ衝きたり。主兒扯
 歹は、又董合亦惕を敗れり。敗りて往く時、豁哩失列門太子、千
 の侍衛にて衝きたり。主兒扯歹、又豁哩失列門太子を退かし
 めて敗りて往く時、王罕に相談も無く、桑昆は迎へ衝かんこ
 し、赤き腮を射られて、桑昆すぐ其處に倒れき。桑昆を倒され
 て、客喇亦惕都てにて桑昆の上に翻りて立ちたり。彼等を敗
 りて、落つる日丘の上に拍ちつゝある時、主兒扯歹は、我等の

桑昆の負傷

軍に翻りて、忽亦勒答兒を倒れたる傷あるを伴れ回りて、成吉思合罕は、我等の軍を收めて、王罕より戦へる地より離れて、夕に動きて離れ宿れり。

大戦の翌朝の點視

立ちて宿りて、日明けさせ點視すれば、幹闊歹（元史本紀に、太は窩闊台、太祖の第三子なり）、孛囉忽勒、孛斡兒出三人無かりき。成吉思合罕言はく「幹闊歹、共に頼るべき孛斡兒出、孛囉忽勒二人後に残りき。生きても死にても何ぞ離れん、彼等」云へり。我等の軍は、夜その驢馬を執りて宿りて、成吉思合罕言はく「我等の後より襲ひて來ば、戦はん」とて、整へて立ちたり。日明るくならせて見れば、後より一人の人來りて來れば、孛斡兒出なりき。孛斡兒出に到りて來らるゝと、成吉思合罕言はく「長生の

孛斡兒出の後に到り

上帝知しめせ」と云ひて、その智を推ちたり。孛斡兒出言はく「衝く時、馬を倒るべく射られて、歩み走りて行く時、その客例亦、惕ごもが桑昆の上に翻り立てる鬪ひの隙に、荷ある馬その荷を歪めて立ち居るを、その荷を斷ちて、その單鞍に乗りて出でて、我等の離れ出でたる路踏み行きて、得てかく來ぬ、我」云へり。

幹闊歹孛囉忽勒の後に到り

又暫くありて、又一人の人來りて來る時、彼の下に脚を垂れて來れば、獨の人の如くあり。來畢れば、幹闊歹の後より孛囉忽勒、疊騎し（尻馬に）て、口の脇にて血を流して到りて來ぬ。幹闊歹は、頸脈に箭を中てられて、その血凝りたるを、孛囉忽勒口にて吮ひて、塞れる血を脇にて流して來ぬ。成吉思

合罕見て、眼より涙を流して、心惱み、火にて疾く焼かせ、熱を透らする。斡闊歹に飲物(明止渴的物)を尋ねさせて與へさせて、敵來ば、戰はん。云ひて居りき。孛囉忽勒言はく、敵の塵は、彼方に卯温都兒の前に依り、忽刺安孛囉合惕(前の忽刺安)の方に塵長く出でて、彼方に去りたり。云へり。孛囉忽勒のその言につき、成吉思合罕は「來ば戰ふべきなりき。敵に逃げ動かれば、我等は軍を整へて、後に戰はんぞ。」云ひて動きたり。動くに、兀勒灰失魯格勒只惕河に沂り動きて、答闌捏木兒格思に入りたり。(この河は、前に云へるが如く南に流る、河なれば、沂ると追ひ附かれて起れるこの名高き合戰は、その河の下流、即ち塔塔兒四部の奥魯の在りし處、即ち今の烏珠穆沁左翼の地にて起れるなり。この古戰場を尋ねんと欲する人は、その地方にて求むべし。)

そこに後より合答安答勒都兒罕は、妻子より離れ來ぬ。(人は、卷四に見えたる如く、既に成吉思汗に降りたりしが、今度の變に、妻子と共に王罕に降り若しくは虜へられて、今逃げ回りたるなり。)來て、合答安答勒都兒罕は、王罕の言にて言はく「王罕は、その子桑昆を兀出馬(箭の名)にて赤き腮を倒るべく射られて、彼の上うへに翻りて、そこに言ひき。惹くべからざるに惹きたり。鬪ふべからざるに鬪ひとなり。可惜我が子の腮に釘を釘打たしめたり。子の命を失ふまで衝き戰はん。(明就我兒子性命有時、可再教衝)云へば、その時阿赤黑失噲言はく「罕、罕、止めよ。背處ふたむしむに在る子(生れざ)を求むるに、祈り願ひをなして、阿備巴備(譯し)にて求め願ひたり、我等この生れ畢へたる子桑昆を介抱せんと。(明未生子、時、禱祈著要子嗣、將這既生了的兒子桑昆擡舉。)

忙豁勒の多數は、札木合と共に、阿勒壇忽察兒と共に、我等の處に在り。帖木眞と共に背きて出でたる忙豁勒は、何處に去らん、彼等馬に乗りきりにて、木に蔽はるゝここに爲りぬ、彼等(譯明)每人止騎著一匹馬、夜裏必在樹木下宿、彼等を來ずば、往きて馬の乾糞の如く包みて持ち來んぞ、我等は彼等を云へり。阿赤黑失喩の此の言につき王罕言はく然り。さあらば、子艱むらん。子を動かさず介抱せよと云ひて、戰へる地より回り退けり」と云へり。

合勒合河の行軍

其處より成吉思合罕は、荅闌捏木兒格思より合勒合河(今車臣汗部東邊)に沿ひ動くに、數(人)を數へ合へり。數へ合へれば、二千六百となれり。一千三百は、成吉思合罕率ゐて、合勒合河

忽亦勒荅兒の死

の西の邊に依り起ちぬ。一千三百は、合勒合河の東の邊に依り、兀魯兀惕忙忽惕(親征)兀魯吾忙兀二部(率ゐて)起ちぬ。かく起ちて來る時、行糧(野)を圍獵しつゝ、行く時、忽亦勒荅兒は、その創瘡えざるに、成吉思合罕止むれども肯かず、獸を衝きたれば、再發して歿りぬ。そこに成吉思合罕は、合勒合河の幹兒訥兀山(親征)幹兒努兀の半崖(蒙)語客勒帖該合勒都惕(親征)遣忒哥山岡に彼の骸を放た(葬)しめたり。

帖兒格阿篋勒等の降附

合勒合河の不余兒納兀兒(親征)盃而之澤(注ぐ源)湖頭に、帖兒格阿篋勒(卷四)の迭兒格(額)篋勒(親征)等の翁吉喇惕あり。こ知りて、主兒扯歹を兀魯兀惕を領て遣りぬ。遣るに、翁吉喇惕の民は、前の日より女甥の姿にて、息女の顔色にて「云はば、

和するぞ。彼等は、彼等（我）の敵。云はば、戦ふぞ。我等（明翁吉喇百姓每、想著在前姻親阿、投降來者。若不肯投降阿、便斫殺者）云ひて遣りたれば、主兒扯歹に降り入りき。降り入られて、成吉思合罕は、彼等の何をも動かさざりき。

統格小河の駐營

そこに翁吉喇惕を降らしむるご、往きて統格豁囉罕の（統格小河。卷一の統格黎克小河とは異なり。明譯董哥澤脫兒合火兒合。董哥澤文は、誤りて統格黎克小河と譯せり。親征錄董哥澤脫兒合火兒合。董哥澤納兀兒にて、脱兒合火兒合は、統格豁囉罕の訛なり。蓋この小河は、湖と接して、湖と名同じきなり。今因果答河に入る小河に唐噶河あり、巴勒主納湖に近し。）東に下馬して、阿兒孩合撒兒（親征錄阿里海）速格該者溫（卷三客該）二人に傳言せさするには、統格小河の東に下馬せり。我等（額赤格）その草も好くなりき。我等の驪馬も肥えたり。我が罕額赤格（罕父）に言へ「こて言はく我が罕額赤格。何の怒にて我

王罕の背信を責むる成吉思汗の二使

忽刺安忽惕の盟

を恐れさせたる。爾、恐れさするならば、悪しき子ごも悪しき婦ごもを安眠せさせて何ぞ恐れさせざる。爾、坐れる床を低げさせて、上り出づる煙を散らして、何ぞかく恐れさせたる。爾（親征錄）與其驚畏我、何不使我眾惕爨而息安榻而臥、使我癡子癡婦得寧寢乎。我が罕額赤格、傍の人に刺されたらん。爾、横の人に驚かされたらん。爾、我が罕額赤格。我等二人は、何ぞか云ひ合ひたりし。勺兒合勒渾山（親征卓兒完忽奴之山）の忽刺阿訥兀惕（卷五の忽）孛勒答兀惕（孤山なる孛勒答兀惕。忽刺河班答兀惕にて、我等言ひ合はざりしか。牙ある蛇に咬されば、彼の咬しに勿入りそ。牙にて口にて證し合ひて信ぜん。云ひ合はざりしか。今我が罕額赤格は、牙にて口にてやは證し合ひて離れた

轅と輪との譬

る、爾^{なむち}大牙^{おほき}ある蛇^{へび}に離^り閒^{かん}せられれば、彼の^{かれ}離^り閒^{かん}に勿^な入^りりそ。口^{くち}にて舌^{した}にて證^{あか}し合^あひて信^{しん}ぜん^{阿答兒罕}と云^いひ合^あはざりしか。今^{いま}我^わが罕^{かん}額^え赤^ち格^げは、口^{くち}にて舌^{した}にてやば證^{あか}し合^あひて分^{わか}れたる、爾^{なむち}我^わが罕^{かん}額^え赤^ち格^げ我^{われ}は、少^{すこ}しもあれば、多^{おほ}きを求^{もと}めさせざりき。惡^あしきもあれば、善^よきを求^{もと}めさせざりき、我^{われ}二^{ふたつ}の轅^{なぐえ}ある車^{くるま}、その第二^{だい}の轅^{なぐえ}を折^をらば、その牛^{うし}拽^ゆくここ能^{あた}はざらん。其^{その}の如^{ごと}き爾^{なむち}の第二^{だい}の輪^わ二^にの轅^{なぐえ}にて我^{われ}はあらざりしか。二^{ふたつ}の輪^わある車^{くるま}、その第二^{だい}の輪^わを折^をらば、起^たつここ能^{あた}はざらん。其^{その}の如^{ごと}き爾^{なむち}の第二^{だい}の輪^わにて我^{われ}はあらざりしか。前^{まへ}の日^ひを云^いへば、忽^く兒^る察^{ちや}忽^く思^す不^ふ亦^い嚙^る黑^く罕^{かん}額^え赤^ち格^げ ^録親^{しん}征^{しん} 忽^く兒^る札^{ちや}忽^く思^す盃^{はい}祿^{ろく}可^か汗^{かん} ^録親^{しん}征^{しん} 忽^く兒^る札^{ちや}忽^く思^す盃^{はい}祿^{ろく}可^か汗^{かん} の後^{のち}、四^し十^{じふ}人^{にん}の子^こごもの兄^{あに}と云^いひて罕^{かん}となりしぞ、爾^{なむち}罕^{かん}となり畢^をへて、その弟^{おとこ}ごもを台^{たい}

叔父に王罕の逐はれたる時の也速該の救ひ

帖^て木^む兒^る大^{たい}石^し、不^ふ花^は帖^て木^む兒^る ^{親征録、太帖木}二人^{ふたり}を殺^{ころ}したるぞ、爾^{なむち}額^え兒^る客^け合^か喇^らなる爾^{なむち}の弟^{おとこ}殺^{ころ}されんごし、命^{いのち}を助^{たす}かりて出^いでて、乃^な蠻^{まん}の亦^い難^{なん}察^{ちや}必^ひ勒^る格^げ罕^{かん} ^{卷五の亦}の處^{ところ}に逃^{のが}れて入^いりしぞ、弟^{おとこ}ごもを殺^{ころ}し好^すきになれり^と云^いひて、古^こ兒^る罕^{かん} ^{親征録} 菊^く律^る可^か汗^{かん} ^{元史} 菊^く兒^るなる爾^{なむち}の叔^{おじ}父^ふは、爾^{なむち}の處^{ところ}に出^い馬^ばして來^きつれば、爾^{なむち}は百^{ひやく}人^{にん}にて命^{いのち}を助^{たす}かり逃^{のが}れて、薛^せ涼^{れん}格^げ河^がに沿^{したが}ひ走^{はし}りて、合^か喇^ら溫^{うん}合^か卜^ふ察^{ちや}勒^る ^{親征録} 哈^は刺^ち溫^{うん}之^の隘^{はさま}に鑽^きり入^いりたるぞ、爾^{なむち}さてそこより出^いづるに、篋^め兒^る乞^き惕^との脫^と黑^く脫^と阿^あに忽^く札^{ちや}兀^う兒^る兀^う眞^{しん}なる息^{むすめ}女^めを顔^{かほ}にて與^{あた}へて、合^か喇^ら溫^{うん}合^か卜^ふ察^{ちや}勒^るより出^いでて、也^え速^す該^{がい}罕^{かん}なる我^わが父^{ちち}の處^{ところ}に來^きつれば、爾^{なむち}そこに言^いへらく古^こ兒^る罕^{かん}叔^{おじ}父^ふより我^わが部^ぶ眾^{しゆう}を救^{すく}ひて與^{あた}へよ^と云^いはれて、也^え速^す該^{がい}罕^{かん}なる我^わが父^{ちち}は、爾^{なむち}にか

也速該と安答に
なれる王罕の感
謝

くこて來られて、泰赤兀惕より、忽難、巴合只(親征錄)泰赤兀都兒
吾難、巴哈只(都兒は、敦の誤りなり。泰赤兀敦は、泰赤兀惕のなり。この誤りは、
修正秘史に本づきたりと見えて、喇失惕の集史も兀都兒を人
の名と)二人を率ゐて、爾の部眾を救ひて與へんこて、軍を整
へて往きて、忽兒班帖列速惕(卷五の帖兒塔刺速野)に居る古兒
罕を二十三十の人を合申(親征錄は、漢語の轉なり。)に河西(蒙古語合申は、漢語の轉なり。)逐ひて、
爾の部眾を救ひて與へたるぞ。そこより來て、禿兀刺河の黒
林に、我が罕額赤格は、也速該罕ご安答になり合ひて、そこに
王罕なる我が父は感謝みて言はく「爾のこの恩の報いを爾
の子孫の子孫に報い回さん」ことを皇天后土の祐護にて知
しめせ」こて感謝みて居りしぞ、爾その後額兒格合喇(前の額兒
客合喇)
は、乃蠻の亦難察必勒格罕より軍を索めて、爾の處に出馬し

困窮せる王罕に
對する成吉思汗
の厚遇

て來つれば、爾は命を助かり、部眾を棄てて、少き人にて走り
て出でて、合喇乞苔惕の古兒罕の處に垂河に撒兒苔兀勒の
地に往きたるぞ、爾一年を盡さず、又古兒罕より背きて出で
て、委兀惕唐兀惕の地に由り困窮して來るに、五匹の粘纏を
拘へて乳を擠りて喫みて、駱駝の血を刺して喫みて、偏盲の
黒鬣の黃馬(蒙古語合里温抹嚙明旁譯黒鬣尾黃馬、文譯沙馬、高寶銓曰く「西北
域記曰狐毛短而麪者、曰沙狐、麪音天、黃白色。沙馬、蓋毛色黃白者。)
にて來ぬるぞ、爾罕額赤格の爾を、かく困窮して來ぬご知り
て、先に也速該罕なる我が父ご安答ご云ひ合ひたる故ご思
ひて、塔孩速客該二人を爾の迎へに使に遣りて、又我自ら客
魯噠河の不兒吉岸より迎へ往きて、古薛兀兒の湖(親征錄)曲笑
兒澤に遇ひ合ひたるぞ、我等爾を困窮して來ぬご云ひ、科斂

を斂めて爾に與へて、先に我が父と安答と云ひ合ひたる縁
 故にて、土兀刺河の黒林にて我等二人の父子と云ひ合へる
 縁故は、かくあらずや。その冬爾を團營の内に入れて養ひた
 るぞ。冬冬籠りして夏過して、その秋篋兒乞惕の民の脱黒脱
 阿別乞の處に出馬して、合廸黒里黒你嚕温（合廸黒里黒哈丁黒
 嶺親征録）山、史哈丁里（親征録）木魯徹薛兀勒（元史）莫那察山（親征録）また木奴又
 里察克（速兒）に戰ひて、脱黒脱阿別乞を巴兒忽眞脱古木に逐ひて、
 篋兒乞惕の民を虜へて、彼等のあまたの馬羣宮室彼等の田
 禾都てを取りて、罕額赤格に與へたるぞ。我爾の飢ゑたるを
 日の晝に至らしめざりしぞ。爾の瘦せたるを月の半に至ら
 しめざりしぞ。我（親征録）使汝饑不過日午、羸不過月望（又我等は、

木魯徹薛兀勒の
戦

兩汗の乃蠻征伐

古出古兒台（卷五の古出古惕の乃蠻の分部の名）不亦嚕黒罕を兀魯黒塔黒の莎豁
 黒兀孫（莎豁黒の水、卷五）より阿勒台山を越えしめ追ひて、兀嚕
 古河に沿ひ往きて、乞赤勒巴石納兀兒（乞赤勒巴石の湖、卷五）に窮
 めて取りしぞ。我等そこより回りに來る時、乃蠻の闊克薛兀
 撒卜喇黒（親征録）曲薛吾撒八刺（拜答喇黒別勒赤兒の河股）に
 軍を整へて對陣したる時、夕暮になられて、明日の朝戰はん
 ごとて、整へ合ひて宿れば、我が罕額赤格爾は、その陣處に火を
 燒かせて、夜合喇薛兀勒河に浜りて動きたるぞ。爾、明日の朝
 見れば、その陣處に無く爲られ、爾に動かされて、此等は、我等を
 燒飯としけり。と云ひて、我も動きて、額迭兒阿勒台的（かまた）内に
 渡りて來て、撒阿里客額兒に下馬したるぞ。そこに爾を可克

可克薛兀撒卜喇
黒の追襲

薛兀撒卜喇黑は襲ひて、桑昆の妻子人民住具都てを取り、罕額赤格の爾の帖列格秃阿馬撒兒(帖列格)にある一半の人民馬羣糧食を虜へて去れば、篋兒乞惕(親征錄蔑力乞滅里)の脱黑脱阿(親征錄)脱脱の子、忽都(卷五の)赤刺温(親征錄火)二人、その人民住具と共に爾の處にあるが、その戰の中に、その父に合はんと、巴兒忽眞に入らん、爾の處より背きて動きしぞ。そこに我が罕額赤格、爾は、乃蠻の可克薛兀撒卜喇黑に人民住具を虜へられたり、我、我が子、朶兒邊曲魯兀惕(四)を與へて來よと云ひて來つれば、爾の如くは思はず、そこに我は、孛斡兒出、木合里孛囉忽勒、赤刺温、巴阿秃兒、この四傑を軍を整へて遣りたれば、我がこの四傑の先に、忽刺安忽惕にて桑昆は對陣と

四傑の救ひ

講和の望み

なり、その馬腿を射られて捕へられんとして居る處へ、我がこの四傑到りて、桑昆を救ひ、妻子人民を住具ごめに都てを救ひて與へたれば、そこに我が罕額赤格は、感謝みて言はく「子なる帖木眞に去り畢へたる人民住具を四傑をおこせて救ひて與へられたり」と云ひて居りき、爾、今我が罕額赤格は、いかんぞ我を怒りに怒れる、爾、怒る理由の(理由を)爲に使をおこせよ。おこするには、忽巴哩忽哩亦都兒堅二人をおこせよ。二人をおこせずば、第二(第二の人)をおこせよ」と云ひて遣りたれば、(親征錄に可遣案敦阿速、渾八力二人來報、否、則遣一人とあり。この同じ、忽勒巴哩は、忽巴哩忽哩と名似たるに由り、修正秘史の誤れるなるべし。)

この言につき、王罕言はく「嗚呼息苦しきかな」(蒙)語、咲莎亦魯

王罕の悔痛

黒くろ我が子こより、離はなるゝ道理だうりよりやは離はなれたる。分わかるゝ關係くわんけいよりやは分わかれたる。我われ「こ云いひ、心こころ艱なやみて言いはく「今いま子こを見みて惡あしく思おもはば、かくの如ごとく血ちを出いだされん殺れん」殺誓ちかひて、小こ指ゆびを彈ひき、箭や削けつる小こ刀がたなにて刺さして血ちを流ながして、小ちひさき樺かは桶をけに盛もりて、我わが子こに與あたへよ」こ云ひて遣やりぬ。樺桶は樺の皮の小桶なり。柳邊紀略に曰く樺木、徧山皆是、類白楊、春夏間、剝其皮、入汗泥中、謂之糟、糟數日、出而曝之、地白而皮花、形者爲貴、金史所謂醬瓣也。黑龍江外記に曰く山谷多樺木、土人以爲箭筈、爲鞍版、爲刀柄、皮以貼弓、爲車蓋、爲穹廬、爲札哈、原注小船也。縫之如栲栳、大擔水、小盛米、麪謂之樺皮斗、俄羅斯亦有之、極小、雕鏤精巧、宜儲檳榔、鼻煙、號老羌斗。

札木合に對する嘲り

又また成ちん吉ぎ思す合か罕かんは、札ぢや木わ合か安あん荅たに言いへ「こて言いはく「我わが罕かん額え赤ち格げより見まゆる能あたはずして離はなれしめたり、汝なんぢ。明譯補填在前まへ時とき毎ごと日ひ、二人ふたり幼こくして始はめて安あん荅た。補填我われ等らの先さきに起おきたるは、罕かん額え赤ち格げの青あを鍾さかづきを以もて馬うま乳ちを飲のみたりき。我われに先さきに起おきて飲のまるゝを

阿勒壇忽察兒の背信を責むる痛切の言

妒ねたみたるぞ、汝なんぢ。今いま罕かん額え赤ち格げの青あを鍾さかづきを飲のみ乾ほし、幾いくばくを費つひやすか、汝なんぢ等ら「こ云いひて遣やりぬ。又また成ちん吉ぎ思す合か罕かんは、阿あ勒る壇たん忽く察ちや兒る。親征錄元史案あん彈たん、火ほ察ちや兒る二人ふたりに言いへ「こて言いはく「汝なんぢ等ら二人ふたり、我われを棄すてて、面かほをや撤すてん」こ云へる、汝なんぢ等ら行おこなをや撤すてん」こ云へる、汝なんぢ等ら。面をるは、體ていを辱をむるを云いひ、行おこなをすつ。洪汝なんぢ二人ふたり欲ほつし殺ころ我われ、將すてん棄これ之を乎か、瘞うづめん之を乎か。鈞の重じゆう譯えいには、汝なんぢ二人ふたり惡にく我われ、將すてん仍これ置を之を乎か、抑おさ埋め我われ地ち下した乎かとあり。忽く察ちや兒るを汝なんぢを、捏ね坤こん太たい石し。親征錄石いし、聶ね坤こんの子こ「こ云いひて、我われ等らより、汝なんぢ罕かん「こ爲なれ」こ云へば、爲ならざりしぞ、汝なんぢ。阿あ勒る壇たんを汝なんぢを、忽く禿と刺ち罕かん「こそは、國くにを管うしはき行ゆきけれ。その父ちち管うしはき居あるに依より、汝なんぢ罕かん「こ爲なれ」こ云へば、亦また爲ならざりしぞ、汝なんぢ。上うへより。長房より數へての意なり。明譯巴は兒る壇たん巴は阿あ禿と兒るの子こ。本は、合黒の誤りにして、即ち合不勒罕の長子幹勤巴兒合黒なり。これは、原

脱幹哩勒を弟と云へる縁故

又成吉思合罕は「都幹哩勒（親征脱隣）なる弟に言へ」て言
く「弟と云へる縁故は屯必乃察刺孩領忽（親征察刺合令忽統
必乃三人の幹黑荅（親征塔塔）奴に依り起りて來しぞ。幹黑荅
奴の子速別該（親征雪也哥）奴ありき。速別該奴の子闊闊出乞
兒撒安（親征闊闊出黑兒思安）ありき。闊闊出乞兒撒安の子也
該晃塔合兒ありき。（親征折該晃脱合兒。蓋卷三の者該晃荅豁兒に同
者温と兄弟にし）也該晃塔合兒の子都幹哩勒。汝誰が部眾を王
罕に與へんごて詔ひ行ける。汝我が部眾は阿勒壇忽察兒二
人誰にも管かしめぬぞ。汝を弟と云へる縁故は我が高祖父
（屯必）の戸限の奴我が曾祖父（合不）の門の近習の奴なりしに
由る。我が云ひて遣るここかくあり。」

桑昆の不孝を誡むる安荅の忠言

又成吉思合罕は「桑昆安荅（親征鮮昆案荅）に言へ」て言は
く「衣服ありて生れたる子にて我はありしぞ。裸にて生れた
る子にて汝はありしぞ。我等の罕額赤格は我等二人を齊等
に養ひたりき。閒に入らるゝより桑昆安荅は我を嫉みて逐
ひたるぞ。汝今我等の罕額赤格の心を艱まさず夕に朝に入
りて出でて慰めて行け。舊の心（譯明你舊嫉妒的心）を放たず罕
額赤格を命ある内に罕とならんごて我等の罕額赤格の心
を艱まして勿苦ましめそ。云ひて「桑昆安荅我に使をおこ
せ來るには必勒格別乞脱朶延（親征必力哥別吉脱端）なる二
人の從士をおこせよ。云ひて遣りぬ。我に使來るには罕額
赤格は二人の使をおこせよ。桑昆安荅も二人の使をおこせ

七人の使皆二人づつ

よ。札木合安荅も、二人の使をおこせよ。阿勒壇も、二人の使をおこせよ。忽察兒も、二人の使をおこせよ。阿赤黑失喩も、二人の使をおこせよ。合赤溫（卷五の合赤溫別乞）も、二人の使をおこせよ。阿兒孩合撒兒、速格該者溫二人をもてかゝる言ごもを傳言せしめて遣りぬ。この言ごもをかく言はれて、桑昆言はく「幾たびも罕額赤格ご云ふなりき。殺し好きの翁ごやは云はざりし。我を幾たびも安荅ご云ひたりき。脱黑脱阿師巫撒兒塔黑（撒兒塔兀勒の國）の羊の尾に續きて行けりごやは云はざりし。此にて言ごもの計略は、覺られたり。戦はんの首なる言なり。必勒格別乞、脱朶延二人、戦ふ纛を立てよ。驢馬ごもを肥やせよ。疑ひ無くあるぞ」と云へり。（脱黑脱阿云は、當時かゝる師巫ありて、かゝる風をなしたるなり。委しき事）

桑昆の冥頑

速格該の居残り

は、今知るべからず。明譯 我行也。幾曾説是安荅來。只説脱黑脱阿師翁續著回羊尾子行有。元の世にても已に意味を解りかねたりと見えて、親征錄に（は刺失惕を譯し、彼は我を安荅と呼べども、又常に我を罵ると約めて、自注に「下に脱忽布惕の一語あり、篋兒乞惕の脱克塔の事ならん、語意解し難し」と断れり）かくて王罕より阿兒孩合撒兒回る時、速格該者溫の妻子は、そこに脱幹哩勒の處に居りき。去る心になりかねて、速格該者溫は、阿兒孩より後れき。阿兒孩來て、この言ごもを成吉思合罕に言へり。

營 巴勒主納湖の駐

かくて成吉思合罕は、去りて巴勒主納納兀兒に下馬せり。（巴勒主納の湖は、幹難河の北にて、露西亞の咱拜略勒州なる赤塔の南にあり。秃喇河それより流れ出でて因果塔河に入る。その地は、林木多くして駐夏に宜しく、蒙古人は今もその地を指して、成吉思汗の難を避けたる處なりと云ひ傳ふと云ふ。親征錄は河の名とし、喇失惕は地の名として、そこに小河どもありと云ひ、他の西史は、録の如く河の名とせり。秃喇河を昔は巴勒主納河と云へるにや。又は別に湖に注ぐ巴勒主納河ありしかも知れず。親征錄、元史、雪不台の傳

班朱泥河。太祖本紀、札八兒火者、速不台、鎮海、哈散納、阿朮魯、紹古兒の傳には、朮赤台の傳に班真海、そこに下馬する時、撾斡思察罕（名）豁嚕刺思

子とあるのみなり。正にそこに遇ひ合へり。それらの豁嚕刺思（親征錄）火魯刺

部は、鬪はずに降り來ぬ。汪古惕（親征錄）王孤部（元史汪）の阿刺忽

失的吉惕忽哩（親征錄）阿刺忽思的乞火里（元史阿刺兀）の處より阿

三撒兒塔黑台（撒兒塔黑人）白き駱駝ある千の羯羊（千の羯羊に

れる）を趕ひて、額兒古捏河に沿ひ、貂鼠青鼠を買ひて取り來

る時、成吉思合罕に巴勒主納に水飲みに入る處に遇へり。この

水飲みは、名高き巴勒主納の濁水の誓なり。秘史の文は、簡略太祖

なるが故に參考の爲に紀傳に見えたる叙事を下に引かん。本紀帝既遣使

於汪罕遂進兵、虜弘吉剌別部、溺兒斤以行至班朱泥河、河水方

渾、帝飲之以誓眾、有亦乞烈部人、孛徒者爲火魯刺部所敗、因遇

巴勒主納の水飲
み即ち濁水の誓

飲渾水即ち巴勒
主揚の諸説

太祖本紀の飲渾
水

帝與之同盟、哈撒兒別居、哈刺渾山、妻子爲汪罕所虜、挾幼子脫

虎走、糧絕、探鳥卵爲食、來會于河上、時汪罕形勢盛強、帝微弱、勝

敗未可知、眾頗危懼、凡與飲河水者、謂之飲渾水、言其會同艱難

也。この文は、全く親征錄に據りて、只「河水方渾」と「時汪罕」以下の三十七字とを

加へたるなり。溺兒斤は、即ち親征錄前文の帖木哥阿蠻にして、不余兒湖の

頭にありと秘史に記せる帖兒格阿篋勒なり。帖兒格阿篋勒の降りたるは、成吉

思汗の合勒合河に沿ひ動ける時にあるを、親征錄は重ねてこゝに溺兒斤を虜

ふと記せるは、誤りなり。元史は、又前の降附の事をば「怯里亦部人、遂棄汪罕、來降」

と改めて、溺兒斤を虜へたることは親征錄のまゝに書けり。されども統格小河

より巴勒主納湖に遷るに、何ぞ不余兒者（札八兒火）の傳、太祖與克烈汪罕有隙、

一夕汪罕潛兵來、倉卒不爲備、眾軍大潰、太祖遽引去、從行者僅

十九人、札八兒與焉。至班朱尼河、餓糧俱盡、荒遠無所得食、會一

野馬北來、諸王哈札兒射之、殪。遂刳革爲釜、出火于石、汲河水、煮

而啖之。太祖舉手仰天而誓曰、使我克定大業、當與諸人同甘苦。

札八兒火者の傳
なる馬くひ

亦赤台の傳なる
班真海子

速不台の傳なる
班朱尼河

苟渝此言有如河水。將士莫不感泣。もこれは、飲渾水の如くも聞ゆれど
 へるなり。濁水の誓に非ずして、馬肉の誓なり。然るにこの傳は、誤りだらけにて、
 信じ難し。札八兒は、西域の族長なるに、西域征伐の十餘年前に蒙古に仕へて克
 烈征伐の役に加はれるは、已に怪むべく、又居庸關の戰は、者別等紫荆關より入
 りて居庸の南口を破れるを、札八兒の前導にて居庸の閑道より軍を進めたり
 としたるなど、疑はしきこと多し。亦赤台の傳、從征怯列亦、自罕哈啓行、歷
 れば、馬肉の誓もいかにあるべき。班真海子、罕哈は、合勒合河なり。班真
 班真海子、閑關萬里、每遇戰陳、必爲先鋒。海子は、巴勒主納湖なり。合
 勒合河より巴勒主納湖に至れるを、閑關萬里と云へるは、形容に過ぎたり。この
 傳にも誤り多し。合勒合河、只惕の戰を敍べて、怯列亦、哈刺哈真、沙陀等、帥眾來侵
 と書き出だし、沙漠の名を人の名としたるは、最も笑ふべし。單騎陷陳、射殺鮮昆と
 書きたれども、單騎には非ず、兀嚕兀惕を率ゐたり。射殺には非ず、腮を傷けたる
 のみなり。客喇亦惕の亡人なる札哈堅普を、乃蠻の主とし、速不台の傳、太祖在班
 たるは、太祖本紀の札阿紐孛なるを知らざるに似たり。朱尼河時、哈班嘗驅羣羊、以進、遇盜被執、忽魯渾與速不台繼至、
 朱尼河時、哈班嘗驅羣羊、以進、遇盜被執、忽魯渾與速不台繼至、
 以槍刺之、人馬皆倒、餘黨逸去、遂免父難、羊得達於行在所。事の
 後に、關赤檀山の戰、赤は亦の誤りにて、即ち關亦田の戰あれば、この事は、成吉思
 汗の巴勒主納に到りし時には非ずして、客魯噠の上流なる不兒吉岸又は古喇

鎮海の傳

哈散納の傳

阿朮魯の傳

紹古兒の傳

勒古に居たる時の事なるべし。速不台の傳の、太祖初建興都于班朱泥
 復出なる雪不台の傳にも、この事を載せて、太祖初建興都于班朱泥
 河、今龍居河也。と云へり。泰定帝紀に、癸巳、即皇帝位於龍居河とありて、その
 裏坐了也と云へれば、泰定即位の處は、客魯噠河の關迭額洲の大幹兒朶なるべ
 く、龍居河は、金史完顏奴申の傳なる龍駒河、長春の西遊記の陸局河にして、即客
 魯噠河なり。然らば班朱尼も班朱泥も客魯噠の誤りにして、興都鎮海の傳、鎮海
 とは客魯噠河の上流なる成吉思汗駐營の地を稱したるなり。哈散納の傳、鎮海、
 怯烈台氏、初以軍伍長、從太祖、同飲班朱尼河水。ハ散納の傳、哈散納、
 怯烈亦氏、太祖時、從征王罕、有功。命同飲班朱尼河之水、且曰、與
 我共飲此水者、世爲我用。阿朮魯の傳、阿朮魯、蒙古氏、太祖時、命同飲
 班朱尼河之水、扈駕親征、有功。阿朮魯の孫なる、懷都、幹魯納台氏、
 祖父阿朮魯、與太祖同飲黑河水、屢從征討、とあり。幹魯納台は、祕史
 魯の傳に、蒙古氏とあるは、蒙古幹魯納台氏と云ふべきを脱、紹古兒の傳、紹古兒、
 したるなり。黑河は、河の名に非ず、水の濁れるを云へるなり。紹古兒、
 麥里吉台氏、事太祖、命同飲班朱尼河之水、扈從親征、麥里吉台は、
 成吉思汗實錄卷の六

速哥の傳なる父懷都
水土哈の傳なる水飲みの舊事

阿塔海の傳なる祖塔海拔都兒

麥里の傳なる祖雪里堅那顏

耶律阿海秃花兄弟の傳

速哥の傳二つあり。卷の百卅四なる速哥、蒙古怯烈氏世傳、李唐外族、父懷都、事太祖嘗從飲班朮居河水。居は尼の土土哈見慰諭之曰、昔太祖與其臣同患難者、飲班朮河之水、以記功。今日之事、何愧昔人。卿其勉之。字脱ちたり。阿塔海、遜都思人。祖塔海拔都兒、驍勇善戰、嘗從太祖同飲黑河水、以功爲千戶。阿塔海は、日本に寇して遁げ還りたる大將なり。遜都思は、秘麥里の速勒都思氏、塔海拔都兒は、秘史の塔孩巴阿秃兒なり。の傳、麥里徹兀臺氏、祖雪里堅那顏、從太祖、與王罕戰、同飲班眞河水、以功授千戶。元兒、この班眞河は、巴勒主納木噠なり。花の傳、耶律秃花、契丹人。世居桓州、太祖時、率眾來歸。大軍入金境、爲嚮導、獲所牧馬甚眾。後侍太祖、同飲班朮河水。濁水の誓は、金に打ち入るより前にあれば、後と耶律阿海、遼之故族也。云云。歲壬戌、王可汗叛盟、謀襲太祖。太祖

喇失惕額丁の巴兒主揚

與宗親大臣同休戚者、飲辨屯河水爲盟、阿海兄弟皆預焉。辨屯勒主納の喇失惕額丁を洪鈞汪罕軍勢仍盛、帝見不敵、亟引退。退後、部眾渙散、帝乃避往巴勒渚納。是地有數小河、而是時水涸、流濁、僅可飲渾水。帝慷慨酌水、與從者誓。當日從者無多、稱之曰、巴兒渚特、延賞及後世焉。巴勒主納の水飲みに預れる人人の稱とせるなり。元史に飲渾水と書きたるも、巴勒主揚を義譯したるなり。喇失惕のこの敘事は、秘史よりも親征録よりも委し。されどもその文に據れば、合刺合勒只惕の戦の後、統格湖に往く前に、直ちに巴勒主納に往きて、濁水を飲み、それより合勒合河に沿ひ下る代りに、浜り帖兒格阿篋勒を降し、統格湖に駐まりて、使を遣り、二たび巴勒主納に往きたりとなして、地勢時情皆合はず。巴勒主納の水飲みは、使を遣りたる後にあることは、親征録も秘史に同じければ、喇失惕の之に違へるは、修正秘史の誤りを承けたるには非ず。喇失惕の偶誤れるなり。又札八兒火者耶律阿海の傳に依れば、王罕の掩襲を避けて逃げ出でたる時、直ちに巴勒主納に至りて誓へるに似たり。これは、時情には善く消すほどの力は無かるべし。證のことなれば、秘史親征録の明文を打ち消すほどの力は無かるべし。

成吉思合罕は、その巴勒主納に水飲み居る時、合撒兒は、妻

合撒兒の逃げ還

子を也古(元史世系表 瀋川王也苦太宗紀 野苦憲宗紀 野古また)也松格(元史世系表 移相哥大王憲宗紀 亦孫哥世祖紀 也先哥)禿忽(親征錄 元史太祖紀 脫)なる三人の子を王罕の處に捨てて、僅に身にて、從者を伴れて出でて、兄をこて成吉思合罕を尋ね、合喇溫只敦(親征錄 哈刺渾只敦山 刺渾山)の嶺ごもに縁りて、得る能はず、困窮して牛皮(うしのかは)と筋(すぢ)を喫ひて行きて、巴勒主納に成吉思合罕に合へり(失里 失兒不孫)合撒兒に來らるゝと喜びて、成吉思合罕は、王罕に使を遣らんと謀りて、沼咧亦惕の合里兀荅兒(親征錄 哈柳荅兒)兀唎罕の察忽兒罕(卷三の察兀抄兒寒)二人もて言ひて遣るに、罕額赤格に合撒兒の言こて言へ「こて言はく、兄を望みて、彼の影を失へり、踏みて彼の路を得かねたり。叫びて、聲を聽かれざりき。星を望みて、土の枕(合亦刺 合喇阿 合兀魯合 兀兒那)

成吉思汗のたばかり

にて臥したり、我、我が妻子は、罕額赤格の處にあり、信賴を望み得ば(格ト帖 譯)若差一箇可倚仗的人來呵、罕額赤格の處に往かんと、我「こ言へ」こ云ひて遣りぬ。又言はく「我等は、汝等に續き動きて、客魯噠河の阿兒合勒苟吉に約し合はん。汝等そこに來よ」こ約し合ひて、便ち合里兀荅兒、察忽兒罕二人を遣るこ、主兒扯歹、阿兒孩二人を先驅として、巴勒主納、兀兒より成吉思合罕續き起ち合ひて、出で出馬したるまゝに客魯噠河の阿兒合勒苟吉に到りぬ。

合里兀荅兒、察忽兒罕二人、王罕の處に到りて、合撒兒の言こて、此處より言ひて遣りたる言を言ひき。王罕は、金の天幕(金は天幕 阿勒壇帖兒篋)を起して、不意にて筵會して居りき。

宋の彭大雅の「其金帳柱以金製故名」と云ひ、徐霆の「疏證」にその製を述べて「即是草地中。黑韃事略に」大氈帳。上下用氈爲衣。中間用柳編爲窗眼。透明。用千餘條索拽住。闕與柱皆以金裹。故名。中可容數百人。一時の製を述べたるなれども、王罕の金帳も、合里兀荅兒察忽兒罕二人の言につき、王罕言はく「然あらば、合撒兒來よ」と云ひて、頼るべき亦秃兒堅（前の兒堅親征錄）を遣らん」と遣り合ひき（共に遣りき）。かくて來るこ、約會の地に阿兒合勒苟吉に到れば、形影大なるを見て、亦秃兒堅なる使回り走りき。合里兀荅兒の馬は、速くありき。合里兀荅兒追驅けて、捕ふる心遂げずして、彼の前後を横ぎり行く時、察忽兒罕の馬は遅くありき。後より箭の到る先にて（箭の達する距離にて）、亦秃兒堅の金の鞍ある黒き驢馬の臀の根を坐

亦秃兒堅の捕はれ

るべく（尻をつく）射たりき。そこに亦秃兒堅を合里兀荅兒察忽兒罕二人捕へて、成吉思合罕の處に率て來ぬ。成吉思合罕は、亦秃兒堅に話し合はず、合撒兒の處に率て往け。合撒兒知れ「と云へり。率て往きたれば、合撒兒は、亦秃兒堅に話し合はず、すぐ其處に斬りて棄てたり。

者額兒山の戦

合里兀荅兒察忽兒罕二人、成吉思合罕に申さく「王罕は、不意にてあり（明不隄防）。金の天幕を起して筵會してあり。速く支度して、夜夜通し行きて襲ひ圍まん」と云へり。この言を善しとして、主兒扯歹阿兒孩二人を先驅せしめて、夜夜夜通し到りて、者折額兒溫都兒（卷五の者額兒溫都兒親征錄）の折兒合卜赤孩（折兒のはさま）の口に居るを圍みたり。三夜三日禦がれ、圍

合答黑勇士の働

みて立ちたれば、第三の日窮迫して彼等降り。王罕桑昆二人は、夜いかに出でたるをも知られざりき。この禦ぎ合ひたる者に、只兒斤の合答黑巴阿秃兒(前の合答黑)ありき。合答黑巴阿秃兒降りて来て言はく、「三夜三日禦ぎ合へるに、正主の君を見るに、拏へていかんぞ殺さしめん」と云ひ、廢つる能はずして命を助かり逃去れ」と云ひ、挑み鬪ひ禦ぎ合ひたり。我、今死なしめられれば、死なん。成吉思合罕に恩賜せられれば、力を與へん」と云へり。成吉思合罕は、合答黑巴阿秃兒の言を善しとして、勅あるに「正主の君を廢つる能はずして、命を助かり逃去れ」と云ひ、禦ぎ合ひたる丈夫にて彼はあらずや。伴となるべき人なり」と云ひて、恩賜して死なしめず。忽亦勒答兒の命(戰死)の

忽亦勒答兒の遺族の賞賜

故に、合答黑巴阿秃兒を百人の只兒斤を忽亦勒答兒の妻子に與へ、彼等に力を與へよ。男の子生れば、忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで隨ひて力を與へよ。女の子生れば、その父母は己が意にて勿嫁がせそ。忽亦勒答兒の妻子の前後に仕へよ」と恩賜し勅ありき。忽亦勒答兒薛禪の口を先開きたるが故に、成吉思合罕は恩賜して勅あるに「忽亦勒答兒の子孫の子孫に至るまで、忽亦勒答兒の功の故に、遺族の賞賜を取り居よ」と勅ありき。(姚懿の牧庵文集に、平章忙兀公博羅驪の碑あり。本書忽亦勒答兒の曾孫にして、世祖の朝の平章政事なり。畏答而與兄畏翼俱事太祖時太疇盛疆畏翼謀往歸之。畏答而苦止曰帝何負汝而爲是。竟去。追之不復。雪泣而歸。請獨宣力。帝貳之曰汝兄與眾皆往。獨留何爲。乃折矢誓曰所不終事帝。有如此矢。帝感其誠。易名屑塵。約爲按答。帝與王罕陳於曷刺真。彼眾我寡。勅兀魯一軍先發。其將尤徹帶玩鞭馬鬣不應。屑塵請曰戰猶鑿也。匪斧不入。我先爲鑿。顧帝訣曰臣萬一不還。三黃頭兒將軫聖慮者。辰入疾戰大敗其軍。晡猶逐北。勅使止之。乃旋師免胄爲

畏答兒の傳の原據

殿。腦中流矢。帝親爲傳藥。寢與同帳。踰月而卒。帝曰。曩只里吉爲敵將。實禦屑塵。其以只里吉民百戶屬屑塵子。世世歲賜勿絕。其族散亡者。收完之。卽封北方萬家。元史畏
 蒼兒の傳は、全くこの文を採り、只畏蒼而を改めて畏蒼兒とし、屑塵を薛禪とし、
 按蒼を按達とし、曷刺眞を哈刺眞とし、朮徹帶を朮徹台とし、只里吉を只里吉實
 と誤れり。又太疇は泰赤兀惕、兀魯は兀魯兀惕、曷刺眞は合刺合勒、只惕、朮徹帶は
 主兒扯歹なり。只里吉は、卽ち只兒斤なるを、誤りて敵將の名とせり。又この戦は、
 日暮に始まりて霎時に賜はれる事につきて、李文田は、以其忠誠衛上、使忽亦勒蒼
 黒勇士を忙兀惕氏に賜はれる事につきて、李文田は、以其忠誠衛上、使忽亦勒蒼
 兒家、得其死力也と云へり。然るに元史は、この碑文に據り、只里吉の抗敵したる
 が爲に賜はれりと書けるに由り、高寶詮は、之を駁して、刺忽亦勒蒼兒下馬者初
 非只兒斤。且太祖方嘉合蒼黒可以倣伴、則其所以與忽亦勒
 蒼兒家者、李說爲長。元史云云、淺矣と云へるは、甚だ當れり。

成吉思汗實錄卷の六終り。

成吉思汗實錄卷の七。

塔孩勇士の恩賞

札合敢不の二女

かく客咧亦惕の民を屈服せしめて、各分けて虜へさせた
 り。速勒都思の塔孩巴阿秃兒(卷三の塔孩)の功の故に、一百の只兒
 斤を與へたり。又成吉思合罕勅あり、王罕の弟札合敢不に二
 女の息女ありしその姉女亦巴合別乞を(卷八の末に二たび見ゆ)成吉思合
 罕自ら取り、妹女莎兒合黒塔泥別乞を拖雷に與へたり。(元史本紀
 に、憲宗桓肅皇帝、諱は蒙哥、睿宗拖雷の、と曰ふ。后妃表に、睿宗の
 長子なり。母を莊獻太后怯烈氏、諱は、と曰ふ。后妃表に、睿宗の
 追諡莊聖皇后、また顯懿莊聖皇后とあり。拖雷は、本傳に「睿宗」
 景襄皇帝、諱は、拖雷、太祖の第四子、太宗の母弟なり」とあり。その縁に依

りて、札合敢不を彼に從ふ呢近の民も圓全第二の轅と爲れ
ご云ひて、恩賜して虜へさせざりき。

巴歹乞失里黒の
恩賞

又成吉思合罕勅あるには「巴歹乞失里黒二人の功の故に、
王罕の金の天幕、鋪陳したる金の酒局の器皿を取扱ふ人ご
めに與へん。」汪豁只惕客咧亦惕は、(汪豁只惕姓の客咧亦惕人。汪豁只
眞は親征録の嫩眞、別咧津の弘豁攸惕にして、弘豁攸惕は、即ち) 彼等の番士
ご爲れ。箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて(明のむさげをとき、またゆるしかれに、あ
蓋) 子孫の子孫に至るまで自在に快樂せしめん。多き敵に
奔らば財を得ば、得たるまゝに取れ。野の獸を殺さば、殺した
るまゝに取れ。ご勅ありき。(喝蓋は蓋を乾かすと云ふ意にて、筵會の時
阿不惕) 天子凡宴饗、一人執酒觴、立於右。
乾脱克にて、明譯には進酒とも譯

喝蓋の禮

客咧亦惕の民の
分配

階、一人執柏板、立於左階。執板者、抑揚其聲、贊曰「乾脱、執觴者、如
其聲、和之。」曰「打弼、則執板者、節一板。」從而王侯卿相、合坐者坐、合
立者立。於是眾樂皆作、然後進酒。詣上前、上飲畢、授觴、眾樂皆止。
別奏曲、以飲陪位之官。謂之「喝蓋」。蓋沿襲亡金舊禮、至今不廢。諸
王大臣、非有賜命、不敢用焉。乾脱打弼、彼中方言、未暇考求其義。
觴脱は、即ち乾脱克にして、打弼は、宜しなり。板を執れる者、酒を進めよ」と云へば、
觴を執れる者、宜しと應ふるなり。酒を飲む時にこの禮を用ふことは、諸王大
臣に非ざれば、能はざりしなり。又成吉思合罕勅あるには「巴歹乞失
里黒二人の、我が命の間に功を致せる故に、長生の上帝に祐
護せられて、客咧亦惕の民を屈服せしめて、高き位に到りた
るぞ。この後我が子孫の子孫に位に居て、かくの如く功を致
せることを継ぎ、継ぎに省みさせん」と勅ありき。客咧亦惕の

民を虜へて、誰にも缺けざるまでに撒し合へり。萬の秃別延倒里 容捏 都塔（卷五の土綿秃別干元）を撒し合ひて、引受けつゝ、取り合へり。多き董合亦惕を整ふる日に到らず虜へさせたるぞ。血ある物赤速秃 斡樂（生たる）を剥ぎ要ふる只兒斤の勇士どもを開きて分けて、共に到る能はざらしめたり。客咧亦惕の民をかく滅して、その冬は阿卜只阿闊迭格兒親征 錄阿不札闊忒哥兒之山に冬籠したり。

王罕の殺され

王罕桑昆二人、身を以て反りて出でて去る。的的克撒合勒の捏坤兀孫親征 錄捏羣烏孫河にて王罕喉乾きて入りたるに、乃蠻の斥候豁哩速別赤親征 錄火里速八赤の處に入りき。豁哩速別赤は、王罕を拏へけり。我は、王罕なり。云へども、

闊闊出馬丁に桑昆の棄てられ

認めず信ぜずして、そこに殺しけり。桑昆は、的的克撒合勒の捏坤兀孫に入らず、外に去りて徹勒に入りて水求めたるに、徹勒は、唐書の勅勒鐵勒の音に似たり。鐵勒の故地又は故地の一部に古名の残れるなるべし。卷十二に徹勒の地に井を穿てる事あり、廣き地方の名に似たり。野馬蒙古語忽刺惕黃にして蛮に刺されて立てるを、桑昆馬より下りて覷ひけり。桑昆の從者闊闊出云ふ馬丁に妻ありて、桑昆と三人にてありき。馬を闊闊出馬丁に執らしめけり。闊闊出馬丁、その驢馬を牽く。回り走りき。その妻言く「金あるを被る時、滋味あるを食ふ時、桑昆は、我が闊闊出云ふなりき。己が君を桑昆をいかんぞかく捨てて投りて去りたる。爾云ひて、その妻立ちて残りけり。闊闊出言はく、桑昆を男にせん。さてなるぞ。汝云ひき。その言につき、その妻言

馬丁の妻の忠言

君を棄てたる馬
丁の誅せられ

はく「婦の人は狗の面あり」と云はるゝぞ、我彼の金の盃をも
與へ、水も汲みて飲ませよ」と云ひき。そこより闊闊出馬丁は、
彼の金の盃を取ること、後に向き棄てて走りき。かくて來る
と、成吉思合罕の處に闊闊出馬丁來て、「桑昆をかく徹勒に棄
てて來ぬ、我こそ、そこに言ひ合へる言を都てをみな申して
上ぐれば、成吉思合罕勅ありて、その妻を恩賞して、その闊闊
出馬丁をば「正主の君をかく棄てて來ぬ。かゝる人今誰に伴
ごならば、倚信すべけん」と云ひて斬りて棄てたり。

王罕の頭を乃蠻
にての祭

乃蠻の塔陽罕（親征太陽可汗、元史太祖紀太陽罕）の母古兒別速
録（親征菊兒八速、塔陽罕妻）言はく「王罕は、前の老たる大なる罕な
りき。彼の頭を持ち來よ。其ならば祭らん、我等と云ひて、豁哩

塔陽罕を譏る可
克薛兀撒卜喇黑
の慨言

速別赤の處に使を遣りて、彼の頭を斷ちて持ち來させて、認
めて白き毛氈の上に置きて、媳婦ごもに媳婦の禮を行はし
めて、喝蓋せしめて、樂器を弾かして、蓋を執りて祭りき。そ
の頭かく祭らるゝ時、笑ひけり。笑へりこと、塔陽罕は、碎くべ
く踐みけり。そこに可克薛兀撒卜喇黑言ひき。死にたる王者
（蒙語罕古溫、罕人の頭を爾等又斷ちて持ち來て、次には爾等又
碎きて、何の善き事か。我等の狗の吠ゆる聲、惡しく爲れり。亦
難察必勒格罕言ひき。妻少く、夫なる我老いたり。この塔陽を
祈禱に依りて生れさせけり。嗚呼、懦く生れたる我が子は、久
後あまたの、下等なる、惡しき部眾を撫でて持ち能はんや」と
云ひき。今狗の聲は、「禍の近づける吠えを吠えたり。我等の合

塔陽罕の大言

敦古兒別速の法度は鋭く爲れり。我が罕懦き塔陽は弱くあり。爾は鷹を使ふこと圍獵すること二つより外に心も技も無し。云はれてそこに塔陽罕言はく「この東に些の忙豁勒あり。云はれたり。彼の民は老いたる大なる前の王罕を箭筒にて威して反らしめて死なしめたり。今その罕を爲らん。こしてあり。彼等天の上には日月二つ耀く光をなれ。こて日月二つは有るぞ。地の上に二つの合惕(罕稱)にはいかでか爲られん。我等往きて彼の忙豁勒を持ち來ん」と云ひき。(明天無二日地無二王)

止有一箇日月地上如何有兩箇主人。如今咱去將那達達取了。日月二つを一箇と譯したるは違へり。修正秘史はこの言を汪古惕部に言ひ遣りたる言に入れたりと見えて、親征錄には、使者の言として「日月在天了然見之。世豈有二王哉」と譯し、一つとも二つとも云はず、耀く光をば了然にてごまかせり。訶渥兒斯の重譯には、天に日二つ、一つの鞘に刀二つ、一つの目に眼二つ、一つ

天無二日地無二王

黑き忙豁勒

の天下に二人の王あるべけんやとあり。これは修正秘史の原文に拘らずして増飾したるなり。洪鈞の重譯は刀眼の譬を省き、我知天上惟一日一月。地下亦不容有兩王と譯して、親征錄の文に近寄せたり。元史の「天無二日、民豈有二王邪」と書けるは、秘史の文とは違へども、支那の古語にも合ひ、文意簡明にして筆力雄健。その時その母古兒別速言はく「いかにせんぞ、彼等を忙豁勒の民は、氣息惡しく、衣服黑暗なりき。」(宋の黄震の古今紀要逸編に「韃靼之近漢者曰熟韃靼、其遠於漢者曰生韃靼。生韃靼有二、曰黑白。皆事女真。黑韃靼、至武沒真叛之。自稱成吉思皇帝」と云ひ、孟珙の蒙韃備錄に「韃靼始起之地處契丹之西北。其種有三、曰黑白曰生。今成吉思皇帝及將相大臣皆黑韃靼也」と云ひ、又彭大雅の黑韃事略に「黑韃之國號大蒙古」と云へり。黑韃靼は漢人の蒙古を呼べる名にして、之を黒と云へるは、蓋衣服の黒きに由れり。然れども黑韃事略に「其服右衽而方領、舊以氈毳革新以紵絲金線色用紅紫紺綠紋以日月龍鳳無貴賤等差」と云へば、黒衣の黒韃靼も、太宗の世に至りては、既に外に遠ざかりて居れ。彼等の清き媳婦ごも息女ごもを若くは取り來させて、彼等の手足を洗はせて、牛羊の乳を若くは擠らしめん、只「云ひき。その時塔陽罕言はく「かくあらば、何か有らん。彼等忙豁勒の處に往

老將の諫を聽かざる塔陽罕の狂愚

きて、彼等の箭筒を必ず取り持ち來ん」と云ひき。

この言につき、可克薛兀撒卜喇黑言はく「嗚呼、大なる言を言ふかな、爾等嗚呼、懦き罕、宜しからんや、祕密にせよ」（明譯）你不

可說大話、這話你再休說、（譯）云ひき。可克薛兀撒卜喇黑に勸め

られ、（諫め）てあるに、脱兒必塔失、云ふ使を汪古惕の阿刺忽

石的吉惕忽哩に言ひて遣るには、この東に些の忙豁勒あり

云はれたり。汝は右の手をなれ。我はこゝより力を并せて

彼の少しの忙豁勒の箭筒を取らん」と云ひて遣りき。その言

に、阿刺忽石的吉惕忽哩答へて言はく「右の手をなれ、こゝ能

はず、我」云ひて遣りて、阿刺忽石的吉惕忽哩は、月忽難云

ふ使もて成吉思合罕に言ひて遣るには、乃蠻の塔陽罕は、爾

嚮背を誤らざる汪古惕

の箭筒を取りに來ん。我に右の手をなれ」と云ひて來ぬ。我は

爲らず。今我爾に警告して遣りぬ。（明譯）若不隄防、來て箭筒を

取られん、爾」云ひて遣りき。（譯）汪古惕の阿刺忽石的吉惕忽哩は、親征

本紀に白達達部主阿刺忽思、本傳に阿刺兀思剔吉忽里、汪古部人とあり。白達達

は、汪古惕の漢名にして、即ち古今紀要、蒙韃備錄の白韃韃なり。親征錄に曰く、乃

蠻太陽可汗、遣使月忽難、謀於王孤部主阿刺忽思、乞火里曰、近聞東方有稱王者、

日月在天、了然見之。世豈有二王哉。君能益吾右翼、奪其孤矢、阿刺忽思即遣使朶兒

必塔失、以是謀先告於上、後舉族來歸。我之與王孤部親好者、由此也。乃蠻の使脱兒

必塔失を汪古惕の使と誤り、汪古惕の使月忽難を乃蠻の使と誤れり。又元文類

に、閣復の駙馬高唐王闊里吉思の碑あり。闊里吉思は、阿刺忽石の曾孫なり。その

碑に曰く、亡金、斡山爲界、以限南北。阿刺兀思惕吉忽里一軍扼其衝。太祖聖武皇帝

起朔方、併吞諸部、有國西北。曰帶陽罕者、遣使卓忽難來、謂曰、天無二日、民無二王。汝

能爲吾右臂、朔方不難定也。阿刺兀思惕吉忽里、太祖終成大事、決意歸之。即遣麾下將禿里

必答思、齎酒六榼、送卓忽難於太祖、告以帶陽之謀。時朔方未有酒醴。太祖祭而後飲、

舉爵者三。使還、酬以馬二千、蹄羊二千、角。この碑文も、使の名を誤れること、親征錄

に同じ。元史阿刺兀思の名をば略けり。（譯）正にその時成吉思合罕は、帖篋

延客額兒（駱駝が原、親征錄また）帖麥該川（帖木垓川）に圍獵して、禿勒勤扯

兀惕を圍みて居る時、阿刺忽石的吉惕忽哩の遣りたる月忽
 難なる使この報を致し來ぬ。この報につき、圍獵の上にて便
 ちいかにかせん、我等「云ひ合へれば、多くの人言はく「我等
 の驕馬も瘦せたり。今何かせん、我等」云ひ合ひき。その時
 幹惕赤斤那顔（即帖木格）言はく「驕馬も瘦せたり。こて、いか
 んぞ辭まれん。我が驕馬もは肥えたり。かゝる言を聞きて、
 いかんぞ坐られん」云へり。又別勒古台那顔言はく「生きて
 居る間に、家人箭筒を取られれば、生きて何の詮か有らん。生れ
 たる丈夫死なば、又箭筒弓と骸ご一つに臥さば善からずや。
 乃蠻の民は、國大く民多し。こて、大なる言を言ひたり。我等、こ
 の彼等の大なる言に倚り、出馬して往きて、彼等の箭筒を取

乃蠻征伐の評議

らば、難きこゝあらんや。往かば、彼等のあまたの馬羣は、止ま
 りて残らざらんや。彼等の宮室は、空になりて残らざらんや。
 彼等のあまたの部眾は、高き處に遁れて上らざらんや。彼等
 にこのかゝる大なる言を言はしめて、いかんぞ坐られん。出
 馬せん、便ち「云へり。

幹兒訥兀山の半崖の駐營

別勒古台那顔の此の言を善しこして、成吉思合罕は、圍獵
 を罷めて、阿卜只合闊帖格兒（前阿卜只）より動きて、合勒合河
 の幹兒訥兀山の半崖に下馬して、（蒙語）客勒帖該合答（卷六の
 該合勒都惕と義同じ。即ち忽亦勒答兒を葬りたる處なり。親征錄には、哈勒合河
 建忒垓山、元史には建忒該山とありて、幹兒訥兀なる山の名を脱し、半の蒙語な
 る客勒帖該を山の名とせり。喇失惕も親征錄に同じ。この句に依りて考ふれば、
 成吉思汗の圍獵したる帖篋延客額兒も、冬籠したる阿卜只阿闊迭格兒も、溯り
 りて、王罕の不意打を食ひし者額兒温都兒も、みな今の車臣汗部の東南境にあ

志兵火兒赤（元史兵志）親烹飪以奉（侍衛番士）侍衛番士（侍衛の番士）厨官（語蒙）巴兀兒

赤（元史）上飲食者曰博爾赤（門者）語額兀顛赤（馬官）語阿黑塔赤（赤）も

晝は番直（語蒙）失克（客）に入りて、日落つる前に宿衛に擲して、

馬官は驢馬の處に―出でて宿れ（明）帶弓箭的人并散班護衛

厨子把門人等、教日裏入班來、至日落時、將管的物交付與宿

衛的、出去宿者若管馬的、守著馬（宿衛は、夜室の周圍に臥す

ものには臥させて、門に立つものには輪直して立たしめよ。

箭筒士侍衛は、その翌朝我等湯を飲まば、宿衛に告げて、箭筒

士侍衛厨官門者（士侍衛厨官門者）も、只只その職分を行へ。その居處に居よ。

宿衛は、三夜三日番直する日を盡して、只又法に依り三夜宿

り（下宿）合ひて、替り合ひて、夜宿衛して居れ。周圍に臥して宿

れ（下宿）勅ありき。かく千を千とし畢へて、扯兒必を任して、八十の宿衛七十の侍衛を番士に入らしめて、阿兒孩合撒兒に勇士（勇士）ごもを選び（選めば）て、合勒合河の斡兒訥兀山の半崖より乃蠻の民の處に出馬したるに、

鼠の年（我）泰和四年（西紀）一二〇四年（成吉思汗）四十三歳の時、夏の首の

月の第十六の日の紅き光に、麩を祭りて出馬したるに、客魯

噠河に沂り、者別忽必來（親征錄）虎必來（哲別）二人を先鋒とし

て行き、撒阿哩客額兒に到れば、康合兒罕山の頂に乃蠻の斥

候そこにありき。（康合兒罕山は、露西亞の地圖に見ゆる布爾林達班嶺な

も、その嶺の東なる古の撒阿哩客額兒の地を、衰古魯台草地と云ひ、その嶺の西

南を渾呼魯台戈壁と云ひ、衰古魯も渾呼魯も康合兒に近ければ、古は、その嶺又

はその嶺の一部を康合（我）等の斥候と逐ひ合ひて、我等の斥候よ

朶歹扯兒必の疑兵の謀

り、一匹の青馬に悪しき鞍あるを、乃蠻の斥候に取られき。乃蠻の斥候は、その馬を取りて語り合へらく、忙豁勒の驃馬瘦せたり。云ひ合ひけり。我等の軍は、撒阿哩客額兒に到りて、そこに止まりて、いかにせん。云ひ合へば、そこに朶歹扯兒必は、成吉思合罕に建言すらく、我等は但少くあり、少きが上に疲れて來ぬ。かくも止まりて、驃馬ごもを飽かせつゝ、この撒阿哩客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人毎に（この男の譯すべき語あり。文）法上の關係確かならず。五處に火を燒きて、火にて嚇さん。乃蠻の民は多し。云はれたり。彼等の罕は家より出でざりし弱き人。云はれたり。火にて惑はする間に、我等の驃馬ごもも飽けらんぞ。驃馬ごもを飽かしめ、乃蠻の斥候を逐ひて追逼

りて、彼等の中軍に合はしめ、その亂の裏に戦はば成らんか。建言したれば、この言を善しとして、成吉思合罕勅あるに、はかく便ち火を燒かしめよ。さて、軍士ごもに號令を傳へたり。かくて撒阿哩客額兒に廣がり下營して、命あるだけの人毎に五處に火を燒かしめたり。夜乃蠻の斥候は、康可兒罕山の頂より夜あまたの火を見て、忙豁勒を少し。云はざりしか。星より多き火あり。云ひ、塔陽罕に悪しき鞍ある青馬の小馬を送りて遣りて、忙豁勒の軍士ごも撒阿哩客額兒に滿つるまで下營したり。晝の内に増したらんか。星より多き火あり。云ひて遣りき。

敵の銳を避くる塔陽罕の協議

斥候のこの報に到られて、塔陽罕は、康孩山（親征）杭海山、史元

狗の鬪ひ

太祖紀沈海山、世祖紀十四康（合池兒兀孫）（水親征錄）哈只兒兀孫河）
 里脫脫の傳杭海、今の杭愛山の合池兒兀孫（合池兒のハ）にありしが、この報を致さるゝ、古出魯克罕（親征錄出律可汗、又曲出律可汗）なる子の處に告げて遣るには「忙豁勒の驕馬（元史屈出律罕抄）」
 思の傳曲書律（抄）なる子（子）の處に告げて遣るには「忙豁勒の驕馬（元史屈出律罕抄）」
 とも瘦せたり。星より多き火ありと云へり。忙豁勒多く有り。
 今我等合ひ畢へば、離るゝ、ここ難くならんか（明）今若與他連（明）
 兵後必難解（合）合ひ畢へば、その黒き目を瞬き做さず、その腮（合）
 を刺さるゝも、黒き血出づも、避くること無き剛なる忙豁（合）
 勒に合はば、成らんや。忙豁勒の驕馬（合）も瘦せたりと云はれ
 たり。我等は、部眾に阿勒台山（親征錄案臺）を越えさせ退かせ動
 きて、軍を整へて、彼等を誘ひて行きて、阿勒台山の下に到る
 まで、狗の鬪ひを鬪ひて行きて、我等の驕馬（合）もは肥えてあ

父を罵る古出魯克罕

り、腹を引起させ、忙豁勒の驕馬（合）もを疲れさせ、彼等の面の
 上に水注けん、我等と云ひて遣りき。（阿勒台の東南幹山は、東に向
 稽思泊の北を繞り、又東南に向ひ、白勒克那克科依山の南麓に今烏里雅蘇台城あり、塔陽罕は蓋そ
 の邊に駐牧せり。こゝに阿勒台山と云へる。）その言につき、古出魯克罕
 は、その杭愛山に接する邊を指せるなり。（合）その言につき、古出魯克罕
 言はく「彼等にかく婦人塔陽心怖ちて、この言を言へり。忙豁
 勒の多きは、いつこよりか來けん。忙豁勒の大半は、札木合（合）
 こゝに我等の處にあり。孕婦（合）の更衣の地に出でたること無
 き、車下の犢の草喫ふ處（合）に到れること無き婦人塔陽は、心怖
 ちて、この言を言ひておこせたるに非ずや」とて、使に依り、父
 を痛むるまで疚むるまで、言ひて遣りき。この言につき、塔陽
 罕は、己を婦人とせらるべく言はれて、塔陽罕言はく「力あり

君を罵る密哩速別赤

勇ある古出魯克到り合ひ殺し合ふ日に、必ずこの勇を勿失ひそ。到りあひ合ひ畢へば、離るゝこそ必ず難くあるぞ。云へり。その言につき、塔陽罕の下を管れる大官人豁哩速別赤(親征錄元史)言はく、亦難察必勒格罕なる爾の父は、同等の敵に男の背、驢馬の臀を見せざりき。今爾朝早く便ちいかんぞ心怖ちたる。爾(朝氣銳、晝氣惰暮氣歸と孫子曰へり。今早朝)爾をかく心怖づるを知りたらば、合屯の人にもあれども、爾の母を古兒別速を伴れ來て軍を治めしめざらんや。(親征錄昔君父亦年可汗、使入見也。今何怯邪。果懼之、何不令菊兒八速來。この譯は、簡にして質なり。元史は修飾を加へ、先王戰伐、勇進不回。馬尾人背、不使敵人見之。今爲此遷延之計、得非心中有所懼乎。苟懼之、何不令后妃來統軍)嗟惜けくも、可克薛兀撒卜喇黑に老いられたり。いかにも我が軍の法度は怠慢になれり。

忙豁勒の天時氣運こそ爲れるに非ずや。嗚呼、懦き塔陽、臆病の如くのみあり。爾(云)云ひて、その箭筒を打ちて別れ驅け去れり。

塔陽罕の奮進

その時塔陽罕怒りて言く、死ぬる命苦む身は、すべて一なるぞ。(苦まんよりの意)しかあらば戦はん。(明人死的性命辛苦的身軀都一般)您那般說呵、咱迎去與他厮殺。(云)云ひて、合池兒の水より動きて、塔米兒河(水道提綱の他米勒河)に沿ひ行きて、斡兒桓河を渡りて、納忽の崖の東の裾を過ぎ、察乞兒馬兀惕に到りて來つる時、成吉思合罕の斥候見て、乃蠻到りて來つ。云ふ報を致したれば、この報を致さるゝと、成吉思合罕勅あるには、多きよりは多く、少きよりは少く、損失になるぞ。(乃蠻)

逆戦の勅

叢行き海立合ひ
鏖戦ひ

乃蠻の退き蒙古
の進み

には死傷多く、寡き蒙古云ひて、彼等の迎へに出馬して、彼等の斥候を逐ひて、軍を整ふるに、叢の如き行きを行きて、海の如き立合ひを立合ひて、鏖の如き戦ひを戦はん」と云ひ合へり。

(叢行きは、廣がり行くこと、海立合ひは、廣がれる陣立、鏖戦ひは、烈しき突撃なり。黒韃事略に、其行軍、常恐衝伏、雖偏師、亦必先發精騎、四散而出、登高眺遠、深哨一二百里間、掩捕居者行者、以審左右前後之虛實、と云へるは、即ち謂はゆる叢行可盈百里と云へるは、即ち謂はゆる海立合ひなり。摧堅陷陣、全藉前鋒、枉革當先、例十之三と云ひ、又、交鋒之始、每以騎隊徑突敵陣、衝纒動、則不論眾寡、長驅直入、敵雖十萬、亦不能支と云へるは、即ち謂はゆる鏖戦ひなり。)

かく云ひて、成吉思合罕自ら先鋒となりて、合撒兒に中軍を整へさせて、斡惕赤斤那顔に従馬を整へさせたり。乃蠻は、察乞兒馬兀惕より退きて、納忽の崖の前なる山の裾に縁りて立ちき。かくて乃蠻の斥候を我等の斥候は逐ひて、納忽の崖の前なる後等の大中軍に遇ふまで

塔陽罕札木合の
問答

人肉にて養へる
四狗

逐ひて到りき。かく逐ひて到れるを塔陽罕見て、札木合はそこに乃蠻と共に出陣して來合ひて、そこに居て、塔陽罕は札木合に問ひけり。彼等はいかに、多き羊を狼追ひて圈に到るまで追ひて來るが如きは、これらはいかなる人かかく追ひて來ぬる」と問へり。札木合言はく、我が帖木眞安答、四つの狗を人の肉にて養ひて、鎖つけて繋ぎて、居るなりき。彼等、我等の斥候を追ひて來ぬるは、彼等なるぞ。彼等四つの狗は、銅の額あり、鏖の嘴あり、錐の舌あり、鐵の心あり、環刀の鞭あり、露を喫みて、風に乗りて行く。彼等殺し合ふ日は、人の肉を喫ふ、彼等、到り合ふ日は、人の肉を糧とす。彼等鎖を解かれて、今繋がれずして居るを喜びて、かく涎垂れ來ぬ。彼等」と云ひき。そ

躍り繞る兀嚙兀
惕忙忽惕

れら四つの狗、誰誰はそれらか。云へば、者別、忽必來二人、者
 勒篋、速別額台二人、それら四人なり。云ひき。塔陽罕言はく
 「但それらの下人より遠く立たん」云ひて、退り引きて、山を
 負ひて立てり。その後より躍りて繞りて來ぬるものごもを
 見て、又塔陽罕は、札木合に問ひき。彼等はいかに朝に放てる
 駒、母の乳を嘔ひて、母の廻りを疾く走る駒の如く、いかなぞ
 かく繞り來ぬる、彼等。問ひき。札木合言はく「彼等は、鎗ある
 男を追ひて、血あるもの（生きた）を剝ぎに剝ぐ、環刀ある男を
 逐ひて、倒して殺して、財を剝ぎ取る、兀嚙兀惕忙忽惕云は
 る、彼等。今繫がれずして居るを喜びて、かく躍りて來ぬ、彼等」
 云ひき。それより塔陽罕言はく「但しかあらば、それらの下

食る鷹の如き帖
木眞

人より遠く立たん」云ひて、又退り山に登り立てり。その後
 より來ぬる、食る鷹の如く、涎垂れて前みて來ぬるは、誰なる
 ぞ。塔陽罕は、札木合に問ひき。札木合言はく「この來ぬるは、我
 が帖木眞安荅。彼の總身は、銅にて鍛へられたるもの、錐を刺
 すに隙間無く、鐵にて疊みあげたるもの、大針を刺すに隙間
 無き我が帖木眞安荅、食る鷹の如く、かく涎垂れ來ぬるのみ。
 見たりや、汝等。乃蠻の眾は、忙豁勒を見ば、子羊の蹄皮も餘さ
 じ」云ひたりき。汝等見よ。云へり。
 （親征錄に「汝等見案荅舉止英
 異乎。乃蠻語嘗有言雖駮革去
 皮猶食不捨。豈能當之」と云へるは、この語を譯して修飾を加へたるに似たれ
 ども、文は甚だ蹇拙なり。元史に「乃蠻初舉兵、視蒙古軍、若殺羶羔兒、意謂蹄皮亦不
 畱。今吾觀其氣勢、殆非往時矣」とあるは、親征錄の文に似ずして、却て秘史の文に
 似たり。蓋元史のこの條は、親征錄に據らずして、大德七年に成れる太祖實錄に
 據り、その實錄は、修正秘史の文を）この言につき、塔陽罕言はく「但畏

大蟒の如き拙赤合撒兒

し。山に登り立たん（一）云ひて、山に登りて立ちけり。又塔陽罕は、札木合に問ふに、又その後より厚く（大衆を率るて）來ぬるは、誰なる（二）問へり。札木合言はく、訶額侖額客は、一人の子を人の肉にて養ひてありき。三尋の身あり、三歳の頭口を喫ひ、三重の甲を被て、三匹の強牛を拽きて來るぞ。箭筒ある人を都てを嚙むとも、喉を碍へられず。全き男を吞むとも、心臟に障らず。怒れば、昂忽阿（名箭の）の箭を拽きて放てば、山を越えてある十人、甘人の人を穿つほごに射る。鬪ふ敵を曠野を隔ててあるものを客亦不兒（名箭の）の箭を拽きて放てば、連ぬるほごに穿つほごに射る（明將人連穿透）。大に拽きて射れば、九百尋の地に射る。滅し拽きて射れば、五百尋の地に射る。人人より違

肝ある幹惕赤斤

ひ、古咧勒古（一）蟒（二）なる蟒（三）に生れたる拙赤合撒兒云はる、は、彼なるぞ云ひき。それより塔陽罕言はく、但然（一）あらば、山の高みを争はん。上へ登れ云ひて、山に登り立てり。又塔陽罕は、札木合に問ふに、彼の後より來ぬるは、誰なる云ひき。札木合言はく、彼は、訶額侖額客の末の子幹惕赤斤、肝あり云はる、なり。早く睡り曉に起き、黒闇よりも後れたるこそ、無く、立處（一）より（二）後れたるこそ、無し云ひき。塔陽罕言はく、然（一）あらば、山の頂の上（二）に上らん云ひけり。

札木合の心がは

札木合は、塔陽罕にこの言をかく言ふ、乃蠻より離れ、別れて出でて、成吉思合罕に報告を入れて遣るに、安答に言へ、さて言ひて遣るに、塔陽罕は、我が言に昏みて、上り争ひ驚き

て上れり。口にて殺されて、怕れて山に登り上れり。安荅戒愼
阿馬阿兒 阿刺黑荅 阿余 阿兀刺 阿巴鄰
 せよ。彼等は、山に上れり。この人ごもは、逆ふる氣色なし。我こ
 そは、乃蠻より離れたれ。云ひて遣りき。成吉思合罕は、日晚
 になられて、納忽の崖の山を取巻き軍立して宿れり。その夜
 乃蠻は、躲れ動かんごし、納忽の上より墜ちて、上に上に重な
 り合ひて、骨髪を碎き倒れ合ひて、爛木の如く立つまで壓し
 合ひて死に合ひけり。その明朝塔陽罕を窮めて拿へたり。古
 出魯克罕は、別に居たるにより、僅の人にて背き動きて、追驅
 けらるゝ時、塔米兒河に駐營しけり。その團營を立てかねて、
 動きて走りて出でて去れり。乃蠻の民の部落を阿勒台山の
 前に窮めて收めたり。札木合居たる札荅欄、合塔斤、撒勒只

乃蠻の潰敗

塔陽の虜はれ古
出魯克の走り諸
部落の降り

古兒別速の召さ
れ

兀惕、朶兒邊、泰赤兀惕、翁吉喇惕等、そこに又降れり。元史は火力
速八赤の言
 を敍べたる次に、太陽罕怒、即躍馬索戰。帝以哈撒兒主中軍。時札木合從太陽罕來、
 見帝軍容整肅、謂左右曰、云、遂引所部兵遁去。是日帝與乃蠻軍大戰、至晡禽殺太
 陽罕。諸部軍一時皆潰、夜走絕險、墜崖死者不可勝計。明日、餘眾悉降。於是朶魯班塔
 塔兒哈荅斤散只兀四部亦來降。と云へり。これは太祖實錄と親征錄、即ち聖武開
 天記とに本づきて、修飾を加へたるものにて、文は甚だ雅健なれども、事實は原
 本祕史と稍違へり。來降の部落の名にも誤りあり。塔塔兒の諸部は、前に已に殲
 滅せられたれ。事實なるべし。加）塔陽の母古兒別速を成吉思合罕は、
 伴れ來させて言はく、汝は、忙豁勒の氣息惡しと云ひて居ら
 ざりしか。今いかで來ぬる。汝と云ひて、成吉思合罕は、娶りけ
 り。

その鼠の年、秋、合喇荅勒、兀兒合喇荅勒の源、親征錄、迭兒惡河、源、別
 津塔兒河に、篋兒乞惕親征錄、蔑兒乞部の、脫黑脫阿別乞親征錄、元と成
 吉思合罕對陣して、脫黑脫阿を動かして、撒阿哩客額兒に彼

篋兒乞惕の勦討

荅亦兒兀孫の女
忽蘭合屯の拜謁

の人民住具部落を虜へたり。(この撒阿哩原は蒙古の舊庭の地と異なるに似たり。塞北には同名の地甚だ多し。親征錄には迭兒惡河) 源不刺納矮胡之地とあり。脱黑脱阿は、忽都赤刺温なる子ごもご、僅の人に、身を以て逃れて出でたり。かく篋兒乞惕の民虜へらるゝ時、豁阿思篋兒乞惕(卷二卷三の兀洼思篋兒乞惕親征錄兀花思蔑兒乞部)の荅亦兒兀孫(元史親征錄)は、息女忽蘭合屯(親征錄忽蘭哈敦元史后妃表忽蘭皇后)を成吉思合罕に見せまつらん。さて伴れて來ぬるに、路にて軍士ごもに妨げられて、巴阿嚙の納牙那顔(卷五なる你出古惕巴阿嚙の納牙阿)に遇ひて、荅亦兒兀孫言く「この息女を成吉思合罕に見せまつらん。さて來ぬ、我ご云ひき。そこに納牙那顔言く「汝の息女を我等俱に見せまつらん」さて止めけり。止むる時、荅亦兒兀孫に「汝獨にて往かば、路にて軍士ごも亂るゝ時に、汝をも活さず、汝

納牙阿の忠謹

の息女をも亂すべし」ご云ひて、三日三夜止めけり。そこより忽蘭合敦ご共に荅亦兒兀孫を率ゐて、共に納牙那顔は、成吉思合罕に致せり。それより成吉思合罕は、納牙に「いかなぞ妨げて居たる、汝」さて、甚だ怒りて、嚴しく仔細を問ひて、「法にあてん」さて問ひつゝある時、忽蘭合敦言はく「納牙阿は言ひき。「成吉思合罕の大官人なり、我は我等俱に汝の息女を合罕に見せまつらん。路にて軍士ごも亂さん」さて勧めけり。今納牙阿より別なる軍士ごもに遇はば、亂に「又は正に入りけんか」(明譯)若不遇著納牙、畱住阿、如今也不知如何。この納牙阿に遇ひたるは、我等の幸となれり。今納牙阿を問ひ給ふに、合罕恩賜せば、上帝の命にて父母の生みたる皮膚を問ひ給はば「ご

奏さしめけり。納牙阿は問はるゝ時合罕より外に我が面は
 「向ふこと無くあるぞ。外國の民の腮美しき女子妃、臀節好き
 駙馬に遇へば、大君のもの〔それ〕も云ひて居りしぞ。我、これ
 より外に我が心あらば、死なん。我、云ひき。成吉思合罕は、忽
 闐合敦の言上を善しこして、その日に便ち審べ試みれば、忽
 闐合敦の奏したるに違はずして、成吉思合罕は、忽闐合敦を
 恩賞して愛みたり。納牙阿の言違はずして、成吉思合罕は、善
 しこして、實の言ある〔人〕なりき。云ひ、大なる勾當を委ねん」
 ごとて恩賞せり。

成吉思汗實錄卷の七終り。

成吉思汗實錄卷の八。

斡歌歹の妻とな
る朶唎格捏

峯の寨の攻撃

篋兒乞惕の民を虜へて、脱黒脱阿別乞の太子忽都の合秃
 惕（合屯の複稱）禿該朶唎格捏（元史后妃表）脱列哥那六
 皇后、乃馬眞氏、追諡昭慈皇后をそこに斡歌歹合罕（卷六の斡闊歹）に
 與へたり。篋兒乞惕の半の部眾反きて、峯の寨（蒙語）台合勒豁兒
 合（語譯）山頂寨子、文譯台合勒山（親征錄）赤老温を官人として、左手の
 りて、鎖兒罕失喇の子沈白（親征錄）弟闡拜を官人として、左手の
 軍にて、寨に據れる篋兒乞惕を攻めさせに遣りぬ。脱黒脱阿

額兒的失河不黑
都兒麻河の解

は、忽都赤刺溫なる子ごもご共に、僅に身をもて背きて出でたるを、成吉思合罕追驅けて、阿勒台山の前に冬籠して、牛の年（我が元久二年乙丑、宋の寧宗開禧元年、金の泰和五年、西紀一二〇五年、太祖四十四歳の時）春、阿喇嶺により越えて往けば、乃蠻の古出魯克罕は、部眾を取られて、かく背きて出でたるにより、僅の眾にて、篋兒乞惕の脱黒脱阿と二人合ひて、額兒的失河の（深）水なる不黒都兒麻河の源に會して、軍を整へて居りき。（額兒的失河は、親征録元史太祖紀に也兒的失河など見え、水道提綱には額勒濟斯河、西域水道記には額爾齊斯河、露西亞の地圖には伊兒齊斯河とあり。上流の二源を庫伊兒齊斯喀喇伊兒齊斯と云ふ。庫は黃、喀喇は黒なり。二水合ひたる後、喀喇伊兒齊斯と云ふ。阿勒泰山の東南幹山の西南麓の諸水を合せて、齋桑諾爾に入り、諾爾より北に流れ出でてより伊兒齊斯河と云ふ。不黒都兒麻河は、西域水道記の阿克圖爾瑪河にして、露西亞の地圖には布合塔兒瑪河とあり。科布多の西北なる阿勒泰山頂の西麓より出で、北緯四十九度の北を西に流れて、伊兒齊斯河に入る。蒙古地方より布合塔兒瑪の源に往くには、科布多河の上流なる索果克河の源より阿兒古特嶺の南端を踰ゆる路順なれば、阿喇

脱黒脱阿の戦死

嶺は、即ち阿兒古特嶺（成吉思合罕到りて對陣したれば、脱黒脱阿などの古名なるべし）成吉思合罕到りて對陣したれば、脱黒脱阿はそこに流箭に射られて倒れき。彼の子ごもは、彼の骸を取りかねて、彼の身を持ちて去りかねて、彼の頭を斷ちて持ちて去りき。そこに乃蠻篋兒乞惕共に會して對陣する能はずして、逃れ動く時、額兒的失河を渡る時、溺れて多數を水に死なしめき。僅に出でたる乃蠻篋兒乞惕は、額兒的失河を渡り畢へて、離れ動きけり。乃蠻の古出魯克罕は、委兀兒台（卷三、怛怛、親征録元史畏吾兒、唐の回紇の遺種にして、その都は唐の北庭都護府の址なる別失八里城、今の濟木薩の稍北にあり、その地は天山の南北に跨り、布合塔兒瑪河の源より委兀兒の地に往くには、その河に沿ひて西に下らずして、喀喇喀巴河に沿ひ南に下りて、喀喇伊兒齊斯河を渡り、猶南に進みて、委兀兒の西境に入）合兒魯兀惕を過ぎて、（合兒魯兀惕は、親征録元史本紀唐書の葛邏祿にして、國は今伊梨の西）撒兒荅兀勒の地に垂河に居

乃蠻の古出魯克
罕の奔竄

る合喇乞蒼惕の古兒罕に合ひに往きけり。篋兒乞惕の脱黑脱阿の子ごも忽都合惕赤刺温が頭ごなれる篋兒乞惕は、(都忽赤刺温は、前に見えたり。忽都合は、速不台の傳に霍都、土士哈の傳に火都とあり。合惕は、下文に合勒とあり。元史巴而朮阿而忒的斤の傳には、脱脱之子火都赤刺温馬札兒秃薛干四人とありて、合惕又は合勒に似たる名なし。元史類編に親征記を引きて、脱脱の四子の名を擧げたるは、巴而朮の傳と同じけれど、今の親征記録には、只脱脱之子四人とありて、その名なし。洪鈞の別喇津を譯したるには、忽都合、赤刺温、赤攸克、呼圖罕、蔑兒根とあり。その呼圖罕を多遜は庫圖罕と書けり。不喇惕、圖罕、乃迭兒は、別喇津を引きて、脱克塔の六子の名を擧げたるに、呼圖罕を呼勒、圖罕と書けり。合惕は、呼圖罕又は庫圖罕の下略にて、下文の勒は、誤寫ならんか。又は合勒は、呼勒圖罕の下略にて、この惕は、誤寫ならんか。) 康鄰を欽察兀惕を過ぎ去りけり。
(康里欽察里の名は、元史に屢見えたり。康里は、漢代の康居の遺種にして、康克居りし人種なり。欽察は、下文には正しく乞卜察克ともあり、康里の) 西隣にて、今の露西亞の南部、佛兒夏河の左右に廣がりし人種なり。) そこより成吉思合罕は回りに阿喇嶺により越えて舊營に下馬せり。沈白は、峯の寨に據れる篋兒乞惕を窮めき。そこに篋兒乞惕をば、成吉思合罕あり、彼等の皆殺しを殺さしめて、(皆殺の意なり。) 彼等の残れるをば軍士ごもに虜へさせたり。又先に降りたる篋兒乞惕は、舊營より反き起りき。舊營に居たる我等の家人ごも、彼等を敗りき。そこに成吉思合罕あるに聚りて居らしめん。云ひしに、彼等只反きけり。こて、篋兒乞惕を各に盡くるまで分けさせたり。

蔑兒乞惕の誅滅

その牛の年、成吉思合罕ありて、速別額台を鐵の車にて(親征録には、以鐵裹車輪とあり、洪鈞は、以鐵釘密布於車輪、庶行山路不易壞と譯せり。) 脱黑脱阿の忽都合、赤刺温等なる子ごもを追はしめに遣る時、速別額台に成吉思合罕ありて宣らすには、脱黑脱阿の忽都合、赤刺温等なる子ごもは、去り驚きて回りに射合ひて、套竿を帯びたる野馬、

箭やに中あたれる鹿しかとなりて去されり。彼等かれらを、翅つばさあるものとなりて、
 飛とびて天てんに上のぼらば、汝速別額台なんぢすべえたいは、海青かいせいとなりて飛とびて捕とらへ
 ずや。土撥鼠どはつそとなりて爪つめにて爬はひて地ちに入いらば、鋏くはとなりて
 鑿ほりて尋たづねて追おひ上げずや。魚うをとなりて騰てん吉思きすの海うみに入いら
 ば、汝速別額台なんぢすべえたいは、旋網拖網めぐりあみひきあみとなりて撈すくひて收をさめて取とらずや、
 汝なんぢ。(何秋濤なれあくとあへなんぢにてつくるまをてかたうせんなんぢのをの朔方備乘しやくほうびじやうに、この條じょうの明譯文めいぎやくぶんを約めめ
 遠遁とん如に馬帶竿ばたいさん、如に鹿負箭しかふせん。若飛しやうひ、汝作なんぢなれ鷹鷂たかはやぶさ、若入しやうにら穴あな、汝作なんぢなれ鋤すき、若入しやうにら海うみ、
 汝作網なんぢなれあみ、與に汝鐵車なんぢてつくるまをてかたうせんなんぢのを、以堅を汝志なんぢのこころ。)又また高たかき峠たうげを越こえ、寛ひろき河かはを渡わたり
 に遣やりぬ、汝なんぢを地ちの遠とほきを想おもひて、軍いくさの馬うまごも瘦やせざるに撫いたは
 れ。糧かれひを盡つくさざるに惜をしめ、驢馬せんば瘦やせ畢をへば、撫いたはるごも成ならず。糧かれひ
 盡つくし畢をへば、惜をしむごも成ならず。汝等なんぢらの路みちに獸けだもの多おほくあるぞ。過すぎ

遠征の心得

んご思おもひて行ゆく時ときは、軍いくさの人ひとを獸けだものに勿な走はしらせそ。限かぎり無なく勿な圍まき
 獵がせそ。軍いくさの人ひとに糧かれひを添そへ櫓蓋ろがいとなれ。て圍獵まきがせば、限かぎりりて
 圍獵まきがせよ。(櫓蓋まきの蒙語まうご汪格わうかく古解こかいり得えず。明譯めいぎやくに從したがへ)限かぎりある圍獵まきがより
 外ほかは軍いくさの人ひとの鞍くらの鞅しりがいを勿な繫かけさせそ。轡くつわを搭かけず口くちを開ひらけ
 ずして行ゆけ。かく定さだめ合あひて行ゆけば、軍いくさの人ひと馬うまを驅かるこことい
 かで出で來きん。かく定さだめて、便すなはち法度はふどを越こゆるものを拿とへて打う
 て。我等われらの勅みことを越こゆるものを、我等われらに認みとめらるゝ如ごときものを、
 我等われらに與あたへておこせよ。我等われらに認みとめられざるあまたをば、只ただ
 そこに便すなはち斬きらしめよ。河かはのあなたに相離あひはなれん、汝等なんぢら。只ただ道理だうり
 によりて行ゆけ。山やまのあなたに相別あひわかれん、汝等なんぢら。外ほかをば別ことに勿な想おも
 ひそ。長生ちやうじやうの上帝あまつかみに力勢ちからいきほひを添そへられて、脱黑脱阿とくくつとあの子こごもを

赦すべからざる
深き鍾

手に入れば、我等に持ち來るまでも何あらん、そこに汝等棄てよ。勅ありき。速別額台に又成吉思合罕言へらく、汝を出征せさするは、我小き時に、三つの篋兒乞惕の兀都亦惕に不兒罕合勒敦を三たび繞らせて、怕れさせられたりき。我かゝる讎ある民を、今又口舌を放ちて去りき。長き梢に深き底に到り合へよ。〔明譯我欲教你追到極處〕さて、追はしむる極端まで、鐵の車を造りて、牛の年出征せしめたり。我等を、背處にありても、對面の如く、遠きにありても、近きが如く思ひて行かば、上なる天帝にも祐護せられんぞ。汝等、勅ありき。〔この鐵は、卷十なる速別額台の篋兒乞惕を窮むる處に書くべきものなり。親征錄も喇失惕の史も、速別額台の鐵車の遠征をこの年より十二年後なる丁丑の年に載せたり。卷十なる速別額台の遠征は、年を掲げざれども、即ち丁丑の役なるべし。蒙古人は、年を繰るに、十二支の象のみを用ひて、十干を用ひざりし故に、年紀誤り易し。秘史の作者は、この勅を牛の年と記憶したるに由り、偶誤りて、十二年前の牛の年、即ち太祖即位の前年なる乙丑の年に載せたるなり。〕

從士に捕はれたる
札木合

〔成吉思合罕は、乃蠻篋兒乞惕を窮め畢へたれば、札木合は、乃蠻に居りてそこに部眾を取られたれば、但五人の從者ある賊となりて、儻魯山〔元史地理志の唐麓嶺山、阿勒泰山の東北幹、今之湯努山〕の上に入りて、獐羊を殺して焼きて喫ふ時、そこに札木合は、從者どもに言ひき。誰が子どもぞ、この日獐羊を殺してかく喫へる。云ひき。その獐羊の肉を喫ひ居る間に、五人の從者は、札木合を手に掛けて捕へて、成吉思合罕の處に伴れ來ぬ。札木合は、從者どもに捕へて來られて、合罕安荅に白さく、黒き老鴉は、黒鴨眞鴨を捕へたり。下郎の奴は、君に手を致したり。大君なる我が安荅は、いかなぞ差らん。青き忽刺都〔鳥の類名〕は、孛兒

不忠の臣の誅せられ

臣莎那（種の名）を捕ふるに爲れり。奴なる家人は、本の主を圍みて襲ひて捕ふるに爲れり。賢き我が安答は、いかに差らん。言へば、札木合のその言につき、成吉思合罕勅あるには「正主の君に手を致せる人をいかにぞ存らせられん。かゝる人は、誰にか伴ならん。正主の君に手を致せる人をば、その族に至るまで斬らしめよ」と勅ありき。すぐ札木合の面前にて、彼を手に掛けたる人ごもを斬らしめて與へたり。成吉思合罕は、札木合に言へて言はく「今我等二人合へり。伴ならん。片方の轅となり合ひて過ぎたれば、別になり離れんと思へり。汝今一つに合ひ住みて、忘れたるを心附け合ひて、睡りたるを覺し合ひて住まん。別れて外に行けごも福あり吉

舊友を憐む成吉思汗の寛厚

翰額列

翰額兒迷赤連

兀馬兒塔

兀勒澤

事ある我が安答なりき。實に死合ふ（ふ）日には、心を痛めた。りき。汝外（昂吉答）に別れて行けごも殺し合ふ日には、肺心を痛めた。りき。汝いつこ云へば、客咧亦惕の民と合刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、王罕なる父に言へる言を告げておこせたるは、汝の恩なるぞ。又乃蠻の民を言にて死なしめ、口にて殺して、恐れさせたるを比較せよと云ひて、報告を汝のおこせたるは、恩となりしぞと

事ある我が安答なりき。實に死合ふ（ふ）日には、心を痛めた。

兀忽勒都

兀都兒

翰額

りき。汝外（昂吉答）に別れて行けごも殺し合ふ日には、肺心を痛めた。

昂吉答

阿刺勒都

阿兀失吉

りき。汝いつこ云へば、客咧亦惕の民と合刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、王罕なる父に言へる言を告げておこせたるは、

汝の恩なるぞ。又乃蠻の民を言にて死なしめ、口にて殺して、

恐れさせたるを比較せよと云ひて、報告を汝のおこせたるは、

恩となりしぞと

言へば、札木合言はく「先の日小き時に、豁兒豁納黑主不兒

に罕安答と共に安答と云ひ合へる時、消化れざる食物を食

ひ合ひて忘れざる言を言ひ合ひて、衾を分け合ひて住ま

れしぞ。傍の人に唆されて、横の人に戳かれて、離れ畢へて、緊

札木合の慚悔

款多列都

闊乞兀勒迭

合勒只兒忽

合惕忽黑答

合合濬

合答合

要ある言を言ひ合へり(言ひ合へる)とて、黒き面皮を剥がれたるより、近づきかね、罕なる安苔を暖かき顔を見る能はずし、て行きたるぞ、我、忘られざる言を言ひ合へり(合刺温)とて、赤き面皮を剥かれたるより、長き心ある安苔を誠の顔を見る能はずして行きたるぞ、我、今我が罕安苔恩賜して、我を伴せんと云ひき、伴となるべき時に、伴ならざりき、我、今安苔は、圓なる國を平げたり、外國をも併せたり、爾罕の位は、爾に定めり、天下今定になれる時、伴なりて何の助ならん、我、却て安苔の黒き夜の夢に入らん、我、明き日に、爾の心を苦めん、我、爾の領の蝨、爾の底襟の刺ならん、我、寛厚なる嫗あるなりき、我、安苔より攜れんと思へる頃、病になられたりき、我、今

思の外に潔き姦雄の末路

札合

阿魯昔

阿兒賓

阿勒只阿思

命を知り命に安じたる札木合の善言

この生涯に、安苔我二人の關係に由りて、出づる日より没る日に至るまで、我が名は到りたるぞ、安苔は、賢明なる母あり、生得俊傑に生れて、技能ある弟ごもあり、勇猛なる侍に七十三の驢馬にて侍はるゝ、こことなりて、我は安苔に勝たれたるぞ、我は、母父より幼くて後れて、弟ごも無く、我が妻は話好き(蒙語)朶抹黒赤、哩、周詩の謂はゆる「婦有長舌維厲之階」にて、頼なき従者あり、かるが故に上帝より命ある安苔に勝たれたるぞ、安苔恩賜せば、我を疾く逝なせば、安苔心を安めんぞ、爾安苔恩賜して殺さしむるには、血を出さず殺さしめよ、(血を出さず殺す)べけれども、首の離れざるを幸とするなり、蒙古の舊俗にて、皇族の罪ある者を殺すには、多くこの死にて臥さば、我が死骸は、高き地にて、永く遠

情あり義あり禮ある處分

く爾の子孫の子孫に至るまで護りて與へん。幸はふる「鬼」なるぞ、我、根原の別なる生殖あるものなりき、我（札察兒の裔に非ず、李兒只斤氏と異なるが）。故に、根原異なりと云へり。許多の生殖ある安苔の威靈に壓されたるぞ、我、我が言へる言を忘れず、晩く早く想ひて語り合へ。今我を疾くせよと云へば、これに依り彼の言に成吉思合罕言へらく「我が安苔は、外に行きても、我等を口一杯に謂ひ（譏）て命に害を彼の考へたることを聞かざりしぞ。學ばるゝ人なりき。然れども彼肯かず（譯）是可以學的の人、他不肯活待（已むを得ず殺さんとシむるをかれに）教他死。死なしめん云へば、卦に入らず（て占トすれば殺すべしと云ふこと、卦に現れず、蒙韃備録に凡占ト、吉凶進退殺伐、毎用羊骨、扇以鐵椎火椎之、看其兆、坼以決大事、類龜ト也）と云ひ、黑韃事略に其占筮、則灼羊之枚子骨、驗其文理之逆順、而辨其吉凶、天棄天子、一決於此、信之甚篤、謂之燒琵琶、事無纖粟必占、占不再四、不已と云へるは、蒙古のト法なり。耶律楚材の傳にも、帝每征討、必

命楚材ト、帝亦自灼羊。理由なく命に害を爲さば善からじ。重き道理ある人なり。この必ず（このは理由に、必ず）彼の「殺さるべき」理由を言へ。前に擲只荅兒馬刺、台察兒二人の馬羣を奪ひ合ひたる故に、札木合安苔、汝は、直に敵對して來て、荅蘭巴勒主惕に戰ひて、者咧捏の隘に追ひ入れて、我をそこに怕れしめざりしか、汝、今伴ならん云へば、肯かず、汝の命を愛めば、従はざりき、汝と言へ。今汝の言により、血を出さず逝なせんと言へ。云ひて、血を出さず逝なせて、彼の骨を面前に勿棄てそ、善きを取れと勅ありき。札木合をそこに逝なせて、彼の骨を取らしめたり（譯）仍以禮厚葬了。

斡難河の源なる二たびの即位

かく毛氈の帳裙ある國民を平げて、虎の年（我が土御門天皇建永元年丙寅宋

の寧宗開禧二年、金の泰和六年、西の紀一二〇六年、太祖四十五歳の時、（親征録元史みな九旂の白旗とあり、喇失惕を洪ある白き纛を立てて、鈞の重譯したるにも九脚の白旗とあれども、洪鈞は之を打消して白き馬の尾九つを旂とせるにて、旗に非ずと云へり。脚とは白旂の垂れたるを云へるにて、旂に非ず、蒙古源流に、九人の烏爾魯克即ち九猛將の稱ありて、親軍九隊の帥を云へり。訶渥兒斯は、これに依りて「大なる纛を建て、白旂九つを重ねて繋けて、九烏爾魯克を表したるなり」と云へり。されども九烏爾魯克の稱は、他の書に更に見えざれば、信じ難し。阿不勒嘎自の書に「蒙古は九の數を尙ぶが故に、贈物にも九を用ふ。その制は、突兒克より出でたり」とあれば、白旂の九つなるも、ただめ。成吉思合罕に罕の號をそこに奉れ

り。（これにて成吉思汗は、二たび合罕の位に陞れり。元史本紀に「元年丙寅帝大り。會諸王羣臣建九旂白旗即皇帝位於斡難河之源。諸王羣臣共上尊號曰成吉思皇帝」とあり。錢大昕の秘史の跋に「當太祖幼時、勢甚微弱、賴王罕札木合二人、假以徒眾羽翼漸成、始立名號。紀但云丙寅歲羣臣上尊號曰成吉思皇帝、不知成吉思罕之號蓋已久矣。其後遣使誚責案、彈火察兒等、謂昔者吾國無主、汝等推戴吾爲之主者、正指此事也。先稱合罕者、一部之主。後稱皇帝、乃爲羣部之主。豈可略稱罕一節而不書乎」と云へるは、洵に卓見なり。但錢氏は、前後の名號を合罕と皇帝とに分けたれども、この丙寅の即位も皇帝と稱したるにはあらで、前と同じく合罕と云へるなり。親征録元史のみならず、宋人の記録などにも、成吉思皇帝とあるは、當時蒙古に仕へたる漢臣等の漢譯したるに本づきたるにて、蒙古にてしか稱

したるには非ず。先後の合罕の異なる所は、先には蒙古部の主となり、今は迭列該天下の主、即ち眞の合木渾合罕となるなり。すべて創業開國の君にして二たび即位の禮を行へるは、珍しき事に非ず。晉の代の羣雄には、初に天王の位に即き、後に皇帝の位に即きたる人甚だ多し。後魏の道武帝は、初に魏王と稱し、登國となりて、後に皇帝となれり。遼の太祖は、初に金國汗の位に即き、天命と建元し、王となりて、神冊と建元せり。清の太祖は、初に契丹可汗の位に即き、天命と建元し、太宗その位を繼ぎ、天聰と改元し、後に大清國皇帝となりて、崇徳と改元せり。これらには、みな初に小國の主となり、後に大國の主となれるにて、成吉思汗の二たびの即位もその類なり。また初の即位は、合罕とは稱すれども、金朝に貢賦を納め、金の封爵を榮とし、小國の主なることを自らも認め居れども、後の即位に至りては、天下の主となれる積りなれば、元史にこの寅年の年を太祖の元年と立てたるは、至當の事なり。されども建元と云ふ事は、蒙古人の知れることに非ず。この寅の年より後、秘史と喇失惕の史とは、黒韃事略に其正朔昔用十二支辰之象、今用甲輪流、皆漢人契丹女眞教之。若韃之本俗、初不理會得。只是草青、則爲一年、新月初生、則爲一月、人間其庚甲若干、則倒指而數幾青草と云へり。彭大雅のこの書を著せるは、太宗の時なるに、その言猶かくの如くなれば、太祖の朝に建元の事なきこと知るべく、この年を太祖の元年と名づけたるは、後の世に、大方は世祖の朝に、追定したる事なるべし。また蒙古源流に「戊戌年、特穆津年十七歲、布爾徳哈屯甫十三歲、遂爾匹配、特穆津年至二十八歲、次己酉、于克魯倫河北郊、即汗位、稱源流の外に據るべきものなし。孛兒帖を娶れる年と初の即位の年とにつきては、

汪古兒
出勒格台
李囉忽勒

失吉忽秃忽

古出
闊闕出

豁兒豁孫

許孫

忽亦勒答兒

失魯孩

元史忠義傳に伯八の父脫倫閣里必、汪古兒、乞顏氏、巴兒壇、巴阿

晃合丹氏、明里也赤哥の子とあり。出勒格台、(即ち赤勒古台、速勒都) 李囉忽勒、(即ち李

より見え、親征録に雍) 宣懿太后の養子、四傑の一人、卷四より見えたり。元史本傳に、博爾忽、許兀慎氏と

あり。錢大昕の考異に、元明善の洪陽忠武王の碑には許慎氏に作り、李朮魯獅の

河南淮北、蒙古軍都萬戶府の増修公廨の碑には旭申氏に作り、と云ひ、輟耕録

の蒙古七十二氏の中には忽神と書けり。その名も、太祖紀に博羅渾、李羅歡、鉢魯

完など書き、蒙古源流には) 失吉忽秃忽、(即ち失乞刊忽都、塔塔兒の人、宣

烏古新の博羅郭勒とあり。古出、(即ち曲出、篋兒乞惕の人、宣懿太) 闊

親征録には忽都忽那顏、蒙古源流) 豁兒豁孫、(卷十に豁兒合孫とあり。元史撒吉

には塔塔爾の錫吉呼圖克とあり。闊出、(子、卷三より見えたり。許孫、(元史列傳に哈散納、怯烈亦氏と云ひて、濁水の誓に與れる人なり、

人なり) 許孫、(その文は卷六の注に引けり。許孫は、哈散と轉じ、竟に哈撒納とな

れるべし) 忽亦勒答兒、(即ち忽余勒答兒、忙忽惕氏、卷四より見え、元史本傳に

禪ともあり。合刺合勒、只惕の戰に傷を負ひて已に死にたれば、このたびの任命

は、贈官にして、卷九なる勅語に依れば、千戶の職はその子孫に襲がせたるなり) 失魯孩、(元史麥里、傳に、麥里、徹兀臺氏、祖雪里堅、那顏、從太祖、與王罕戰、同飲

者台、(即ち哲台、忙忽惕氏、卷三より見えたり。卷三なる帖木真、即位の條に哲台

徹兒必二人と云ふべきを略きたるなり。その後文に、多歹、扯兒必、は奴婢を統ぶ

とあるは、別なる人の如く聞ゆれども、卷七なる扯兒必、六人、任命の處に、朶歹、扯

兒、見え、元史阿塔海、傳に、阿塔海、遜都思人、祖塔海、拔都) 察合安豁阿、(兀捏

兒、驍勇善戰、嘗從太祖、同飲黑河水、以功爲千戶とあり) 阿刺黑、(你出古惕、巴阿嚙氏、失兒古額、禿額、不堅の子、卷五に見え、元史

がせた) 阿刺黑、(伯顏の傳に、伯顏、蒙古八隣部人、曾祖述律哥圖、事太祖、爲八隣

部、左千戶、祖阿刺囊、父) 鎖兒罕、失喇、(速勒都思氏、四傑の一人なる赤老溫の

職、兼斷事官とあり) 不魯罕、(元史忽林

の托爾干、沙喇とあり。九十五の千戶の中に、赤老溫の名見) 合喇察兒、(巴

忽林、失、八魯刺、解氏、曾祖不魯罕、割、事太祖、從平諸國、充八魯刺) 速亦

刺思氏、速忽薛禪の子、卷三) 闊可搠思、(即ち闊闕搠思、巴阿嚙氏、卷三に) 乃牙阿、(即ち納牙阿、你出古惕、巴阿嚙氏、失

客禿、(即ち雪亦客禿、徹兒必、晃豁) 乃牙阿、(兒古額、禿額、不堅の子、阿刺黑の弟

者台

塔孩

察合安豁阿

阿刺黑

鎖兒罕失喇

不魯罕

合喇察兒

闊可搠思
速亦客禿

乃牙阿

冢率
古出古兒

卷五に見) 冢率 (即ち種索卷三に見えたり。卷三の譯文) 古出古兒 (即ち窟

巴刺斡囉納兒台

別速惕氏迭該の弟卷三に見えたり。卷九の勅語に依れば古出古兒) 巴刺斡

囉納兒台 (札刺亦兒の巴刺斡に別たんが爲に、姓を加へたり。錢大昕の元史氏

荅亦兒

羅台氏にして、その曾祖八郎は、千戸となれり。荅亦兒 (元注思篋兒乞惕

二より見えたり。豁兒赤兀孫も、只豁兒赤とのみも云へば、荅亦兒兀孫も、只荅亦

兀孫、已に降りて復叛き、鬪拜等に討ち平げられたり。元花思篋兒乞惕部長帶兒

額丁の叛けること見え、叛けるものは、篋兒乞惕の他の部眾なり。又喇失惕) 木

不只兒

格 (昌祖忙哥、以后族備太祖宿衛) 不只兒 (元史布智兒と書きて、短き傳あり。蒙古の脱脱里台氏、紐兒傑拔都の子にし

て、父子ともに太祖に事ふと云へり。脱脱里台も塔塔兒なるべし。憲宗紀に憲

宗即位の初、以牙刺瓦赤不只兒某等充燕京等處行尙書省事とある。不只兒は、

造寶鈔とあり。大都は即燕京、札魯忽赤は斷事官なり。世祖紀に「憲宗令斷事官牙

蒙古兀兒
朶羅阿歹

乃合三人の傳には皆ト只兒と書けり。蒙古兀兒 (卷十に蒙客) 朶羅阿歹

李堅

(外には) 李堅 (元史忽都の傳に「忽都、蒙古兀羅帶氏は、鞍耕録に兀羅歹とあり) 忽都

忽都思
馬喇勒
者卜客

忽都思 (巴嚕刺思氏、忽必來の弟卷三に見) 馬喇勒 (外には) 者卜客 (札刺

氏、帖列格禿伯顔の子、古溫兀阿の弟、卷四に見え、卷十にも見ゆ。卷四には、者卜客

を合撒兒に與へたりと云ひ、親征録に、斡河の會の前に、哈撒兒その麾下哲不哥

の計に従ひ、弘吉刺部を掠めて、太) 余嚕罕 (元史奧魯赤の傳に、祖朔魯罕とあ

る。父豁火察と共に太祖に事へ、朔魯) 闊闊 (元史に篋兒乞惕より降附せる闊

罕は、後に野狐嶺の戦に戦死せり。闊闊 (闊の傳あれども、世祖の時卒して

年僅に四十とあれば、この闊闊には非ず。闊闊不花の不花を略きたるにもある

まじ。元史に「闊闊不花者、按攤脱脱里氏、爲人魁岸有膂力、以善射知名とありて、太

祖太宗に事へて、功多し、その殺を嗜ま) 者別 (別速惕氏、四狗の一人、卷四よ

ざるは、塔塔兒人などに珍しき人なり。者別 (別速惕氏、四狗の一人、卷四よ

蘇特の哲伯諾顔とあり。元史には紀傳處處にその) 兀都台 (外には) 巴刺扯

名見ゆれども、專傳なし。洪鈞の哲別補傳甚だ佳し。兀都台 (外には) 巴刺扯

兒必 (即札刺亦兒の巴刺、薛扯朶抹黑の子、阿兒孩合撒兒の弟、卷三) 客帖 (十

速別額台

に) 速別額台 (兀嚕罕氏、四狗の一人、卷三より見えたり。元史速不台の傳に

秃亦迭格兒
薛潮兀兒

者迭兒

幹刺兒駙馬
輕吉牙歹

不合駙馬

忽哩勒

阿失黑駙馬

只乃（元史列傳の按竺邇と音似たれども、按竺邇は汪古惕氏にして、世世雲中祖に歸したりとありて、辛未は、この年より五年後なれば、この阿只乃に非ず。太祖に從ひ、黒河の水を飲み、元史に傳ある幹魯納台の阿朮魯も、阿只乃と音や、

近（分らず）秃亦迭格兒（これ分らず）薛潮兀兒（即ち薛赤兀兒、豁囉刺思氏、卷三に見

微兀兒（爲必閣赤とある薛微兀兒なるべし）者迭兒（卷六の初に、卯溫都兒山の前を過ぐ

兒、親征録に也迭兒とあり）

幹刺兒古咧堅（古咧堅は、駙馬なり。こ）輕吉牙歹（幹勒忽訥兀惕氏、

不合古咧堅（札刺亦兒氏古溫兀阿の子、木合黎の弟、卷四

元勳、乃成吉思太師國王、沒黑助者、小名也。云云。弟二人、長曰抹歌、見在成吉思處、爲

護衛。次曰帶孫郡王、每隨侍焉とあり。抹歌は即ちこの不合なり。元史木華黎の傳

には、帶孫ありて不合なし。不合の駙馬となれるを見れば、元明善の東平忠憲王

の碑に「親連天家、世不婚姻」と云へるは、誤れり。札刺亦兒は、孛兒只斤の同族に非

ず。その皇室と婚したる人少）忽哩勒（幹難河の戰に、泰赤兀惕の一將、親征録

とはあるまじ。憲宗の元年に奔れる人と名同じけれども、蒙古の功臣に列するこ

曲憐は、この忽哩勒なるべし）

阿失黑古咧堅（後文に塔該阿失黒の管す

阿失黒は、速勒都思の）合歹古咧堅（元史公主表延安公主位の處に、火魯公

塔該と同族なるべし）

征録癸酉南征の役に「怯台哈台二將圍中都」とあり。その怯台は、兀瞻兀惕の客台

にして、哈台はこの合歹なり。また本書卷十二太宗の時に、合歹は、宿衛の番直の

官人八人の中に加はれり。また多遜の史に、庫余克汗（定宗）疾ありて、政事は大

鎮海喀答克二人に委ねたりしが、忙古汗（憲宗）即位の初、諸王叛を謀りて、黨與の

誅せられし時、二人も殺されたりとありて、憲宗紀にも、諸王を亂に誘へりとして

魯公主は、公主表に誰の女とも云はず。食貨志に「大雷公主」と云へり）赤古古咧堅（親征録赤渠駙馬、元史太祖紀駙馬赤駒、太宗紀駙馬赤苦、公主表鞏國公主位の

處に「秃滿倫公主、適赤窟駙馬」とありて、何帝の女とも何姓の人とも云はざれ

ども、喇失惕額丁の史には、太祖の第四の女、秃馬命は、翁吉喇惕の阿勒赤那顏の

子、赤古古兒干に嫁ぎたりと云へり。阿勒赤は、德薛禪の子、光獻皇后の弟、元史に

又蒙韃備録に「三公女曰阿五、嫁尙書令國舅之子」と云ひて、その尙書令のことは

阿勒赤駙馬

喇惕氏（親征録に弘吉刺部安赤那顏三千騎、元史太宗紀に按赤那顏成宗紀

不禿駙馬

阿刺忽失的吉惕
忽哩駙馬

薛禪の傳に曰く子曰按陳從太祖征伐凡三十二戰云云歲丁亥賜號國舅按陳那
 顏云云丁酉賜錢二十萬緡有旨弘吉刺氏生女世以爲后生男世尙公主每歲四時
 孟月聽讀所賜旨世世不絶と云ひ公主表魯國公主位も魯國大長公主也速不花
 容宗女也適皇國舅魯忠武王按嗔那顏子幹陳駙馬魯國公主薛只干太祖孫女適
 幹陳弟納陳駙馬より始まりて阿勒赤の皇女を娶れることは元史に見えずさ
 れども多遜の史に阿赤の本の名は蒼兒吉古兒干なりしが人は皆阿赤那顏と
 云ふとありて阿赤は即ち阿勒赤古兒干は即ち古咧堅なれば國舅の號を賜は
 れる前は古咧堅と呼ばれて太祖の駙馬なりしを本傳も公主表も書き漏せる
 なり)不禿古咧堅なる一の千戸の亦乞咧思氏(即ち不圖卷三より見
 征錄に亦乞列部孛徒駙馬二千騎黑韃事略に撥都駙馬とあり元史本傳に孛禿
 亦乞列思氏善騎射太祖妻以皇妹帖木倫皇妹薨復妻以皇女火臣別吉と云ひ公
 主表昌國公主位の處に昌國大長公主帖木倫烈祖女適昌忠武王孛禿主薨繼室
 以太祖女昌國大長公主火臣別吉と云へり帖木倫は卷一卷二にも喇失惕の史
 にもみな帖木倫とあり火臣別吉は卷五に豁真別乞親征錄に火阿真伯姬喇失
 惕の史に長女火真別吉とあり蒙韃備錄に成吉思皇帝女七人長公主曰阿真驚
 拽今嫁豹突駙馬とある阿真驚拽は)汪古惕の阿刺忽失的吉惕忽哩
 即ち豁真別乞豹突は即ち不禿なり)汪古惕の阿刺忽失的吉惕忽哩
 古咧堅なる五の千戸の汪古惕氏(この名は卷六より見えて今始め
 く既平乃蠻從下中原復爲嚮導南出界垣太祖畱阿刺兀思剔吉忽里歸鎮本部爲
 其部眾昔之異議者所殺長子不顏昔班併死之其妻阿里黑攜幼子孛要合與姪鎮

國逃難夜遁至界垣告守者縋城以登因避地雲中太祖既定雲中購求得之賜與甚
 厚以其子孛要合尙幼封其姪鎮國爲北平王鎮國薨子聶古台襲爵尙容宗女獨木
 干公主略地江淮薨于軍孛要合幼從攻西域還封北平王尙阿刺海別吉公主
 明容有智略車駕征伐四出嘗使畱守軍國大政諮稟而後行師出無內顧之憂公主
 之力居多と云ひ公主表趙國公主位の初に趙國大長公主阿刺海別吉太祖女適
 趙武毅王孛要合とあり然るに蒙韃備錄には二公主曰阿里黑百因俗曰必姬夫
 人曾嫁金國亡臣白四部死寡居今領白韃鞨國事日逐看經有婦女數千人事之征
 伐斬殺皆自己出と云ひ多遜の史には成吉思汗第三の女阿刺海別吉を阿刺忽
 失的斤忽哩に妻せんとしたるを年老いたりとて辭みて兄の子鎮古に妻せら
 れんことを願ひ阿刺海は鎮古に嫁ぎて訥古台を生み訥古台は拖雷の女を娶
 れり)と云へり洪鈞思へらく據孟珙言則元史所謂畱守乃是掌汪古部事非太祖
 本部太祖西征幹赤斤居守元祕史西游記可證別無阿刺海居守之語作此傳者誤
 會也史言孛要合幼從征西域歸乃封王尙主而孟珙之使蒙古作蒙達備錄在辛巳
 歲正太祖在西域追札闌丁之時不應即云公主夫死寡居今案西域書之鎮古即鎮
 國之訛訥古台即鎮國子聶古台尙容宗女語同元史反覆推求必是公主先適鎮國
 夫死遂自領汪古部事繼而夫弟從弟孛要合自西域還尙公主鎮國子聶古台爲
 公主出而孛要合之三子則公主進姬妾以生西域書但其前元史但言其後而蒙
 達備錄則適當其中蒙古不諱再醮理宜然也)とて三書の異なる處を巧に解釋せ
 り又黑韃事略に蒙古の十七頭項の名を擧げてその一人なる白駝馬の原注に
 を引きて公主再醮の確證とし白駝ト即白四部亦即史之鎮國何以一名不得其
 考と云へり洪鈞又曰く西域書謂太祖欲以女適阿刺兀思剔吉忽里辭以年老請

阿刺合別乞再醮
の説

阿刺合別乞三醮の說

以兄子訂婚。阿刺兀思之兄先爲汪古部主。汪古部爲金守長城邊界。兄死弟嗣。而金主仍禮遇其兄子。蒙古達備錄所以云金國亡臣也。汪古之義爲邊牆。云是契丹語。蓋即金語。史言金源氏。誓山爲界。阿刺兀思以一軍守其衝要。語同。西域書紀。阿刺兀思死。難之故。與元史異。語繁不載。又云阿刺海別吉年歲在窩闊台拖雷之間。則是太宗妹。睿宗姊。と云へり。洪鈞の此等の說は考證甚だ精にして確なり。余これに依りて猶考ふるに阿刺海別吉は祕史卷十なる阿刺合別乞にして前に鎮國に嫁ぎたるのみならず。猶その前に阿刺忽失に嫁ぎたるべし。多遜は阿刺忽失の辭みたることを云へども。辭みたらんには古咧堅即ち駙馬と呼ばるべき筈なし。卷十に阿刺合別乞を汪古惕に與へたりとあるは阿刺忽失に與へたるなり。蒙韃備錄に阿里黑百因とあるは即ち阿刺合別乞の訛なれば元史に阿刺兀思の妻阿里黑と云へるは即ちこの阿刺合別乞の妻とす。阿刺合別乞の妻とすはまざるのみならず。父死してその後母を妻とし。兄死してその嫂を妻とするは。匈奴突厥を初として。塞北の俗皆然り。李要合は蓋阿刺合の生めるにはあらで。前妻の子なるべし。阿刺忽失の殺されたる時は李要合なほ幼かりし故に阿刺合は夫の姪なる鎮國に嫁ぎ。鎮國死して後に我が子の如き李要合を夫としたるなり。蒙古源流に滿都古勒汗の寡婦滿都該徹辰哈屯は節を守りて他族に嫁がず。夫の從曾孫姪の孫なる達延汗を育ててその哈屯となれる奇談あり。漢人ならば瀆倫と云ふべきことを蒙古にては貞烈とするほどなれば阿刺合の三醮の碑に至りては曾祖母と祖母と同じ人なりとは直書しかねて阿刺忽失の妻をば曾祖妣阿里黑。李要合の妻をば祖妣皇曾祖姑阿刺海別吉と書きて別人の如くし。阿里黑は何姓とも誰の女とも云はず。只まぎらかせり。元史の本傳は

九十五の千戸

全くこの碑文に本づける故に筆執れる人も阿林の民より外なる忙豁勒の國の千戸の官人を成吉思合罕の名ざしたる九十五の千戸の官人成れり。(林の民とは幹亦喇惕乞兒吉速惕などを云ふ。卷十に見ゆ。阿勒赤不禿阿刺忽失的吉惕忽哩の三人は三人にて十の千戸となりたれば千戸は九十五なれども。功臣は八十八人なり。明譯に除駙馬外復授同開國有功者九十五人爲千戸とあり。駙馬を除くも九十五人も皆譯し誤りなり。又元史赤赤台の傳に朔方既定。擧六十五人爲千夫長とある六は九の誤寫又は誤刻にしてこれも千戸の數九十五なるを功臣の數と誤解し) たるなり。

八十八の功臣

功臣の恩賞

古咧格惕(駙馬なる古)一處なる人人に(この句の意明かならざ馬を除きて九十五の功臣ありと誤解せり。蓋この句の意は駙馬を込めたる)諸功臣にと云ふことにて功臣の外なる駙馬を加へてと云ふことには非ず)又成吉思合罕勅ありこの名ざしたる九十五の千戸の官人に千戸を任したるその内にて功ある者に恩賞を與へん。成吉思合罕勅あり(この句は原本にては功ある者の上にて在り。恐らくは傳鈔の間に起れる錯誤ならん。今假にこゝ

者死故莫敢詐僞雖無字書自可立國「また」「見其法最好說謊者死」とあり。謊は詐僞なり。札兒忽を掌る者を札兒忽赤と云ひ漢語に譯すれば斷事官と云ふ。失吉忽禿忽は初任の斷事官なり。馬祖常の撰れる月合乃の碑に「國朝天造之始總裁庶政悉由斷事官」と云ひ元史百官志一に「元太祖起自朔土統有其眾部落野處非有城郭之制國俗敦厚非有庶事之繁惟以萬戶統軍旅以斷事官治政刑任用者不過一二親貴重臣耳」と云ひ元史紀事本末に「太祖時設官甚簡以斷事官爲至重之任位三公上」ともあり。又百官志三に「國初未有官制首置斷事官曰札魯忽赤會決庶務凡諸王駙馬投下蒙古色目人等應犯一切公事及漢人姦盜詐僞蠱毒厭魅誘掠逃驅輕重罪囚及邊遠出征官吏每歲從駕分司上都存留住冬諸事」又「普悉掌之」とあるは漢地を并せたる後の職掌をも兼ね擧げたるなり。

青册

民の割附を割附けたる事を裁斷を裁斷したる事を青き送卜帖兒（册）に書物に書きて記録して子孫の子孫に至るまで失吉忽禿忽の我に謀りて論ひて青き書物白き紙に記録したるを勿改めそ改むる人は罪あるこなれ」と勅ありき。失吉忽禿忽言はく「我が如き末の弟は一樣に齊等に分前をいかんぞ取らん恩賜せば土の牆ある城より賜はらん事を合

失吉忽禿忽の謙讓

罕の恩賜にて知しめせ」と奏しけり。（土の牆ある城とは、兀惕などの都邑を云ふ。兀惕唐と信長公に申したるに意同じ。）この言につき「己が身を汝は斟酌せり（身の程を善く考へたり）。汝知れ（自ら取りて）」と宣へり。失吉忽禿忽は己にかく恩賜せしめ了へて出でて孛斡兒出木合黎等の官人を喚びて入らしめけり。

蒙力克の功

そこに成吉思合罕勅ありて蒙力克額赤格に宣はく「生るるご共に生れたる長くるご共に長けたる福ある慶ある汝の功助は幾ばくもありしぞ。その内王罕額赤格桑昆安荅二人我を賺して喚びたる時往く間に蒙力克額赤格の家（忽亦命）に宿りたれば蒙力克額赤格汝止めざりせば渦ある水の裏に紅なる火の裏に入れらるゝなりしぞ。彼の功を善く想ひて